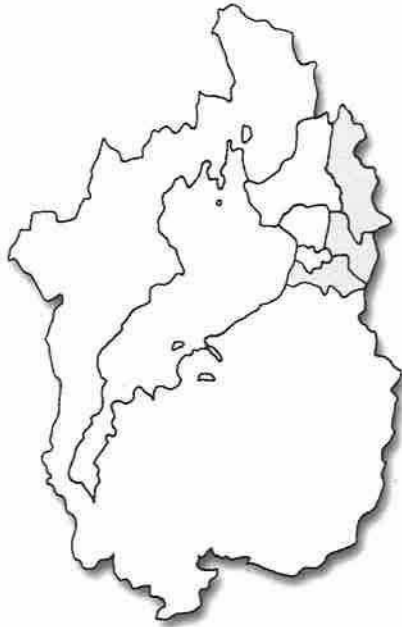


伊吹町文化財調査報告書第19集

国指定史跡

きょうごくし いせきぶん ぷちようさ ほうこくしょ
京極氏遺跡分布調査報告書

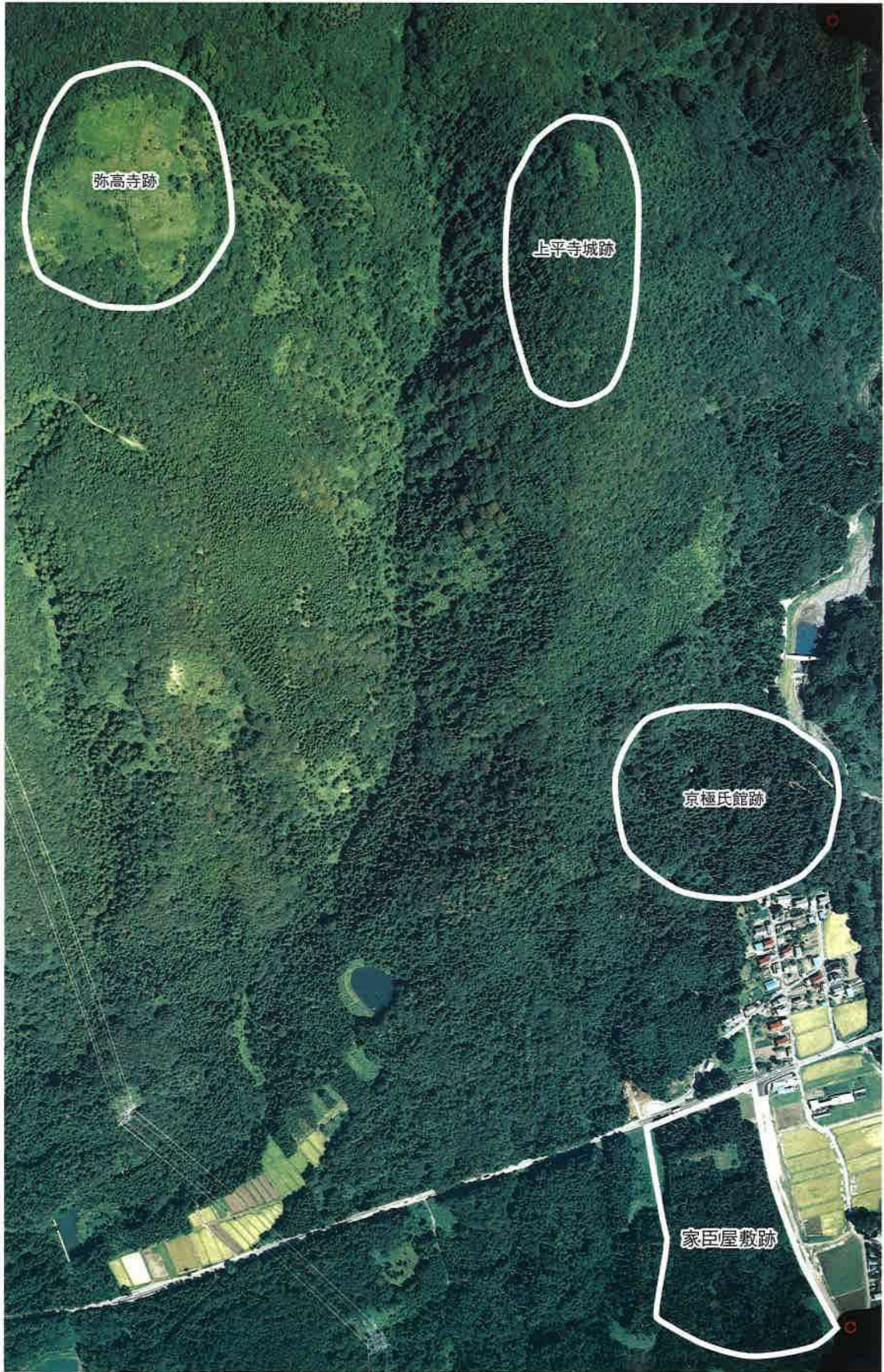
—京極氏城館跡・弥高寺跡—



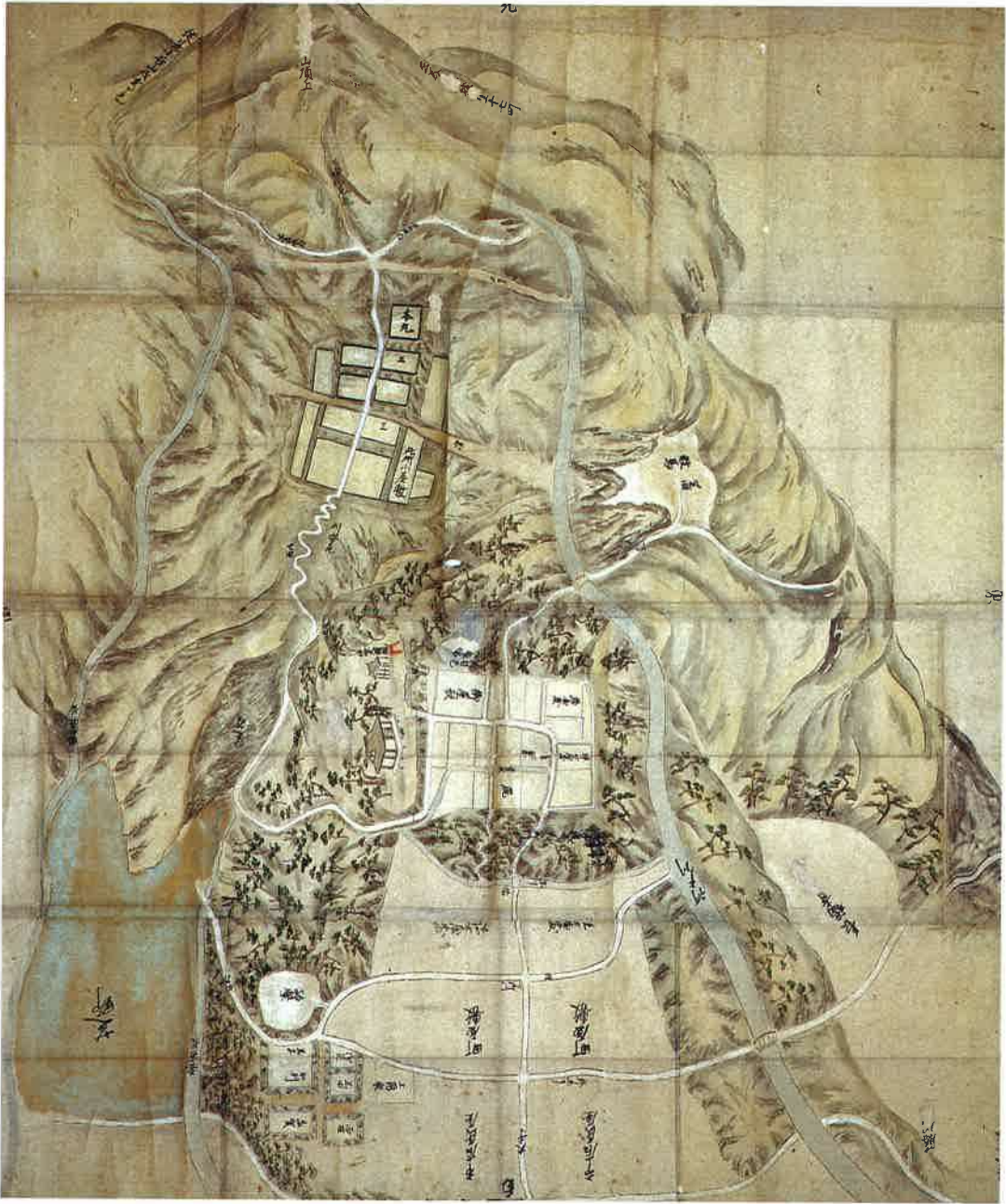
2005. 3

滋 賀 県

米原市教育委員会



巻頭カラー図版1 京極氏遺跡空撮



巻頭カラー図版2 上平寺城絵図



巻頭カラー図版 3 京極氏館跡庭園

序

米原市は、滋賀県坂田郡の伊吹町・山東町・米原町が、平成17年2月14日に合併して誕生しました。

新市は、伊吹山系・霊山山系を中心とした自然に恵まれ、縄文時代から連綿と続く数多くの歴史的遺産や先人たちが営々と築きあげた優れた伝統文化にまつまれたまちです。

平成16年2月27日、伊吹山腹と山麓に展開する京極氏の関連遺跡群が「京極氏遺跡－京極氏城館跡・弥高寺跡－」の名称で、国の史跡に指定されました。これは、地元の弥高・上平寺両地区が続けてこられた保存活動が実った結果です。

遺跡は、北近江の戦国大名京極高澄が16世紀初頭に整備したもので、庭園のある守護館、家臣屋敷群、城下町、詰の城、城郭として利用された山岳寺院跡が良好に残り、指定理由にもあるとおり「わが国の戦国大名のあり方がわかる遺跡」として注目されています。旧伊吹町では、平成16年度より調査整備委員会を立ち上げ、今後の保存管理、整備、活用の検討がはじめられました。

本書は、平成7年度から継続して行ってきた測量などの調査結果をまとめたものです。調査によって主要な遺跡の全体像が明らかになり、今後の調査のための基礎資料となりました。

今後、京極氏遺跡は、地元地区のみならず米原市のシンボルとして、また、かけがえのない歴史遺産として認識されることを願っています。そのために、歴史学習の場、憩いと交流の場、自然観察の場として、山頂までを含めた壮大な構想を作り上げていかななくてはなりません。

最後に、調査に対しご指導とご協力をいただいた地元区の皆さんをはじめ、地権者、関係機関、関係各位に厚くお礼申し上げます。

平成17年3月

米原市教育委員会

教育長 瀬戸川 恒雄

例 言

1. 本書は、滋賀県米原市上平寺・弥高・藤川に所在する国史跡「京極氏遺跡－京極氏城館跡・弥高寺跡－」の詳細分布調査報告書である。
2. 本調査は、文化庁・滋賀県の補助を受けて、平成7年度から平成16年度に、伊吹町教育委員会が実施した（伊吹町は平成17年2月14日に合併して米原市となる）。
3. 遺跡群の名称は、当初「上平寺城跡遺跡群」として、平成9年度・11年度・13年度に概要報告書Ⅰ～Ⅲを刊行したが、今回、本報告書をまとめるにあたって指定名称である「京極氏遺跡」（指定は平成16年2月27日）を表題とした。
4. 調査体制は以下のとおりである。

調査主体 伊吹町教育委員会

	平成7年度	平成8年度	平成9年度	平成10年度
教 育 長	石河竹二郎	石河竹二郎	石河竹二郎	石河竹二郎
生涯学習課長	山崎 完一	山崎 完一	山崎 完一	堀内 安夫
同 課長補佐	鈴木 雄市	鈴木 雄市	鈴木 雄市 伊富貴鉄雄	伊富貴鉄雄
調査担当(主任)	高橋 順之	高橋 順之	高橋 順之	高橋 順之
	平成11年度	平成12年度	平成13年度	平成14年度
教 育 長	石河竹二郎	石河竹二郎 松寫 膽龍	松寫 膽龍	松寫 膽龍
生涯学習課長	堀内 安夫	伊富貴孝司	山崎 完一	山崎 完一
同 課長補佐	尾木義比己	高橋 兵太	高橋 兵太	膽吹 邦一
調査担当(主任)	高橋 順之	高橋 順之	高橋 順之	(係長)高橋 順之
	平成15年度	平成16年度		
教 育 長	松寫 膽龍	松寫 膽龍		
教 育 次 長	伊富貴孝司	伊富貴孝司		
生涯学習課長	伊富貴孝司	伊富貴孝司 (～9月) 福永 善次 (10月～)		
同 課長補佐	福永 信夫	福永 信夫 (～9月)		
調査担当(係長)	高橋 順之	高橋 順之		

調査作業員 的場育代・世一みゆき・平山勝子・後藤美智子ほか地元の方々

5. 本書をまとめるにあたって、下記の方々から指導、助言を得た。記して厚く感謝の意を表する次第である（順不同・敬称略）。

太田浩司・大沼芳幸・桂田峰男・木戸雅寿・古賀信幸・小島道裕・高瀬要一・
中井 均・藤村 泉・藤原武二・松下 浩・水野和雄・宮崎幹也・山崎清和・
山寄仁生・用田政晴・円城伸彦・後藤幸司

6. 本書で使用した標高は、東京湾平均海面高度である。

7. 本書は、高橋順之が執筆・編集した。

8. 京極氏遺跡の地形測量には、金城測量設計(株)(平成7～9年度)・(有)本庄設計(10～14年度)・(株)弘成(15・16年度)の協力を得た。弥高寺跡については、昭和60・62年度の測量図(国際航業(株))と接合を行なった。

9. 調査記録および出土品は、米原市教育委員会で保管している。出土遺物の実測、復元、図面の整理、作成については、的場育代・世一みゆき・平山勝子・後藤美智子の協力を得た。

目 次

序

例言・凡例

第1章 遺跡の環境	1
第1節 自然環境	1
1 遺跡周辺の地形	1
2 遺跡周辺の地質と自然	2
第2節 歴史的環境	3
1 坂田郡の山岳寺院	3
2 弥高寺および上平寺の歴史的概要	4
3 坂田郡の城郭	6
4 伊吹町の城郭	10
第2章 国史跡「京極氏遺跡」とこれまでの調査	12
第3章 調査の概要	17
第4章 分布調査	19
第1節 京極氏遺跡の現状	19
第2節 京極氏館跡	21
1 全体構造	21
2 京極氏館跡	25
3 伊吹神社・京極氏一族の墓所	28
4 蔵屋敷跡・弾正屋敷跡	31
5 隠岐屋敷跡・厩跡	31
第3節 京極氏庭園跡	35
1 全体構造	35
第4節 家臣屋敷跡	37
1 全体構造	37
2 駒繫跡	41
3 若宮氏・加州氏屋敷跡	41
4 多賀氏屋敷跡	43
5 浅見氏屋敷跡・黒田氏屋敷跡・上臈衆屋敷	44
6 西野氏屋敷跡	44
第5節 上平寺城跡	47
1 全体構造	47

2	主 郭	52
3	虎 口	52
4	豎堀群	54
第6節	弥高寺跡	56
1	全体構造	56
2	本坊跡	66
3	門 跡	67
4	大門跡	69
5	行者谷	69
6	薬師谷	70
7	墓地跡	71
8	大堀切周辺	71
9	南西尾根部	73
10	坊跡をめぐる道	73
第5章	表採調査	76
第6章	発掘調査	78
第1節	発掘調査の経過	78
第2節	発掘調査の結果	78
第3節	小 結	79
第7章	付論『上平寺城絵図』保存修復報告	85
第8章	ま と め	91

挿 図 目 次

第 1 図	遺跡周辺地形図
第 2 図	京極氏遺跡位置図
第 3 図	坂田郡内の城館跡分布図 7
第 4 図	伊吹町内の城館跡分布図 9
第 5 図	発掘調査区位置図14
第 6 図	発掘調査区遺構平面図15
第 7 図	測量範囲位置図18
第 8 図	京極氏館跡地形図22
第 9 図	京極氏館跡遺構図23
第10 図	京極氏館跡地籍図24
第11 図	京極氏館跡部分の絵図24
第12 図	京極氏館跡遺構図26
第13 図	京極氏館跡の推定模式図27
第14 図	伊吹神社周辺遺構図29
第15 図	蔵屋敷周辺遺構図30
第16 図	弾正屋敷遺構図31
第17 図	隠岐屋敷・厩跡遺構図32
第18 図	京極氏庭園跡平面図34
第19 図	京極氏庭園跡景石立面図36
第20 図	家臣屋敷跡地形図38
第21 図	家臣屋敷跡地籍図39
第22 図	家臣屋敷部分の絵図39
第23 図	駒繫跡遺構図40
第24 図	若宮氏・加州氏屋敷跡遺構図42
第25 図	多賀氏屋敷跡遺構図43
第26 図	浅見氏・黒田氏屋敷跡遺構図45
第27 図	西野氏屋敷跡遺構図46
第28 図	上平寺城跡部分の絵図48
第29 図	上平寺城跡地形図49
第30 図	上平寺城跡遺構図50
第31 図	主郭遺構図53
第32 図	虎口遺構図54
第33 図	竪堀群遺構図55

第34図	弥高寺跡地形図	57
第35図	弥高寺跡遺構図	59
第36図	本坊跡遺構図	67
第37図	門跡・大門跡遺構図	68
第38図	行者谷遺構図	70
第39図	薬師谷遺構図	70
第40図	大堀切周辺遺構図	72
第41図	南西尾根部遺構図	74
第42図	坊跡郡を結ぶ道想定図	75
第43図	表採遺物実測図	77
第44図	調査地位置図	79
第45図	検出遺構平面図	80
第46図	土師皿一括投棄遺構実測図	80
第47図	出土遺物実測図（1）	81
第48図	出土遺物実測図（2）	82
第49図	出土遺物実測図（3）	83
第50図	出土遺物実測図（4）	84

写真目次

写真1	「上平寺戦国浪漫のゆうべ」のようす	20
写真2	「近江中世山城跡のろし駅伝」のようす	20

図版目次

巻頭カラー図版

図版 1 京極氏遺跡空撮

図版 2 『上平寺城絵図』

図版 3 京極氏館跡庭園

図版

図版 1 伊吹山全景・上平寺空撮（古写真）

図版 2 京極氏遺跡空撮（南から）・家臣屋敷跡と城下

（京極氏館跡）

図版 3 館跡入口（内堀）・弾正屋敷跡・隠岐氏屋敷跡

図版 4 蔵屋敷跡・京極氏館跡・一族の墓地

図版 5 伊吹神社鳥居・伊吹神社・風呂屋谷

（京極氏館跡庭園）

図版 6 庭園全景

図版 7 虎石

（家臣屋敷跡）

図版 8 駒繫跡・多賀氏屋敷跡・黒田氏屋敷跡

（上平寺城跡）

図版 9 上平寺城跡遠景・弥高寺跡遠景

図版 10 主郭・曲輪 4・曲輪 10

図版 11 大堀切㊦・虎口㊧・豎堀㊨

図版 12 坊跡群・本坊跡・大門跡

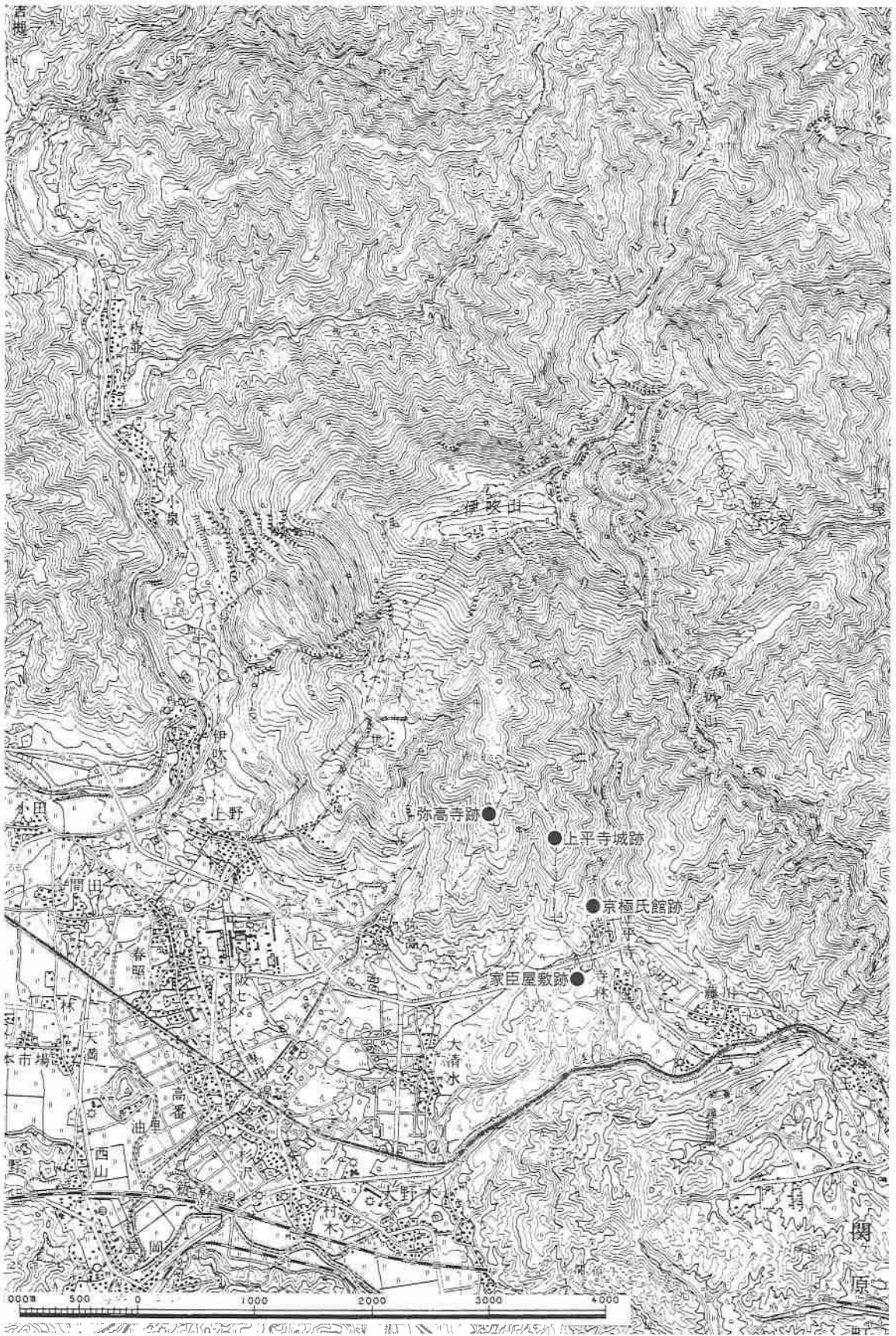
図版 13 大門跡空堀・削平地 83・大堀切㊦

図版 14 豎堀㊩・入定窟・宝篋印塔

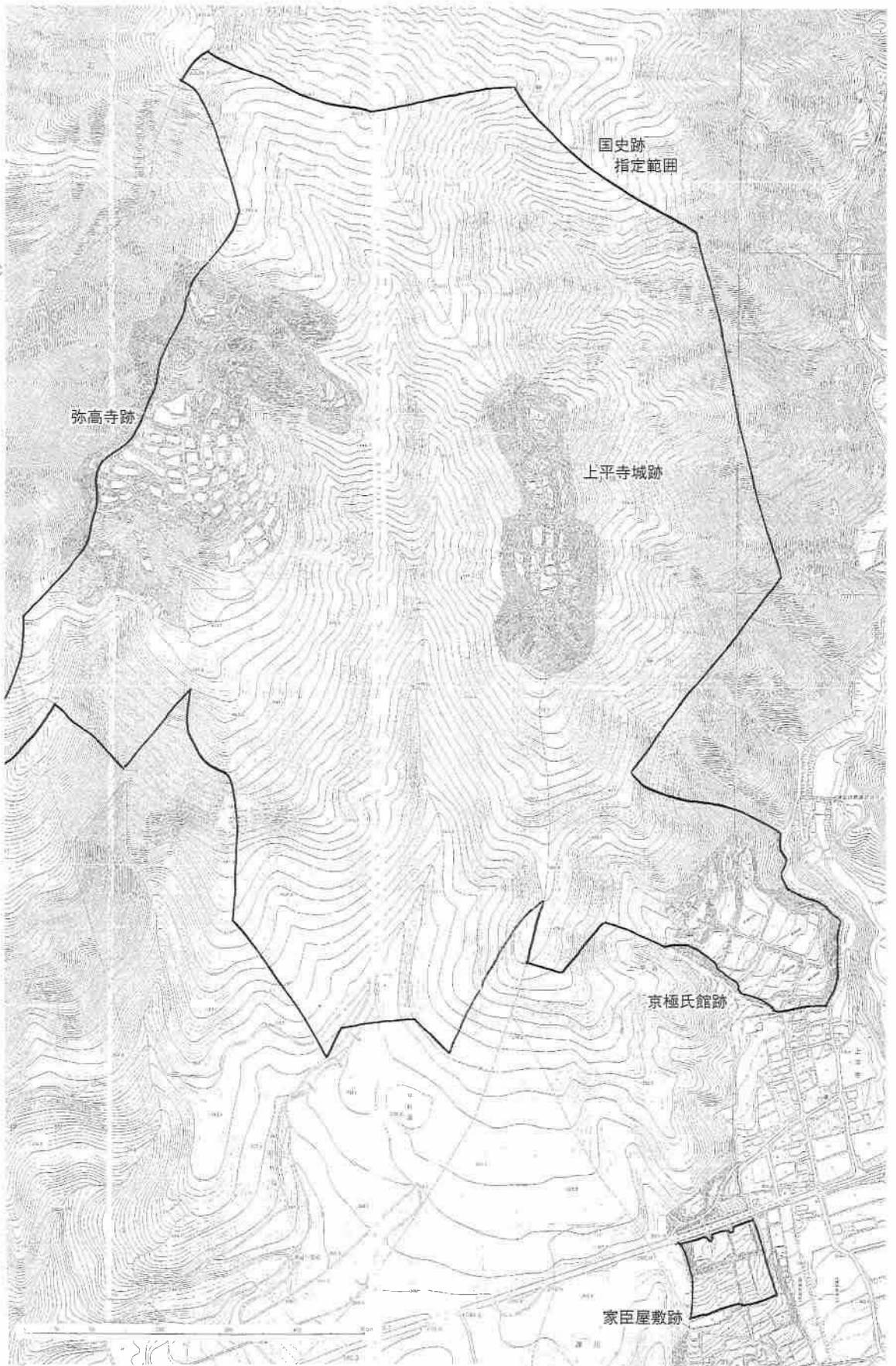
（発掘調査）

図版 15 作業風景・トレンチ全景・遺構検出状況

図版 16 遺構検出状況・土師皿一括投棄遺構



第1図 遺跡周辺地形図



第2図 京極氏遺跡位置図

第1章 遺跡の環境

第1節 自然環境

1 遺跡周辺の地形

坂田郡伊吹町は滋賀県の北東端に位置し、東および北は伊吹山地をはさんで岐阜県となり、南から不破郡関ヶ原町、揖斐郡春日村・坂内村に接している。西は七尾山系をはさんで滋賀県東浅井郡浅井町。南は伊吹山西南麓の扇状地から山東盆地となり、坂田郡山東町に接しており、その西には横山丘陵があり、長浜市さらに琵琶湖へと続く。町域は東西約7.0km、南北約22.7kmと細長く、面積109.17km²の約85%を山林がしめる。北中部の集落は、伊吹山地とこれに対峙する七尾山系がつくる姉川溪谷沿いに点在し、南部および京極氏遺跡がある東部の集落は、伊吹山から流れ出る数本の河川が形成した扇状地の扇央部や扇端部に立地している。

伊吹山地は、滋賀県の最高峰伊吹山（標高1377m）を南端にして、北へ国見山（1126m）、虎子山（1183m）、射能山（1259m）、貝月山（1234m）と連なり、さらに県下第2位の金糞岳（1317m）をはじめ標高1000～1200mの稜線や峰が、滋賀・福井・岐阜三県にまたがる三国岳（1209m）へと続く地壘性の山地である。三国岳からは越美山系となり、遠く越前・美濃国境の能郷白山へと続く。伊吹山地は、滋賀県側の姉川水系と岐阜県側の揖斐川水系の分水界であり、古くから近江と美濃の国境であった。

町内の河川は、姉川・天野川・藤古川（河戸川）の3水系に分けることができる。姉川水系は、新穂山（1067m）に源をもつ姉川が、伊吹山地と七尾山系の間の溪谷で多くの支流を集めながら町内を約20km弱にわたって南北に貫流し、伊吹町伊吹付近で大きく西へふれ、山東町・浅井町の水田を潤しながら、横山丘陵北端の龍ヶ鼻付近で長浜平野に出て琵琶湖へ流れ込む。伊吹山西南麓の天野川水系は、扇状地を流れる下る弥高川・油里川・政所川が扇端部の湧水を集めて天野川に合流し琵琶湖にそそぐ。藤古川は、町内6kmの間を伊吹山南側中腹の標高720mから一気に流れ下って溪谷を作り、南東に流れを変えて関ヶ原盆地に入り、牧田川、揖斐川を経て伊勢湾にそそぐ。県内の諸河川が琵琶湖に流れる中で、特異な例としてあげられる。

今回報告する京極氏遺跡は、伊吹山南麓に位置し、藤古川上流域の西側扇央部に位置する上平寺を中心とする山腹及び山麓に所在している。上平寺は藤古川扇状地の扇頂部付近にあたり、伊吹山地に取り込まれたわずかに広がる高台に位置する集落である。中心部付近の標高は315mを測る。集落の西は伊吹山から延びる尾根が台地状に張り出している。東側は藤古川の急峻な断崖で、深さ約30mを測る。南は寺林の集落を経て、扇状地上に水田が広がり、関ヶ原峡谷になる。東には藤古川をはさんで藤川集落がある。ここは北国脇往還の宿場町で、中山道関ヶ原宿で分岐して伊吹山麓を通り、北国街道木之本宿につながる、

東海と北陸を結ぶ重要なルートである。また、藤古川の溪谷をさかのぼり、伊吹山頂から南東に延びる稜線の鞍部の峠にとりつく上平寺越は、近江と美濃を結ぶ古くからの間道の一つと考えられる。さらに、東国と畿内を結ぶ東山道（中山道）にも近く、地理的に交通の要衝として重要な位置にある。

2 遺跡周辺の地質と自然

伊吹山地の地質は、古生層の石灰岩相と非石灰岩相の2つに分けられる。石灰岩相は伊吹山と南西部の丘陵に分布している。遺跡が立地する上平寺の北西は、伊吹山の南に張り付く通称弥高山（標高904m）で、この山塊は伊吹山の石灰岩層とは異なり砂岩層で形成されている。藤古川対岸は砂岩および粘板岩の山塊である。南は伊吹山南麓に広がる扇状地堆積物層が発達しており、古生層岩石の礫を主として、粘土をはさんでいることが多く、時代は洪積世新期のものと考えられている。藤川地区の県境付近には、約130万年前の古琵琶湖層群が堆積している。この層は主として砂礫層からなっており、少量の泥層を含み、この中にコメツガ・ハンノキ・ヒメバラモミなどの植物遺体が含まれている。関ヶ原方面から古琵琶湖に水が流入して堆積したものと推定されている。

伊吹山付近は、若狭湾と伊勢湾が迫ってくる本州でもっとも狭い部分にあたり、まわりは中部山地と霊仙・鈴鹿山地、丹波山地に囲まれている。この狭い部分を目指して、冬は若狭湾から北西の季節風が、夏は伊勢湾から南東の風が入ってくる。伊吹町の気候は、ほとんどの地域が日本海側気候区北陸型に属すといわれ、気温が低く降水量が多いうえ、特に冬期の積雪が多いことが特徴とされている。町の南部地域は最高気温と最低気温の差が北中部にくらべるとやや少なく、平均気温もやや高くなって降水量も少なくなるが、上平寺周辺は、伊吹山系と霊仙・鈴鹿山系との接点に位置するとともに関ヶ原の狭隘を吹き抜ける風の道にあたっているために、積雪量が多く豪雪地帯となっている。

第2節 歴史的環境

1 坂田郡の山岳寺院

伊吹町が属す坂田郡には、伊吹山そして霊仙山（標高1048m）という、山岳信仰の霊場とされるふたつの名山がある。どちらにも、修験道の開祖といわれる役行者の伝承があり、古代以来の山岳信仰と山林修行の伝統、山に対する信仰の広がり、この地域の歴史を理解するための重要な視点である。

伊吹山は古くから、神の宿る神聖な山として信仰を集めてきた。伊吹山の神は、日本武尊の神話でも、英雄タケルを退けた「荒ぶる神」として登場する。平安時代の初めには、比叡・比良・神峯・愛宕・金峯・葛木などの諸山とともに、薬師悔過の修業場として、「七高山」のひとつに数えられた。このころ、山に対する原始的な信仰と、9世紀頃に伝わった密教とが結びつき、厳しい修行の場として、たくさんの寺院が山中に建立されるようになる。このような山岳寺院には、北近江の菅山寺（余呉町）、己高山（木之本町）、大吉寺（浅井町）や、南近江の金勝寺（栗東市）や比叡山延暦寺（大津市）などがあるが、伊吹山の弥高寺跡が最も典型的な姿を留めているといわれている。

9世紀頃、伊吹山の中腹には、伊吹山寺と呼ばれる定額寺院があったことが、記録に見える。定額寺とは、朝廷が認めた寺院のことで、三修という高僧が、伊吹山寺の伽藍の荒廢と法灯の断絶を憂えて、指定を願い、元慶2年（878）に認定された。

「伊吹山寺」とは、弥高護国寺（伊吹町弥高）・太平護国寺（同太平寺）・長尾護国寺（同大久保）・観音護国寺（元の所在地不明）という、俗に伊吹四ヶ寺と呼ばれる寺々の前身的な寺院である。伊吹山の山岳信仰は、この四ヶ寺と、伊夫岐神社（伊吹町伊吹）・三之宮神社（同上野）を中心に展開する。

中世になると、山伏集団が組織化されていく反面、修行者の「一の宿」をめぐる四ヶ寺の勢力争いや、本末寺関係の論争が起こる。正元年間（1260頃）に観音寺が現在地の山東町朝日に移転したあと、弥高寺と太平寺が勢力を誇り、徳治3年（1308）には両寺が本末寺をめぐる論争を起こしている。一説に太平寺を京極家始祖の氏信が城塞化し、その後も京極氏の山城的機能を果たしていたといわれているが、古文書による裏付けは不十分といわざるをえない。しかし、時代は下るが、明応4年（1495）に京極政高が弥高寺から出兵し、翌年には京極高濂が同寺に布陣するなど、京極氏が弥高寺を利用していることを考えると、太平寺も南北朝期の山岳寺院をそのまま利用して立て籠もる拠点としていたのかもしれない。太平寺跡は、現在石灰石採掘などにより詳細は不明であるが、弥高寺跡には空堀や堀切・堅堀群、虎口状の大門跡、土塁など城郭機能と思われる遺構が明瞭に残っている。その後、兵火による焼失もあって、次第に山を降りていったものと考えられる。

さて、伊吹山を定額寺に導いた三修の弟子に、名超童子・松尾童子・敏満童子があり、松尾童子は、米原町上丹生の松尾寺を建立したと伝えられている。

松尾寺山を含む霊仙山には霊仙寺があり、天智天皇の頃に役行者が入山し、養老元年

(717) に越（北陸）の泰澄が本尊を安置したと伝えられている。神護景雲3年（769）には、法相宗の宣教が山麓に、観音寺・安養寺・大杉寺・仏性寺・莊嚴寺・男鬼寺・松尾寺の七別院を建立して、山岳信仰の拠点となった。

2 弥高寺および上平寺の歴史的概要

弥高寺の歴史的環境については、用田政晴氏が『弥高寺跡調査概報』のなかで簡潔にまとめているので、以下これを引用し、一部加筆しながら報告する。

伊吹山は、いくつかの急峻な支尾根を裾に広げているが、南の中山道、現在では東海道本線・名神高速道路の走る近江と東国を結ぶ狭い平野部に向かって伸びている支尾根が、その中でも、眺望といった点では極めてすぐれている。

弥高寺跡は、その支尾根上の標高約650～750mを測る場所に残る。山裾にある現在の弥高集落からは、幅1mばかりの蛇行する山道を、通常の手で1時間余り登ったところであり、逆に伊吹山山頂から下ってくると、角度をかえてややゆるやかになった地点に位置する。

伊吹山寺あるいは、弥高寺に関する沿革等については、すぐれた論考がすでいくつかあり、詳しくは、それに譲ることにするが、ここで簡単に整理しておくことにする。

永正10年（1514）銘の勧進帳では、白鳳2年（673）に役行者が開基し、天平神護年間（764～）に泰澄が再興したと記されている。

『三代実録』元慶2年（878）2月の条には、仁寿年間（851～854）僧三修が七高山の一つ伊吹山に登り、「一精舎」を建てたとあり、その後、「舎堂」が増え、元慶2年2月13日に、国家公認とでも言うべき定額寺に列せられたという。従って、この頃には、寺院として、規模も内容もある程度整備されたものであったと推定される。

次に弥高寺に係る記録は徳治3年（1308）までとぶ。同年4月10日、「伊福貴山弥高太平両寺衆僧和与状」（『観音寺文書』）によると、弥高・太平両寺の間に本末寺の相論があったことがうかがえる。この頃、伊吹四ヶ寺のうち、この両寺が勢力を誇っていたと思われるが、主導権をにぎっていたのは、あくまでも弥高寺であったという説もある。

また、嘉暦2年（1327）正月22日、後醍醐天皇からの令旨が伊福貴社に届き（『観音寺文書』）、その中に、弥高・長尾・観音寺の名が見える。

応永7年（1400）、弥高寺が伊吹山峰入りの新道を開設したことに対し、太平・観音・長尾の三ヶ寺がこれを訴え、熊野三山検校が弥高寺と長尾寺の峰入りの宿役を停止している。応永11年（1404）には、伊崎寺・阿弥陀寺・長命寺・安楽寺・石馬寺・千手寺が峰入りの宿場を弥高寺とすることを決議し、応永13年（1406）、仁和寺の永助法親王がこれを承認している。また、永享10年（1438）には、弥高寺の伊吹社遷宮儀式執行に対し、太平・観音・長尾三ヶ寺が連署名で反対している。これらのことから、この頃伊吹山寺内に勢力争いがあったことがうかがえる。

弥高寺は明応8年（1499）正月24日焼失、再建後、永正9年（1512）6月兵火のため焼

失したというが、天文5年(1536)5月の「伊富貴大菩薩奉加帳」(『伊夫気文書』)、天文9年(1540)「伊吹三宮奉加帳」(『伊夫気文書』)には、まだ弥高寺の坊名が見られ、寺は何らかの形で存続していたようである。

結局、天正8年(1580)山の西麓へ移ったと言われ、現在では天文5年の奉加帳にある悉地院が、弥高寺の法灯を伝えているのみである。

四ヶ寺のうち、他の寺院も、正元年中(1259～1260)に、現在の山東町朝日に移った観音寺を除いて、遅くとも江戸時代には衰退してしまったようである。

なお、弥高寺の「本坊」跡は、登記簿上、周囲が山林であるにもかかわらず、地目が宅地になっており、かなり新しい時期まで何らかの建物が残っていたのではないかと推定され、明治14年に神社庁へ提出された書類に見られる「役行者堂」がこれにあたる。

現在、長尾寺跡は、伊吹町大久保に知られているが、観音寺跡、太平寺跡の詳しい位置は石灰岩採掘等により、不明であるといわざるを得ない。

さて、寺院「上平寺」の歴史的概要については、『駒繫跡・杉本坊墓地発掘調査報告書』に詳しい。ここでは、概要のみ報告する。

京極氏の上平寺城に先行してこの地にあったといわれている上平寺は、神護景雲年間(767～769)に加賀白山の泰澄大師が創建したと伝えられている。伊吹山中に展開した弥高寺などと同様、伊吹山寺のひとつに数えられる寺院で、古くは大谷寺と称し、後に上平寺に改めたという。上平寺創建の位置については、『伊吹町史』のなかで、現在の上平寺城跡を妥当としているが、上平寺集落一帯とも述べられている。確かに、伊吹山寺がすべて伊吹山中腹にあることを考えると、標高約669mの城跡が妥当であろう。しかし一方、上平寺地先には「大谷」「上平」という大谷寺や上平寺を連想させる小字名があり、「覚所谷」「大門西」「大門東」「大門尻」などの寺院関連とも考えられる地名が隣接している。京極氏館を上平寺跡ととらえる見方もある。

永正年間(1504～)京極高濂が上平寺館を整備したあと、上平寺も城主高濂の信仰を受けて隆盛に向ったと考えられるが、当時、守護権力と寺院が、ひとつの地域の中でどのように存在していたのかを伺う資料は見当たらない。江戸初期に描かれた『上平寺城絵図』(伊吹町役場蔵)には、「御屋形」の上段に大きく描かれた「本堂」と「伊吹大権現」の社殿・朱の鳥居が描かれている。

さて、上平寺城館廃絶後の天文5年(1536)の『伊吹大菩薩奉加帳』(伊夫気家文書)には、上平寺の坊院として28の坊院名が記録されている。また、天文7年(1538)、京極家の家臣黒田宗清と多賀昌運が連署で上平寺密蔵院に宛てた文書がある(上平寺区有文書)。密蔵院の寺領を安堵するとともに、「可致奉弔環山寺殿様御菩提之由」とあり環山寺殿(京極高濂)の供養を命じている。上平寺に伝わる文書からは、上平寺城廃絶後この地が再び、多くの僧侶・行者が住む伊吹山修験の一拠点となっていたことがうかがえるのである。

さらに、先の元和2年(1616)の掟書は、「学侶頭密蔵院目代」に伝えられおり、上平寺

が当地方有数の寺院であったとともに、中世以来、密蔵院が上平寺の頭塔であったことがわかる。

しかし、その後は次第に衰退して、今日では杉本坊のみが上平寺の法灯を受け継いでいる。杉本坊には、明治15年に時の尼僧浄願が書き改めた歴代住職の過去帳が残されている。法名記載に先立って、7つの坊名があげられている。いずれも先の奉加帳には無い坊名で、すくなくとも江戸初期まで塔頭であった密蔵院の記載もない。延享2年(1745)十四世の法印光昌大和尚の頭には「当寺中興」、脇には「伊吹山上平寺杵本坊住」と但し書きがあり、『伊吹町史』では、この代に杉本坊が密蔵院にかわり上平寺の塔頭になったと述べている。

3 坂田郡の城郭

ここでは、北近江の中世史を概観するとともに、その時々登場する郡内の主要な城館を織り込んでいきたい。

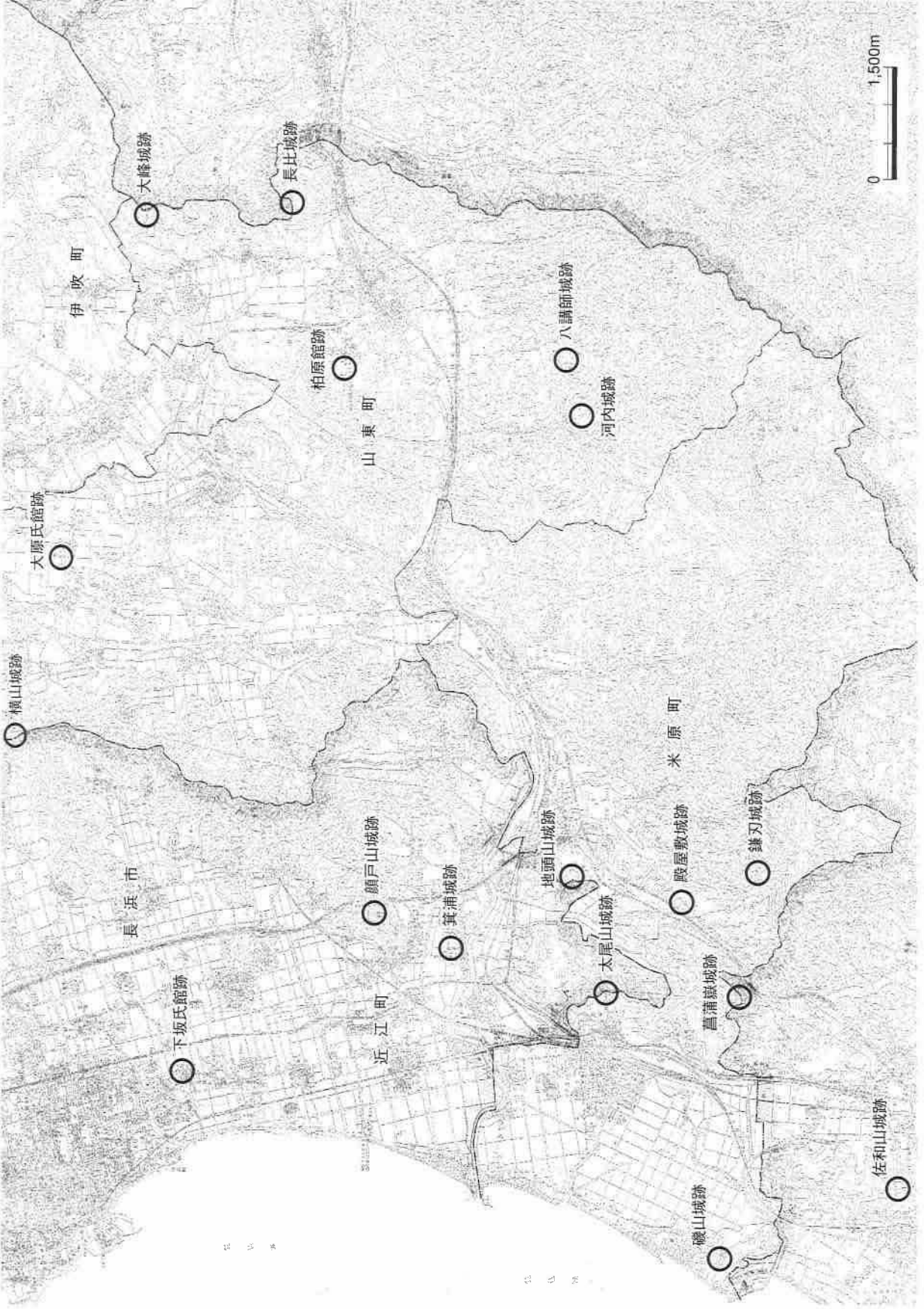
鎌倉時代、近江守護職を代々世襲していた佐々木氏は、仁治2年(1241)、信綱の息子の代に四氏に分流し、大原氏、高島氏、六角氏、京極氏となる。このうち、佐々木氏嫡流として近江守護職を伝統的に継いだのは、小脇館(八日市市)、ついで観音寺城(五個荘町・安土町)を居城とした六角氏である。大原氏は、大原荘の地頭として大原館(山東町)を構えるが、将軍の近習として鎌倉や京都に住まう在京御家人・奉公衆として活躍する。

京極氏は、四男氏信が愛知川以北六郡を与えられ、柏原(山東町)に館を構えたことに始まる。その後、鎌倉幕府滅亡から南北朝時代における京極高氏(導誉)の活躍もあって、次第に台頭し、室町時代には湖北三郡の守護権と飛騨・出雲・隠岐の守護職を有して、本家である六角氏の力をしのぐようになった。そして、戦国時代の幕開けとなった応仁文明の乱の中では、京極持清が六角氏に代わって近江一国守護に任じられ、京極氏の勢力を大きく伸張させた。この頃の京極氏の本拠地は基本的には柏原館(山東町)であるが、建武4年(1337)、高氏は甲良荘に館(勝楽寺城)を移し拠点としている。

しかし、文明2年(1470)に持清が死亡すると、家督をめぐる政経と高清との間で一族内の争いが起こり、北近江は内乱状態に陥る。この内乱は永正2年(1505)、日光寺の講和によりようやく終結し、以後、京極高清が上坂氏を執権的立場において安定した政権を築くことになる。上平寺の京極氏館は、明応元年(1492)改めて京極家の惣領職を認められた高清が、京極材宗と和睦して、文明年間以来続いた一族の内紛を納め、政権を確立したことで構築・整備したものと考えられる。同時に、山腹の詰の城・上平寺城、台地上の家臣団屋敷群とともに、城下町を整備したと思われる。

さて、応仁文明の乱以降、室町幕府の権力は失墜し、代わって地方豪族が力をつけ、時には主家をしのぐようになる。このことは、日光寺の講和により江北に安定した政権を確立させた京極氏においても例外ではなかった。

大永3年(1523)、浅見氏ら国人の攻撃で高清が尾張に追われた、いわゆる大吉寺梅本坊



第3図 坂田郡内の城館跡分布図

公事以降、北近江では浅井氏が台頭する。京極氏は浅井氏に「御屋形様」として象徴的に扱われ、一般には小谷城を拠点にした浅井氏三代に北近江の政権が替わったといわれているが、文書からの検証では、天文20年（1551）頃まで坂田郡南部を中心に京極高広による政権が機能しており、その居館が河内城（山東町）であった可能性があり、八講師城（山東町）は京極氏の詰の城として築かれたという。しかし、浅井長政の代には、完全に京極政権の姿は消えてしまう。

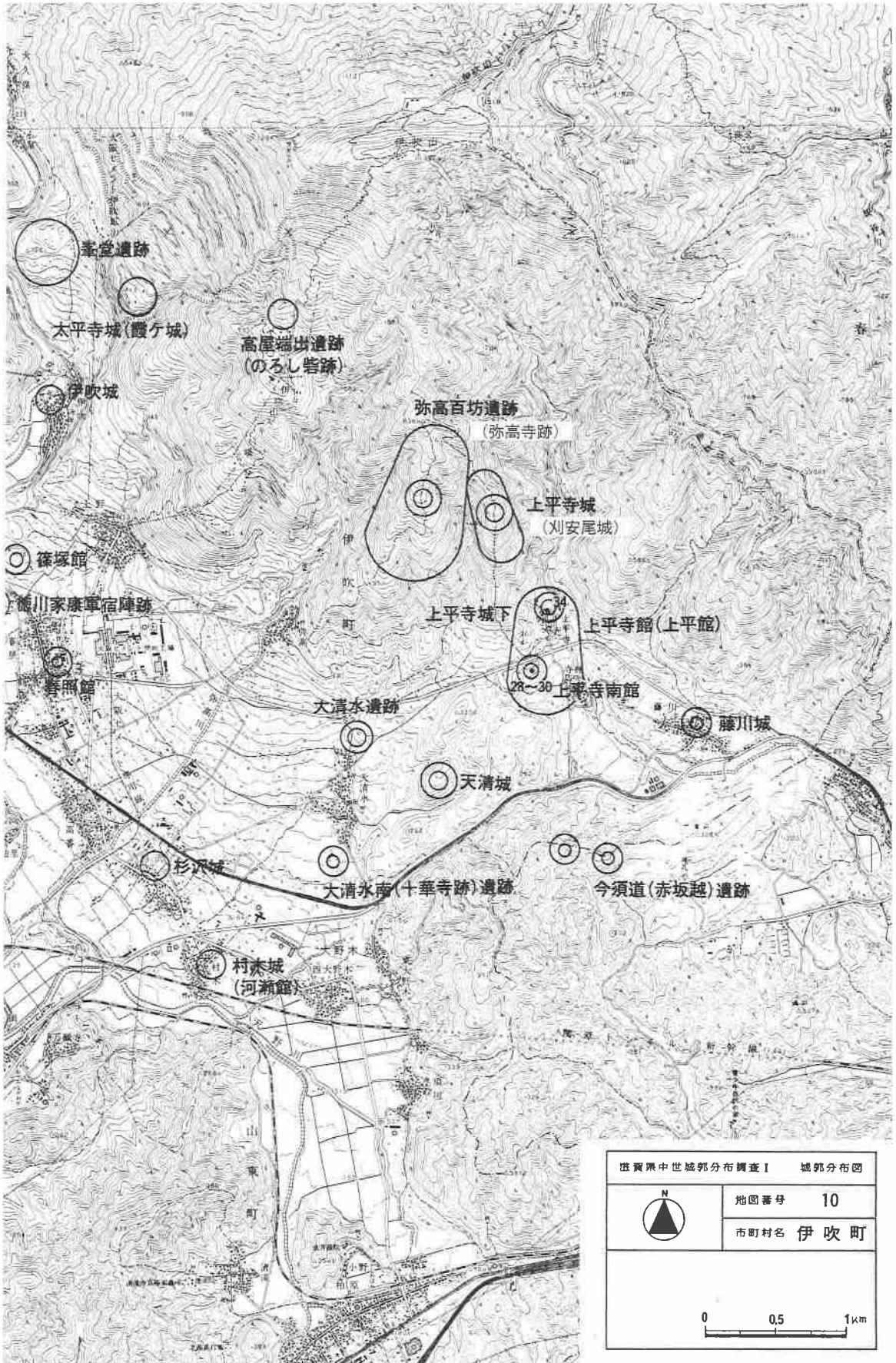
こうして、京極氏が没落し、新たに浅井氏が勢力を伸張していくことになるが、この政情の変化について六角氏が度々、北近江を攻める。しかし、京都の情勢にも注意を払わなければならなかった六角氏は、北近江に兵を留め置くことができず、最後まで近江を制圧することができなかった。坂田郡の南部に所在する鎌刃城・太尾山城・菖蒲嶽城（米原町）や旧坂田郡城南端の佐和山城（彦根市）は、京極氏と六角氏、浅井氏と六角氏の争奪の場となり、度々その帰属を代えている。このうち、鎌刃城については発掘調査が実施されており、礎石建物や石垣、枡形虎口などが検出されて、近江の築城技術の先進性が確認された。また、太尾山城でも櫓と考えられる礎石建物などが確認されている。

南近江の六角氏は、永禄6年（1568）、当主義賢の子・義治が、重臣の後藤氏の権勢を恐れてこれを謀殺したために、家臣団の反発を招き（観音寺騒動）、以後、六角氏は衰退する。さらに、浅井長政の進出、ついで織田信長の攻撃を受け、永禄11年（1568）、ついに鎌倉時代より近江で権勢を振るった六角氏の時代は終わりを告げた。

永禄4年（1561）、織田信長は浅井長政と同盟を結び、美濃の斎藤氏を攻略、さらに、永禄11年（1568）には、亡命していた足利義昭を征夷大將軍にするという大義名分を得て、入京を果たした。しかし、元亀元年（1570）4月、信長が越前の朝倉氏攻めを始めると、朝倉氏とも同盟関係にあった浅井氏が突如織田軍を攻撃して、信長は一時撤退を余儀なくされた。しかし、6月には浅井攻めの体制を整え、これに対して浅井氏は、朝倉氏の援助と築城技術を導入して、江濃国境の上平寺城と長比城（山東町）を改修して信長の近江侵攻に備える。しかし、両城を守備していた堀・樋口がすでに内応していたために、闘わずして開城してしまう。信長は徳川家康の援軍を得て、浅井方の横山城（山東町・長浜市）を攻囲し、姉川にて浅井・朝倉連合軍を破り、その後、浅井氏の居城・小谷城の攻略に長期戦で挑み、天正元年（1573）、ついに小谷城は陥落、浅井氏は滅亡する。

ここで、坂田郡の中世城館の特徴を見てみたい。

坂田郡は、鎌倉時代以降京極氏の拠点であり、柏原館や上平寺の京極氏館、さらに京極高広の河内城が築かれたように、つねに北近江の政治的中心であった。京極氏館は、山城と城下町を背後・前面に控えた良好な遺跡群で、戦国大名の在り方を知るうえで重要な遺跡である。また、室町幕府の奉公衆として力を持った大原氏の館跡も、土塁や堀が現存する平地居館として貴重である。また、京極氏の根本被官筆頭今井氏の新庄（箕浦）城（近江町）や箕浦荘の地頭土肥氏の居館「殿屋敷」（米原町）、下坂氏館（長浜市）などの調査がおこなわれている。



第4図 伊吹町内の城館跡分布図

また、坂田郡は畿内・北陸・東海との結節点にあり、古来より交通の要所として重要な位置にあった。こうした交通の要所には自然と人や物が行き交い、江戸時代には郡内を中山道・北陸道・北国脇往還が通過し、いくつかの宿場町が営まれた。

当然、こうした利便性の高い交通路は、戦時になると軍隊の移動経路として用いられる。戦において、相手より優位に立つためには、少しでも早く相手方の動きを察知することが必要で、戦国時代には、主要な交通路の付近では敵の動きをいち早く察知できるように山上に城が築かれた。坂田郡南部は、北近江と南近江の境目に位置し、たびたび争奪の舞台となっている。また、東は美濃に接している。このような国境にある城（境目の城）は、敵軍の侵攻を警戒し、領国に入れさせないよう最前線で防備する重要な拠点であった。前者では、鎌刃城・太尾山城・佐和山城、後者は上平寺城や長比城などがあげられるが、これらの城郭の存在も、坂田郡の中世城郭の大きな特徴といえる。

4 伊吹町の城郭

前述したとおり、伊吹山南麓地域には、中世に北近江を支配した京極氏に関連する遺跡が集中している。京極高澄が15世紀末から16世紀初頭に整備したもので、京極氏の館や庭園を中心とする上平寺館跡、家臣屋敷が集中する高殿地区（遺跡名：上平寺南館跡）、戦時の詰め城・上平寺城跡（荊安城・刈安尾城・桐ヶ城）などの城館遺跡と、これらに伴う城下町跡や寺院跡などで、今回の分布調査では「上平寺城跡遺跡群」と総称して調査を進めてきた。

また、ここから、直線距離で5 km南には、京極家の菩提寺・清滝寺徳源院や柏原館（山東町）があり、伊吹山南麓一帯は、京極氏の近江における本拠地として重要な地域であった。

上平寺館や高殿地区、城下町は、伊吹山南側斜面を駆け下る藤古川が作り出した扇状地の扇頂部付近にあり、東側は藤古川の急峻な谷、西側は高殿地区がある尾根と、『上平寺城絵図』に「要害谷」と記される天然の要害によって守られている。

この『上平寺城絵図』は、近世になって現地の遺構を忠実に描き、伝承を加味して作成されたと思われる信憑性の高い資料で、山城跡や館跡の現存遺構や道路、地割りなどが現況とかなり合致している。

上平寺城の初見は、『江北記』にみえる次の記事である。「大永三年（1523）三月九日、かりやす尾の御城より御忍にて尾州へ御取退候。大原五郎（高広）殿も御同道候。六朗殿（高慶）はかりやす尾に残し被申候」。これは国人浅見氏等の攻撃により落城したことを指している。築城年代については、『改訂近江國坂田郡志』に「浅井三代記に永正六年（1509）とあれど確かならず」とあるのみで明らかではない。持清以降、勝秀、政経、高澄と系図上でも混乱の見える15世紀後半代は、京極氏、重臣多賀氏などが入り乱れた内紛が続く。

高澄が、この内紛を収めるのは永正2年（1505）のことで、対立していた京極材宗と和睦して北近江を再び統一する。上平寺城館が整備されたのはこの頃であろう。

大永3年以降、上平寺城に関する文献は、永禄3年(1560)の「濃州境目かりやす尾と申処、一両日中ニ濃州□城ニ可申付之由風聞候間」(『浅井氏三代文書集』)と、同じく長政が、元亀元年(1570)に織田信長に備えるために上平寺城を改修したことを記した『信長公記』の「去程に浅井備前越前衆を呼越し、たけくらべ、かりやす両所に要害を構へ候」の2点がある。

大永3年の落城以降は、近江と美濃の国境警護の城としての役割を担っていたことが、二つの文献から読みとれるが、元亀元年の改修は、城将である堀・樋口両名が織田に通じていたために、戦うことなく開城している。以後、上平寺城は廃城となったようだ。

京極氏遺跡以外に『滋賀県中世城郭分布調査6』(滋賀県教育委員会)には、伊吹町内の中世城郭として20カ所が掲載されている。そのうち半数は、この時の調査で確認された小規模な削平地を持つ砦状の遺構で、文献資料にみえる主な城郭は、村木城、天清城、太平寺城、弥高寺、上平寺城館で、このうち村木城が京極氏被官河瀬氏の平地の居館であるほかは、いずれも山城である。

天清城は大清水集落東側の山頂部にある。多賀氏の居城と伝えられているが、堀や土塁など明瞭な遺構は顕著ではない。太平寺城は、京極氏前半期の居城とされているが、現地では仲之坊・上楽坊・円蔵坊などの寺院地名と、中央の道をはさんで削平地が並ぶ寺院・太平寺の区画が確認できるが、城郭遺構は確認されていない。

弥高寺は、伊吹山の中腹標高約700mの高所にある。奈良時代から続く伊吹山山岳信仰の拠点伊吹山寺の中心的寺院であり、中央通路の左右に坊跡を設ける構築方法は太平寺跡と共通する。しかし、明応4年(1495)に京極政高が、翌年に京極高清が弥高寺に布陣している記事が『船田後記』『今井軍記』にあることから城として利用されていたようだ。現実に、「大門跡」と呼ばれる導入部分は、高い土塁を用いて枡形状を呈し、前面に広大な空堀がまわっている。また、本坊跡背後に堀切や堅堀が構築されているなど、明らかに城郭として改修されている。

第2章 国史跡「京極氏遺跡」とこれまでの調査

京極氏の館跡、家臣屋敷跡（高殿地区）、上平寺城跡および、関連する寺院として弥高寺跡が、平成16年2月27日に国の史跡に指定された。史跡の名称は「京極氏遺跡—京極氏城館跡・弥高寺跡—」で指定に際しての説明は次のとおりである。「滋賀県北東部の岐阜県境に位置する伊吹山南麓に所在し、中世北近江の戦国大名京極氏の館跡・城跡等を含む遺跡群である。城跡や家臣団屋敷跡、寺跡、庭園遺構をもつ館跡などが良好に遺り、我が国の戦国大名の在り方を知る上で、極めて貴重な遺跡である」。指定面積は1,088,418.20㎡で、指定範囲の中には、現在、居住空間（集落）と生産空間（田畑）になっている城下（上平寺遺跡）や、長福寺などの寺院遺跡は含まれていない。

城下町跡の上平寺遺跡には、北に隣接して京極氏館跡、西側に家臣屋敷跡（高殿地区）、さらに背後の標高約669m付近の尾根上には上平寺城跡があり、全体で京極氏の城館および城下を構成していることから、伊吹町教育委員会が平成7年度以降おこなっている詳細分布調査では、「上平寺城跡遺跡群」として調査を進めてきた。近世の比較的早い時期に描かれたと考えられている『上平寺城絵図』（伊吹町役場蔵）には、これらの遺跡が、現存遺構や道路・地割りの現況とかなり合致した状況で描かれており、信憑性の高い資料である。

上平寺城は、別称を刈安尾城、桐（霧）ヶ城といい、文書では「かりやす尾の御城」と記されることが多い。先述したとおり、文献上の初見は大永3年（1523）、「梅本坊の公事」と呼ばれる国人一揆の記述（『江北記』）である。山城は、館や城下が廃絶したあとも江濃国境警護の城として機能していたようで、元亀元年（1570）対織田信長戦に備えて、浅井長政が越前朝倉氏の援助で上平寺城や長比城（山東町）を改修している記述が『信長公記』にみえる。発掘調査は実施されていないが、平成2年以来継続した刈り払いと踏査により遺構の確認をおこない、平成12年度と13年度の2カ年で測量調査を実施している。主郭部分の標高が669m、城域は南北約450m、東西約150mの規模をもち、尾根上一直線に曲輪を配置している。長大な土塁囲いのテクニック、外柵形空間をもつ虎口、南端に放射状に設けられた豎堀群などの現存遺構は、元亀元年の改修時のものと考えられる。

山麓の上平寺城下を構成していた遺跡には、城下町を構成する上平寺遺跡と先に述べた京極氏館跡、家臣屋敷跡（高殿地区）がある。『上平寺城絵図』に描かれた、いわゆる京極氏遺跡は、「刈安尾・本丸」などと記された上平寺城部分の他に、

- ①「ホリ」内側の「御屋形・隠岐屋敷・弾正屋敷」など京極氏の居館とその重臣屋敷部分
- ②「外ホリ」内側の「諸士屋敷・町屋敷」と記された家臣団等の居住区と考えられる部分
- ③「越前□道」（北国脇往還）沿いの「市店民屋」部分
- ④西側台地上の「若宮・加州・浅見・黒田・多賀・西野・上臈衆・駒繫」などと記された重臣屋敷部分

に大別できる。それぞれ、①は京極氏館跡、②・③は上平寺遺跡（城下）、④は家臣屋敷跡

に該当する。

京極氏の館があったと考えられる①は、東を藤古川の急峻な断崖、西南を谷と内堀と呼ばれる細い谷川で区画されている。絵図に「御屋形」とある京極氏館跡は約60×40mの規模で、さらに北側に約55×15mの庭園跡をもつ。他に約32×25mで二方を土塁で囲まれた隠岐屋敷など、中心の道の両側に展開する十数段の削平地で構成されている。当遺跡は大永3年に湖北の政治的拠点としての地位を無くしたとおもわれるが、元亀元年に京極高吉が隠棲している記事があり、この時期まで何らかの形で存続していたのであろう。平成7年度から9年度に町教育委員会において地形測量と遺物の表採をおこない、館の時期とほぼ重なる16世紀前半頃を中心とする土師皿などを採集した。京極氏館跡庭園は、二つの池と100点近くの大小の石を用いたもので、作庭時期のわかる武家屋敷庭園として貴重な遺構である。このような庭園を持つことで京極氏が幕府の公権力を具現化していたことがうかがわれる。

②は現在の上平寺集落とほぼ重なり、③は主に水田として利用されている。この上平寺遺跡の南端を北国脇往還が通る。上平寺遺跡では、平成9年度から12年度にかけて、町教育委員会で町道建設に伴う発掘調査を行っており、掘立柱建物や井戸跡などが出土している。また、平成11・12年度の県教育委員会の調査では、城下町造営当初のものとみられる整地土層や暗渠施設が確認されている。

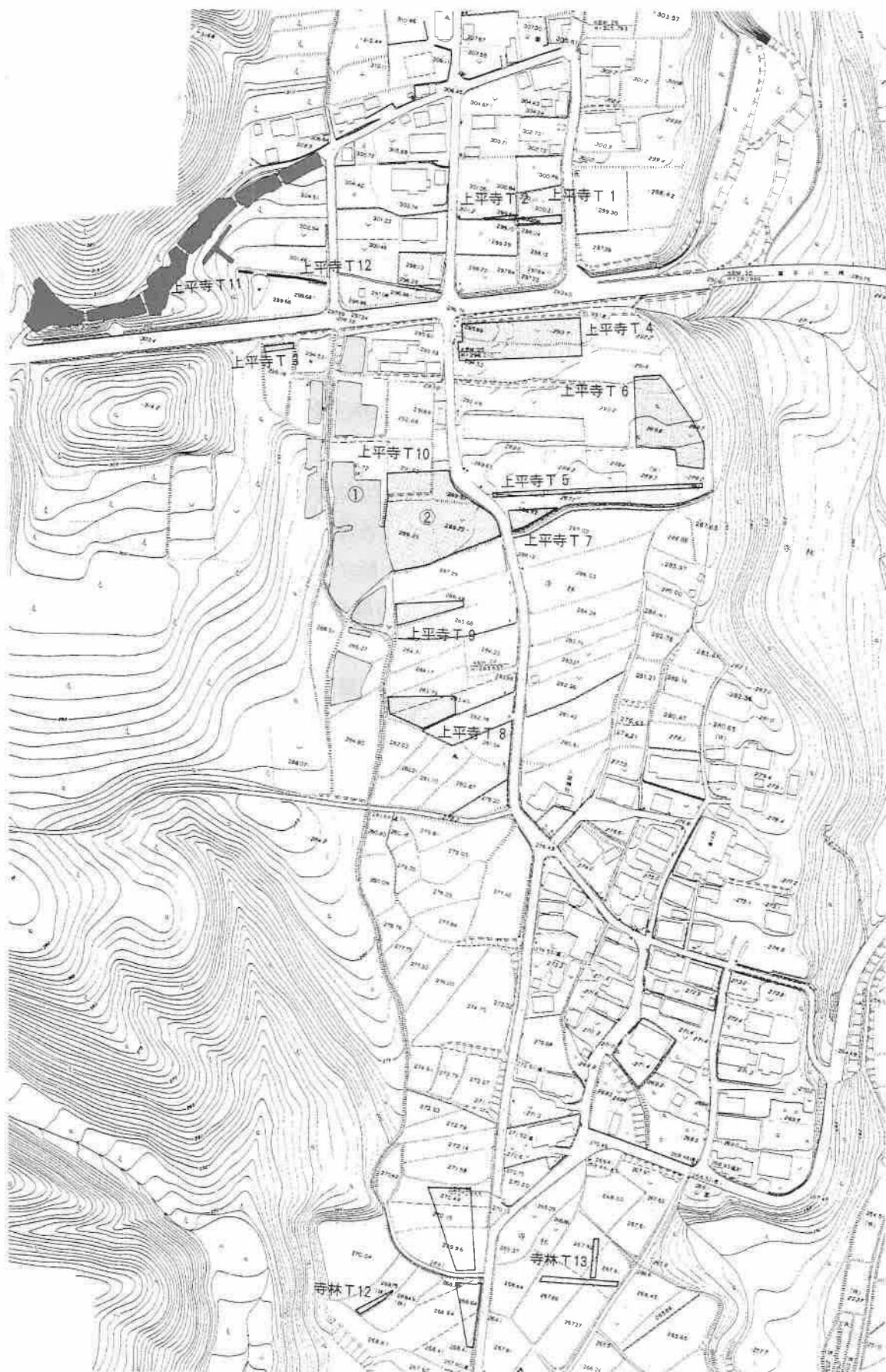
また、これらの調査結果から、上平寺城下の南限が想定され、絵図の「越前街道」までおよんでいなかったことが想定された。

覚所谷川砂防工事に伴い平成14・15年度に行った発掘調査では、覚所谷川の流土や後世の現状変更により明瞭な遺構は検出されなかったものの、出土遺物の多くは京極氏段階のものであった。また、10～11世紀のものと思われる灰釉の碗が1点出土しており、先行する寺院に伴う遺物と考えられる。

④は城下の西側に張り出した尾根上の高台で、大小10以上の削平地が整然と並ぶ。絵図に記載されている六人の家臣屋敷の区画にはほぼ合致する。この西には絵図に「要害谷」と記された深い谷がある。当遺跡では、平成10・11年度に町教育委員会で地形測量と踏査をおこなったほか、平成9年度には、絵図の「駒繫」と「若宮」の間の「径」部分で、滋賀県教育委員会による発掘調査がおこなわれ、堀切・土塁を兼ねた石敷きの道が確認された。また、平成11年度の町教育委員会による「駒繫」の確認調査では、京極氏段階に整地された層を確認した。さらに、平成12年度の推定「若宮」屋敷の調査では、屋敷内を区切る築地か門とおもわれる石垣遺構を検出した。

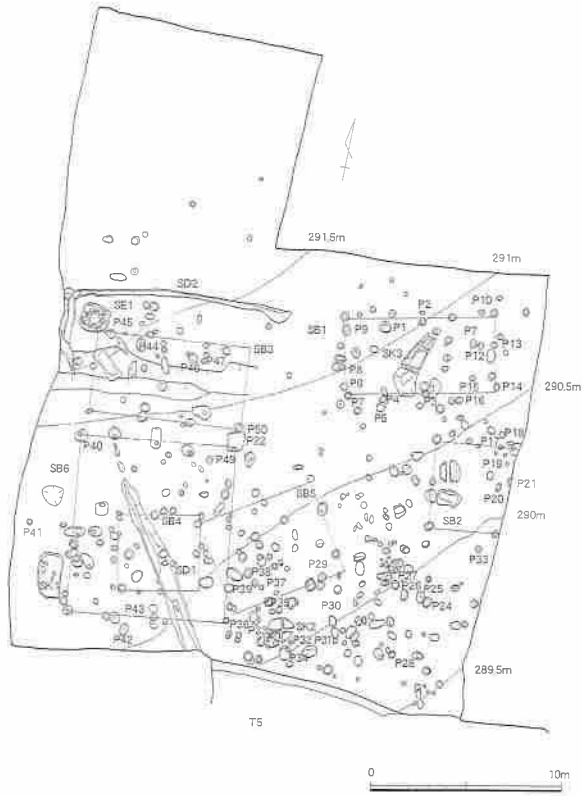
上平寺城下全体を見ると、北には上平寺城がある山地がそびえ、西はそれから続く尾根および、家臣屋敷がのる台地と「要害谷」。東は深い谷をもつ藤古川が存在し、南を外堀で区画することで、自然地形を最大限に利用し、さらに堀や屋敷地を組み合わせ、防御する形になっていることがわかる。

このように、上平寺城跡遺跡群は戦国時代の山城、居館、城下町がセットで残る全国的



第5図 発掘調査区位置図

①



②



第6図 発掘調査区遺構平面図（番号は第5図に対応する）

にも貴重な事例で、近年ようやく研究成果や調査の成果が公開されて遺跡自体が持つ情報が増加し、第1級の遺跡であると注目され、今回の国史跡指定につながった。

第3章 調査の概要

上平寺城跡遺跡群は、守護大名京極氏の山城、山麓の居館や庭園、家臣団屋敷群と城下町の3つが良好に残されている遺跡群である。浅井氏の小谷城（浅井町・湖北町）、六角氏の観音寺城（安土町・五個荘町・能登川町）とともに、滋賀県の中世史を解明するうえで欠かすことのできない遺跡であり、全国的にも貴重な城館遺跡である。近年、その重要性が認識され、ようやく研究や調査が進んできた。また、江戸時代の比較的早い時期に描かれたといわれている『上平寺城絵図』（伊吹町役場蔵）があり、遺跡群の全貌を知るための資料として重要である。

京極氏遺跡における調査の概要は第2章で述べたとおりであるが、ほとんどの調査が開発に伴うものであるために、山中に分布する遺跡群の内容や性格の把握までには至っていない。

このような状況から、広範囲にわたる遺跡群の早急な把握と、今後の保護・活用をはかるために、平成7年度から10ヵ年計画で上平寺城跡遺跡群分布調査を実施することになった。

調査は、年度ごとの予算に合わせて、1年に20,000m²前後の地形測量を業者委託し、町教育委員会が踏査を行った。表土遺物の採集と現存遺構の測量、記録撮影により山林内の平坦地（屋敷跡・曲輪跡・坊跡）を確認していった。

測量にあたっては、地元地権者及び関係区長に概要を説明し、同意のうえ実施した。測量方法については、平坦地につき1～2個所の4級基準点を埋設し、 $S = 1/500$ の地形測量をすすめた。また、庭園遺構については、 $S = 1/100$ で測量した。測量内容の確認は測量会社より提出のあった素図を基に、町教育委員会が現地を踏査し、遺構を確認して現状と異なる部分を校正した。

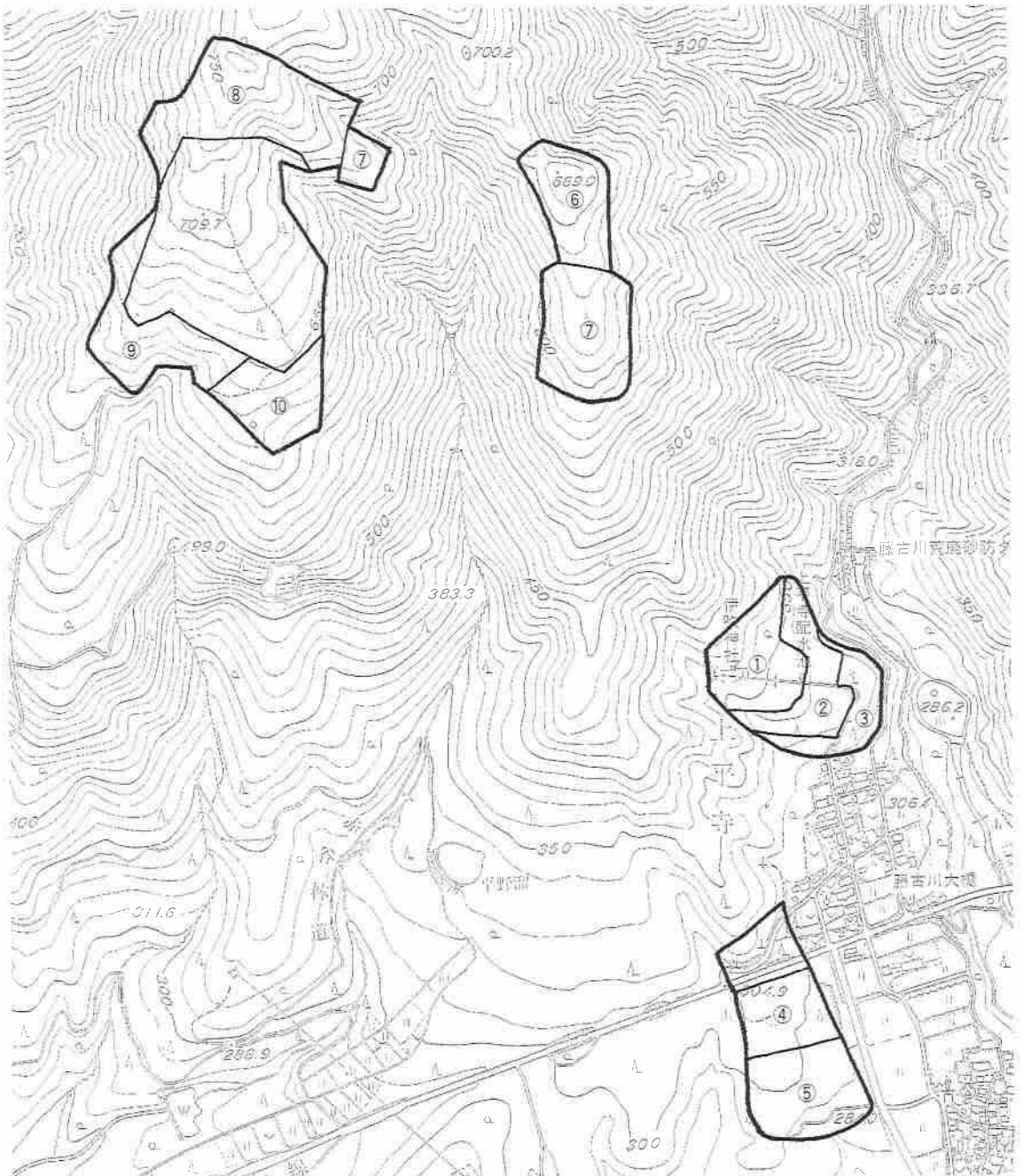
なお、家臣屋敷跡の町道藤川相撲庭線以北は、町道川戸線改良工事の発掘調査に伴って県教育委員会が作成した測量図を利用した。また、弥高寺跡の中心部は昭和60年・62年に地形測量が実施されており、今回の測量図と接合を図った。

測量成果品として、年度ごとに $S = 1/500$ 、 $1/1000$ の測量図面（地形図・遺構図）と成果簿があり、町教育委員会で保管している。測量全体図は、各遺跡ごとに $S = 1/500$ 、 $1/1000$ でそれぞれ接合図を作成している。

平成7～16年度の測量個所は次のとおりである。

- ①平成7年度 京極氏館跡の約1/3（山側）
- ②平成8年度 京極氏館跡の約1/3（中間）
庭園遺構
- ③平成9年度 京極氏館跡の約1/3（集落側）

- ④平成10年度 家臣屋敷跡の約1/2 (北側)
- ⑤平成11年度 家臣屋敷跡の約1/2 (南側)
- ⑥平成12年度 上平寺城跡の約1/2 (北側)
- ⑦平成13年度 上平寺城跡の約1/2 (南側)
※弥高寺跡「薬師谷の遺構」を含む
- ⑧平成14年度 弥高寺跡追加測量 (本坊北側)
- ⑨平成15年度 弥高寺跡追加測量 (西側斜面)
- ⑩平成16年度 弥高寺跡追加測量 (南東尾根)



第7図 測量範囲位置図

第4章 分布調査

第1節 京極氏遺跡の現状

国史跡「京極氏遺跡」の指定範囲は約1,088,000m²である(第2図)。これは、遺跡群を構成する京極氏館跡・家臣屋敷跡・上平寺城跡・弥高寺跡を全て包括する範囲を、関係する地籍によって指定した結果、伊吹山南麓の広大な範囲が指定地となったものである。特に弥高寺跡と上平寺城跡を含む字「赤谷」は、指定範囲の約46%を占める500,000m²の面積を有する。

このうち各遺跡ごとに明確に遺構が存在する範囲は、京極氏館跡が約50,000m²。家臣屋敷跡が約45,000m²。上平寺城跡が約50,000m²。弥高寺跡が約175,000m²である。ただし、弥高寺跡については、周辺に削平地などの遺構を確認しており、さらに面積が増える可能性がある。また、指定範囲には、それぞれの遺跡を結ぶ道が含まれている。

各遺跡の現況について以下に述べる。

①京極氏遺跡

伊吹町大字上平寺字神ノ屋敷および一ノダハに所在している。藤古川扇状地の扇頂部にあり、現況土地利用は伊吹神社の境内地で山林である。土地所有は、割り山を含み細かく民有地・公有地・社寺有地に分かれている。集落(城下)の山手の山林景観を形成し、北東は藤古川の溪谷、南西は樹木がなければ濃尾平野まで眺望が広がる。京極氏館や庭園跡、家臣屋敷、土塁などの遺構が残り、伊吹神社・薬師堂・杉本地蔵などの建造物と京極一族の墓所などの石造物がある。地元区の手によって案内看板やベンチが設置され、平成14年からは、史跡を生かしたイベント「上平寺戦国浪漫のゆうべ」が継続して開催されている。

②家臣屋敷跡

伊吹町大字上平寺字高殿および大字藤川字西野々に所在している。中腹に上平寺城がある尾根の先端台地上にあり、現況土地利用は山林および一部畑地である。全て民有地で、集落に接した山地景観を呈し、樹林により周辺の眺望は利かない。絵図による若宮氏などの屋敷跡や土塁があり、城下町の一面を担い、西側を防御する位置に当たる。

③上平寺城跡

伊吹町大字弥高字赤谷および大字藤川字川戸に所在する。伊吹山中腹の尾根上にあり、土地所有は伊吹・大原(山東町)の両財産区である。隣町である旧大原村の財産区がこの地にあるのは、京極氏の寄進によるものと伝えられている。現況は山林で、主郭からの眺望は良好で、関ヶ原盆地から濃尾平野を望む。曲輪、腰曲輪、堀切、竪堀、切岸、土塁などが良好に残る。京極氏館に対する詰の城であり、浅井氏段階では江濃国境の境目の城としての役割を担う。

④弥高寺跡

伊吹町大字弥高字西中毛・東中毛・赤谷に所在する。上平寺城の西側尾根上にあり、現況は草原および山林である。中心部の坊跡群に広範囲に草原が広がるのは、昭和30年代まで地元の草刈り場であったことによる。このため眺望がすぐれ、長浜以南の近江盆地および濃尾平野が一望できる。土地所有は伊吹財産区である。遺跡内には、本坊跡を中心に扇型に広がる坊跡群のほかに、大門、墓地、入定窟のほか、空堀、堅堀、堀切、土塁などが点在する。建造物はない。弥高寺跡は、京極氏城館に先行する山岳寺院であり、京極氏・浅井氏により城塞化された。

今回の分布調査では、上記の4遺跡をそれぞれ測量地区に分類して、順次調査を行った。

主要な遺構は以下に列記するが、各遺跡については、一部を除いて分布調査以上の調査は実施していない。このため、埋蔵文化財についてはほとんど未調査であり、近代の開発も少ないことから、遺構は良好な状態で保存されているものと考えられる。今後、発掘調査を伴う精密な遺構の把握により、建物の規模や配置、生活の様子などが判明していくであろう。



写真1 「上平寺戦国浪漫のゆうべ」のようす



写真2 「近江中世山城跡のろし駅伝」のようす

第2節 京極氏館跡

1 全体構造 (第8・9図)

測量範囲は、集落から伊吹神社境内を北東方向に入り、途中で90度北西に曲がって、伊吹神社の鳥居から階段へと続く参道の左右に広がる屋敷跡群を中心に行なった。

南端は、集落の最も山手に位置し、京極氏館と内堀をはさんで隣接する杉本坊(町立上平寺集会所)の建物を取り込んだ。杉本坊は、上平寺城館に先行すると思われる寺院「上平寺」の唯一法灯を伝える寺院である。東は、藤古川(川戸川)に落ちる急峻な川戸谷の斜面で、川戸谷林道までを範囲とした。南西は、家臣屋敷へ続く尾根と京極氏館跡を区切る風呂屋谷とよばれる谷を境にした。この谷から流れる小河川「覚所谷川」は、京極氏館の内堀を形成して東へと向きをかえて藤古川に落ちる。北は、伊吹山頂に続く尾根で、館跡最上部の金毘羅社までを測量範囲とした。

館跡は、南北約250m、東西約200mの範囲で、伊吹神社を頂点に下方に広がっている。屋敷跡および何らかの施設があったと思われる削平地は34ヶ所を数える。別に風呂屋谷に6ヶ所の小区画を確認した。

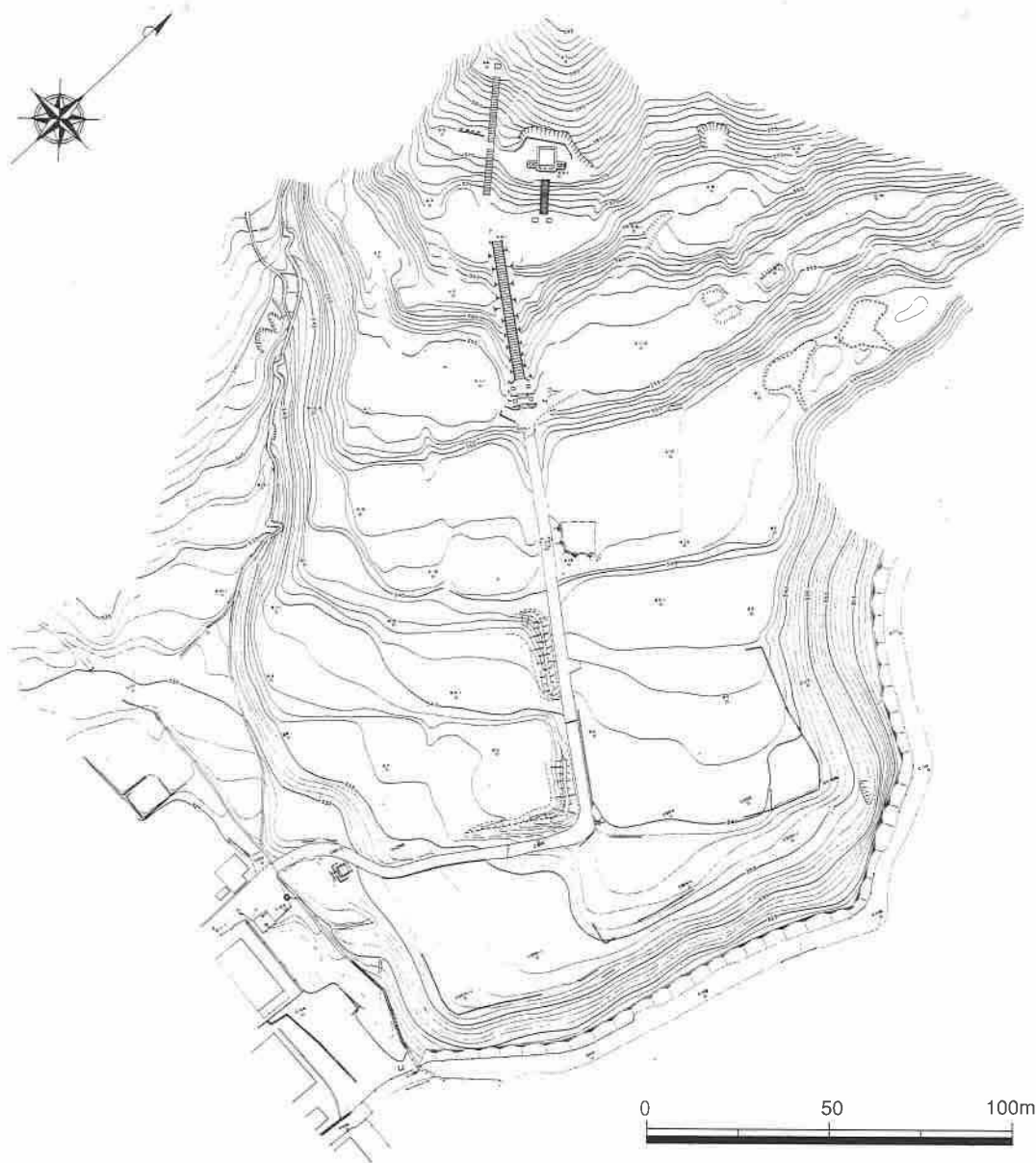
絵図によると、中央を貫通する道のほか屋敷跡間に数本の道が描かれており、「養水」と記された水路も示されている。また、絵図の本堂の一段下には、山城への登城道が描かれている。

上平寺城下の地名については、小島道裕氏が古老の聞き取りを交えて詳細に検討されている(小島道裕 1997『城と城下』新人物往来社に収録)。京極氏館跡は小字名を「神ノ屋敷」といい、地元では神屋敷(かみやしき)と呼んでいて、上屋敷(かみやしき)の意味だと考えられている。以下、地名についての記述は同書による。

各削平地の規模と内容を以下に記載する。数値は各削平地の最大幅を示す。主要な遺構については、項を改め『絵図』と対比しながら検討したい。

(伊吹神社周辺の削平地)

- 1 金毘羅社の石の祠が祀られている削平地で、長辺10m×短辺5mの三角形を呈す。
- 2 20m×10mの方形の削平地で、伊吹神社が南東に面して建つ。神社背面は鋭角に削られている。
- 3 15m×6mの楕円形の削平地で、京極氏一族の墓地が斜面側に並ぶ。
- 4 30m×13mの半円形の削平地で、2の伊吹神社へ登る石段と狛犬一対がある。5とは、鳥居から上がってくる石段Aによって別の削平地になっているが、本来はひとつづきのものであった可能性が高い。
- 5 15m×12mの三角形の削平地である。一石五輪塔を2基を確認した。
- 6 8m×5mの方形の削平地である。
- 7 26m×7mの不整形の削平地である。



第8図 京極氏館跡地形図

8 42m×21mの半円形の削平地で、南隅に9に下る道Cの痕跡を確認した。

(中央道路の東側の削平地)

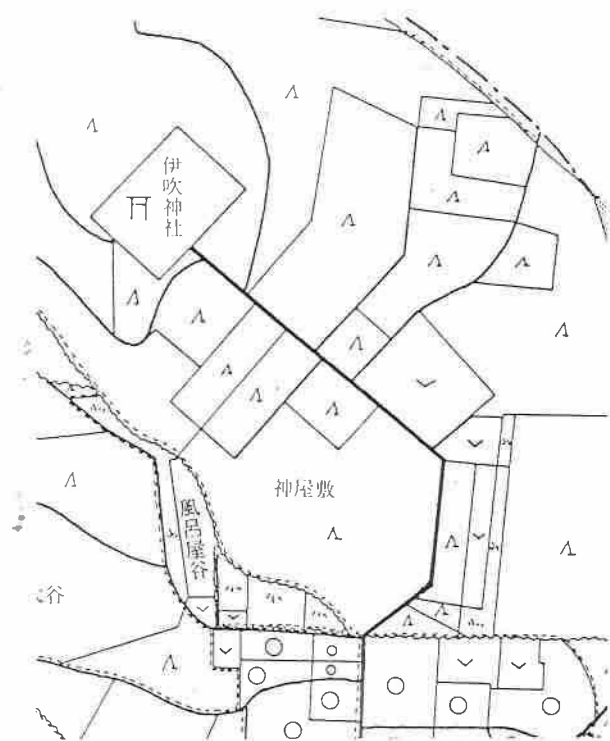
9 65m×26mの削平地で、南隅で鳥居とつながる。北側には5m×3m、6m×2mの土盛遺構一対を確認した。また、10との間にも、5m×3mの土盛遺構がある。

10 17m×4mの不定形の削平地で、南側に少し張りだす。庭園遺構の真上にあたり、庭園側斜面には景石が点在する。



第9図 京極氏館跡遺構図

- 11 22m×6mの長方形の小区画である。
- 12 68m×37mの方形の屋敷地の奥に、60m×20mの庭園が付属する。絵図に「御屋形」「御自愛泉石」と記載される京極氏の居館跡である。
- 13 60m×18mの長方形の削平地で、南東端には道Dがある。この道は、絵図に描かれた藤古川（川戸川）を渡る道に比定されるが、現状の斜面には下る道は確認できない。
- 14 55m×20mの長方形の削平地で、15とはあまり高低差がなく、大きく1つの屋敷地と



第10図 京極氏館跡地籍図



第11図 京極氏館跡部分の絵図
(番号は第9図に対応)

見ることもできる。斜面側に低い石積がある。また、中央の道側は、比較的大きな石を用いた石垣である。

15 48m×20mの長方形の削平地で、北東隅で16と接する。中央の道側は、14から石垣が続く。

16 13m×15mの方形の区画である。15から1段下がる。北と東のコーナーは14から石積が続く。絵図の「蔵屋敷」に該当する。

17 70m×30mの細長い三角形の削平地である。斜面側に一部石積が見られる。

18 40m×40mの方形の削平地である。絵図の「弾正屋敷」に該当すると考えられる。南側のコーナーに石積がある。

19 17m×13mの削平地で、薬師堂と杉本地蔵が建つ。薬師堂は明治期にここへ下ろされたことから、その当時に整地された可能性が高い。20との間に谷水が流れる。

20 15m×5mの区画で、あまり明瞭ではない。

(中央道路の西側の削平地)

21 30m×7mの長方形の削平地で、鳥居前から22を通る登城道Eは、この削平地を最後に山道となる。転倒している五輪塔2基を確認したが、平成15年、地元区の手によって12の墓地に移された。

22 40m×25mの方形の削平地で、中央を山城への登城道が貫通する。南西側は風呂屋谷の急崖である。

23 45m×16mの長方形の削平地である。中央山手に22と結ぶ通路状の窪みがある。南側

も若干くびれていることから、南北2つの屋敷地に分かれるかもしれない。

- 24 15m×8mの小区画で、23に隣接する。
- 25 22m×18mの方形の削平地で、下段の28との間に道状の空間がある。
- 26 20m×14mの台形の削平地で、28との間に道状の空間がある。
- 27 23m×14mの不整形の削平地である。
- 28 40m×22mの削平地で、北東側には中央の道に沿って土塁が残る。南西側にも土塁状の高まりがわずかに確認することができる。
- 29 30m×30mの方形の削平地で、絵図の「厩」に該当すると考えられる。
- 30 30m×25mの方形の屋敷地で、中央の道に沿ってL字に土塁が残る。絵図の「隠岐屋敷」に該当する。
- 31 15m×14mの小区画で、土塁状の高まりを隔てて30に隣接する。
- 32 20m×20mの三角形を呈する削平地で、東端で33とつながる。南側は34へ落ちる急斜面である。
- 33 18m×14mの方形の削平地で、東端に入り口を持つ。
- 34 18m×14mの小区画で、館跡の入り口にあたる。明治期に薬師堂が19に下ろされたときに改変された可能性もある。

(風呂屋谷の削平地)

風呂屋谷の南側斜面に一列に並ぶ削平地35～40は、最小13m×5mから、最大15m×12mの小区画で、不整形のものが多い。京極氏館に伴うものでなく、後世の開墾によるものである可能性が高い。

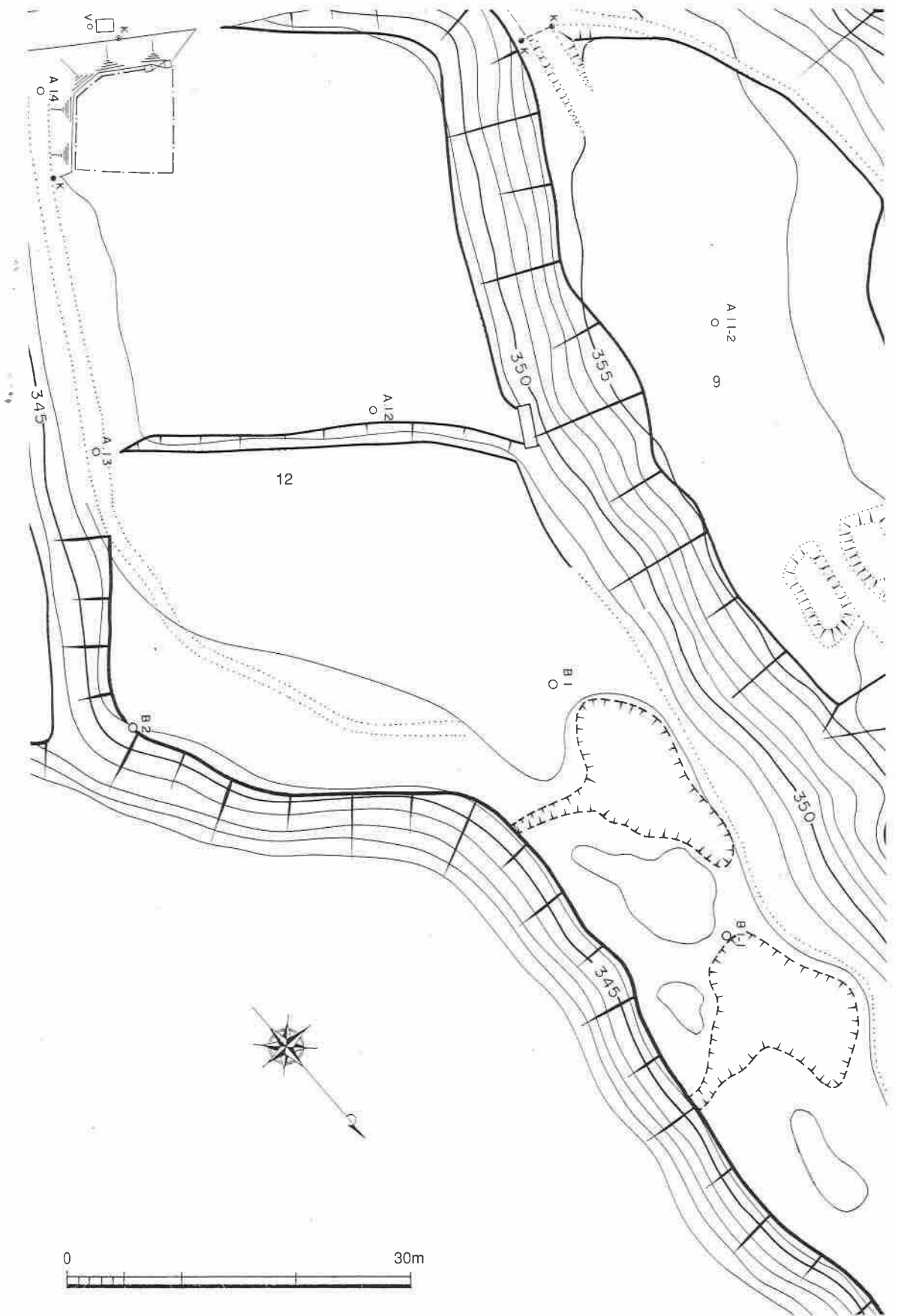
2 京極氏館跡 (第12図)

ここからは、主要遺構周辺の状況について詳述する。

絵図の「御屋形」にあたる削平地12が京極氏の居館跡と推定されている。明治15年(1882)の『滋賀県小字取調書』(『角川日本地名大辞典25滋賀県』に所載)の小分け地名では「京極屋敷」があるが、小島氏の調査では、地元で特にそう呼ばれることはないが、庭園のあるところがそうだとされている。

京極氏の居館跡は、伊吹神社鳥居の東側下段にあたり、標高は約346mを測る。居館跡北側の奥まったところに60m×20mの庭園跡が付属する。居館部分は、最大幅約68m×37mの長方形を呈する。このうち、南側半分は北側より約1m高く、35m四方の方形区画になっている。この南端には、町の水道施設があり遺跡が破壊されている。また、この区画の北端には、墓石群がある。付近に散在していたものを地主が集めたものという。

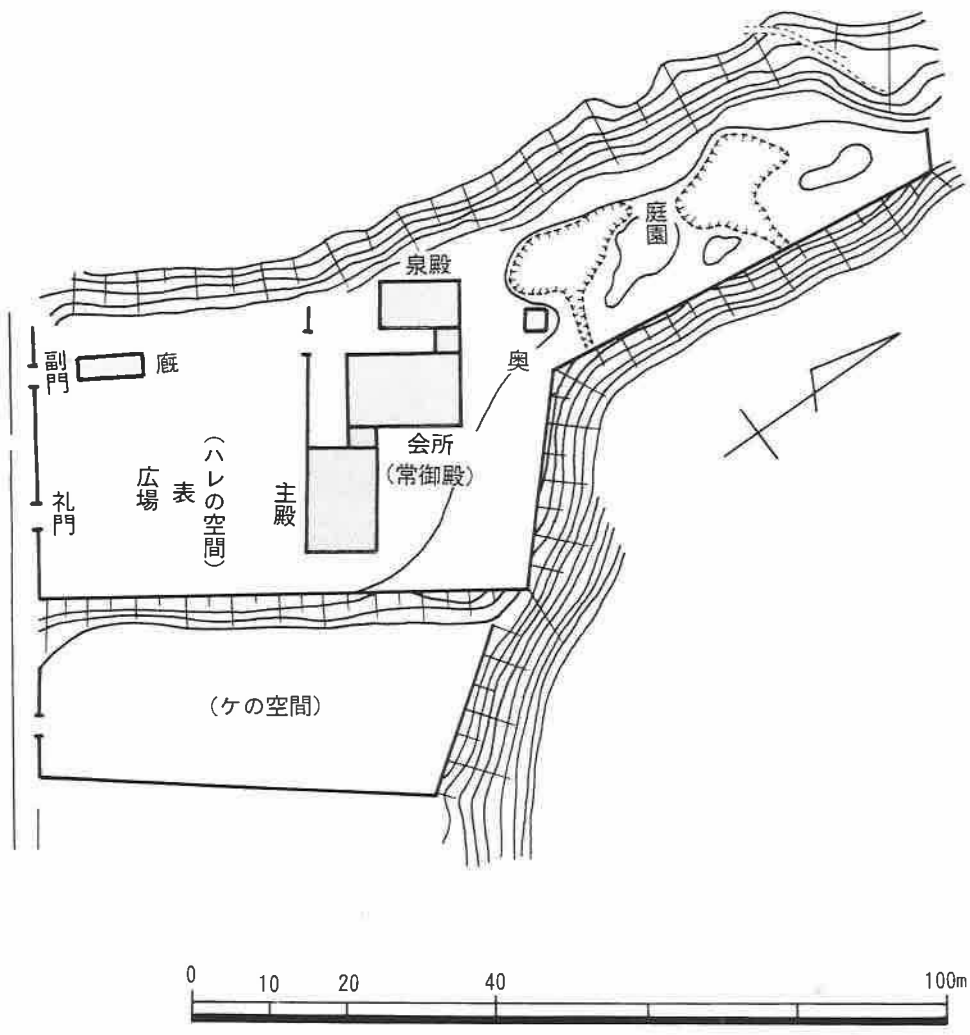
中井均氏は、各地の戦国期城館庭園の調査事例から、京極氏居館跡の空間構成を第13図のように推定している(中井均 1998「戦国期城館の庭園」『上平寺城跡分布調査概要報告書I』所載)。居館部分の68m×37mという数値は守護館としては小さく、12はハレの場だけであり、ケの場はさらに東側の一段低い区画13に想定された。そして、12には、中央



第12図 京極氏館跡遺構図 (S=1/500)

道路に面して礼門と副門を設け、南側半分の高まりを広場として、一画に厩を配置する。北側は主殿があり、庭園に面して会所（常御殿）と泉殿がある。明確な礎石等が確認できず、発掘調査を行っていない現状では判然としないが、今後の詳細な調査の中で確認していきたい。

鳥居から右へ行き、9の削平地に入る道は山城への間道といわれており、絵図にも「小路」の記載がある。現状で道を確認することはできなかったが、9の北端にある一対の土盛遺構や、10の上段の道状遺構がこれに伴うものかもしれない。鳥居前から逆に左へ行く道は、現在利用している登城道である。この道は、絵図にも明確に描かれ、22・21を経て風呂屋谷に出、「芝野」の脇を通って、山城がある「刈安尾」の尾根上に「七曲」の道として描かれている。伝承によると、山城への本道は杉本坊横から発した道といわれているが、絵図には該当する道の描写がない。また、風呂屋谷の上に小さな滝があり、その下を「滝の



第13図 京極氏館の推定模式図（中井 均作）

下」という。「芝野」については、草原のような空間が想像されるが、現在の登城道には該当する場所はない。

3 伊吹神社・京極氏一族の墓所（第14図）

伝承によると、伊吹神社はもと現在地の下段4にあり、薬師堂が左にあったという。明治の神仏分離の影響で、伊吹神社を現在地に上げたのは明治30年か33年という。本殿の改築は明治30年。その時に薬師堂が現在地19に下ろされたという。したがって、2は明治期に新たに削平されたものと考えられる。

さて、もと伊吹神社があったという削平地4は、5とひとつづきのものと考えられる。絵図には、左に本堂、右に伊吹大権現（伊吹神社の前身）と朱の鳥居が描かれており、4・5に両者が並存していたと伝えられている。

しかし、絵図をあらためて詳細に検討すると、本堂の建物と伊吹大権現の間、ちょうど「本堂」の字が記されている所には木が描かれている（第11図）。さらに、本堂と伊吹大権現が建つ削平地の間がややくびれており、別々の削平地として捉えることができるのではないだろうか。何よりも絵図の描写を信用するならば、本堂と伊吹大権現が描かれた敷地は、「御屋形」や他の屋敷地に比べて極端に広い。唯一の建物を描くという事情を加味しても、4・5を、旧本堂・伊吹大権現の削平地としてとらえるのでは狭いのではないだろうか。そこで、4・5の北にある削平地8に注目したい。約3mの比高差はあるが、ここに伊吹大権現があったと考えられないだろうか。絵図によると、「御屋形」からの道は、「小路」として階段状に描かれている。8の南端には9に下る道があり、この道が「小路」に該当する可能性も考えられる。ちなみに9は、絵図で「御屋形」の本堂側に描かれた狭い区画であろう。

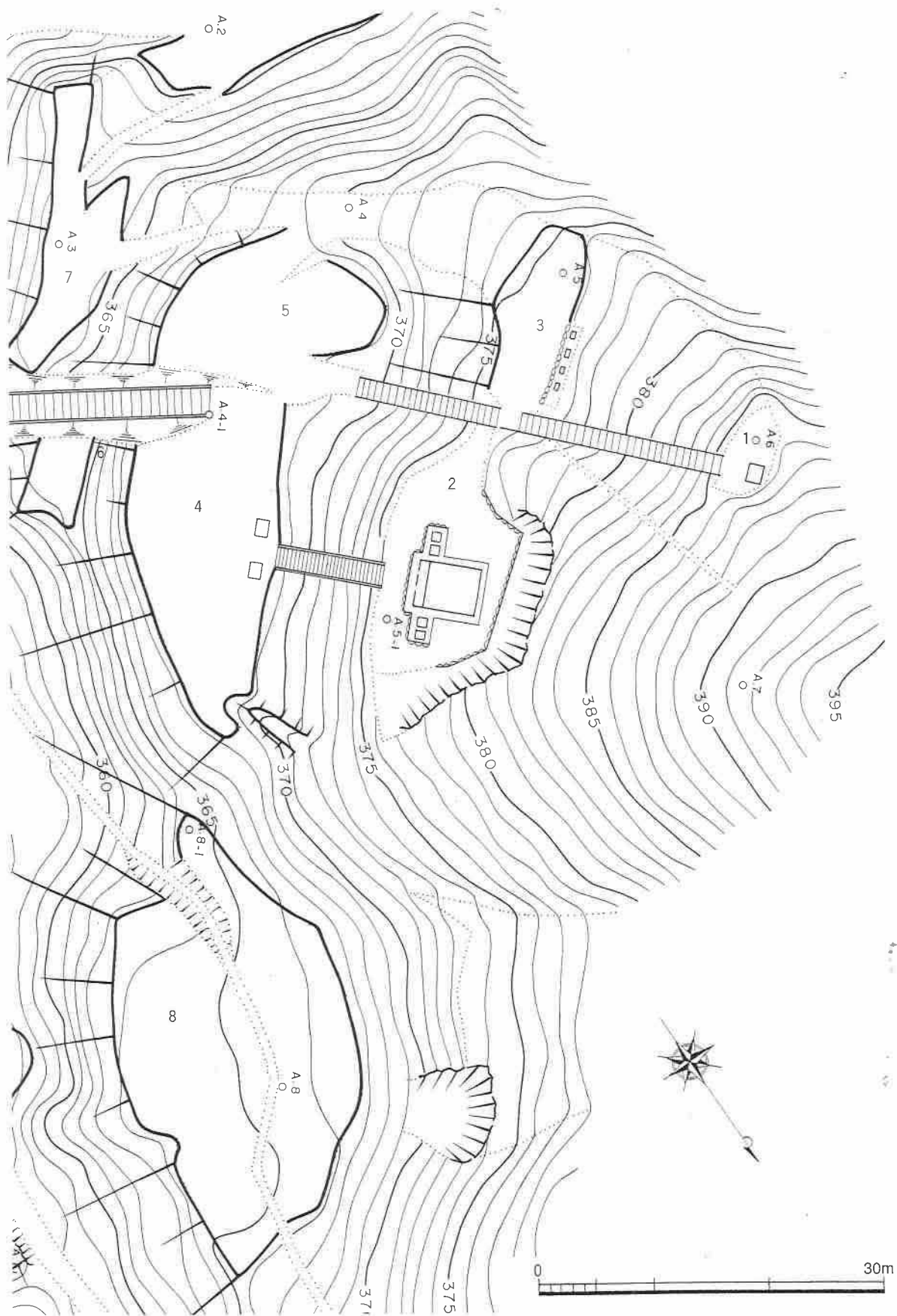
さて、京極氏一族の墓地3には、3基の大型の組合せ式五輪塔と2基の一石五輪塔が建つ。組合せ式五輪塔1基には「浄光院殿芳室宗□大禅尼 永正三年（1506）四月七日」の銘が刻まれている。伊吹町所蔵の絵図では、この墓地は故意に消されている。しかし、同絵図を元に写されたと考えられる伊吹町内の林家本や尾木家本には、本堂の上段に「御廟所」と石積で囲まれたような3基の五輪塔が描かれていることから、この墓地は、元の位置を保っていることが分かる。また、伝承では、京極高清の墓だけは清滝（山東町）の徳源院に持っていったという。寛文12年（1672）、丸亀藩主京極高豊が京極家の菩提寺である徳源院を復興し、三重の塔の建立とともに、付近に散在していた歴代の宝篋印塔を集めているが、このときに持ち出されたものである。上平寺区有文書には、元和2年（1616）に江戸幕府が上平寺塔頭の密蔵院に宛てた掟書きがある。

「掟 上平寺の事

一 本堂并鎮守社支配之事 附り境内可為用事也

（中略）

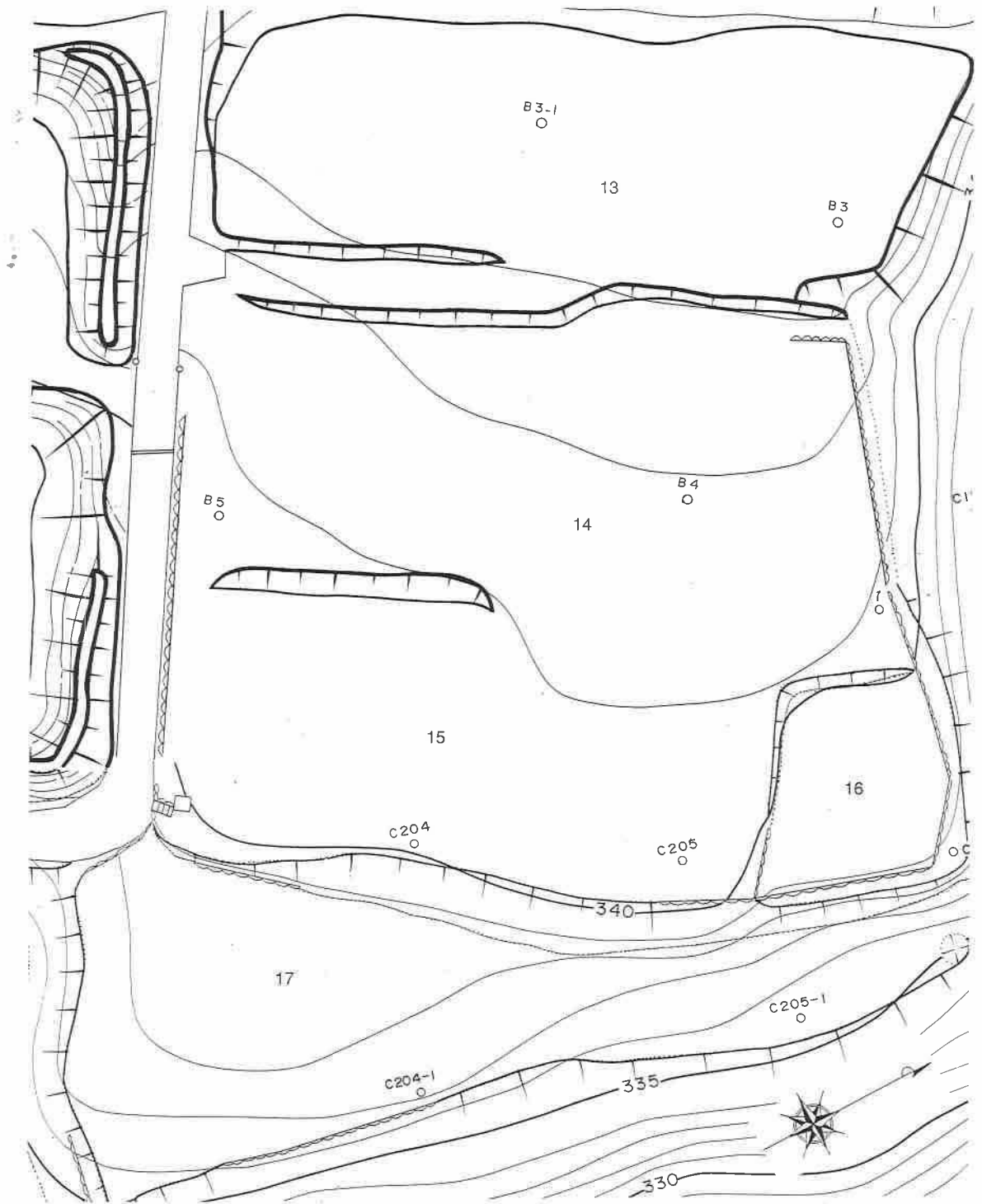
一 御廟所拜礼御供養読経可致勤仕事（以下略）」



第14図 伊吹神社周辺遺構図 (S=1/500)

このことから、高清の墓が上平寺にあったことがわかる。

1は、金毘羅社の勧進時期は不明であるが、勧進されたときに開かれた削平地であろう。



第15図 蔵屋敷周辺遺構図 (S=1/500)

4 蔵屋敷跡・弾正屋敷跡 (第15・16図)

絵図の「蔵屋敷」付近は6区画描かれているが、13～17をそれぞれとすると1区画足りない。絵図では「御屋形」12と13の間に道が描かれており斜面で止まる。また、13と14の間に描かれている道は、斜面を下って橋で藤古川を渡り、「牧馬・芝間」を経て国境の山に消える。『滋賀県小字取調書』に「裏道割」という小分け地名があり、小島1997では、この道もしくは、9から藤川郷に入る裏道(間道)をさすと考えられている。絵図の「牧馬」については削平地がある。また、ここから山の稜線に消える道は、上平寺と笹又(岐阜県春日村)を結ぶ上平寺越を示すものと思われる。この13・14間の道は、14の北側の石積に沿って斜面を下る。

さて、絵図ではこの道から東に2区画あり、さらに道が描かれている。この道は現地で確認できず、14が絵図の2区画を示すものと思われる。

「蔵屋敷」の記述は、中央の道がカーブする付近で、南北に並ぶ方形区画の北側の区画をさしている。測量図の15・16がこれにあたり、16が蔵屋敷と推定される。絵図には17に該当する細長い三角形の削平地も確認できる。

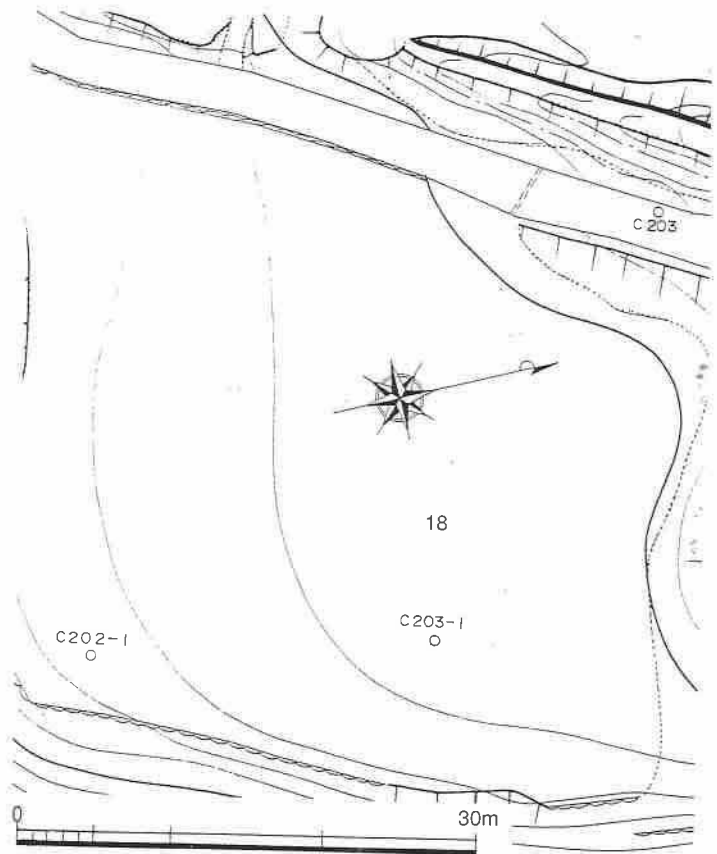
18は、絵図では2区画になっており、その北側に「弾正屋敷」の記載がある。『改訂坂田郡志』第3巻の巻頭図版に「上平館古図」があり、当該地を「大津屋敷」と記載している。絵図の元本の所在は分からないが、伝承地名として「オオツ屋敷」がある。このあたりは、江戸時代は畑だったという。

なお、15の南隅に五輪塔を祀った小堂があるが、周辺に散在していたものを集めたものという。

5 隠岐屋敷跡・厩跡 (第17図)

前述した、蔵屋敷や弾正屋敷がある中央道路を登る右手一帯が、比較的大きな区画が整然と並ぶのに対し、左手の削平地群は、最小の24から、最大の28までばらつきがあり、さらに、30の「隠岐屋敷」が方形を呈するほかは、不整形の削平地が多い。

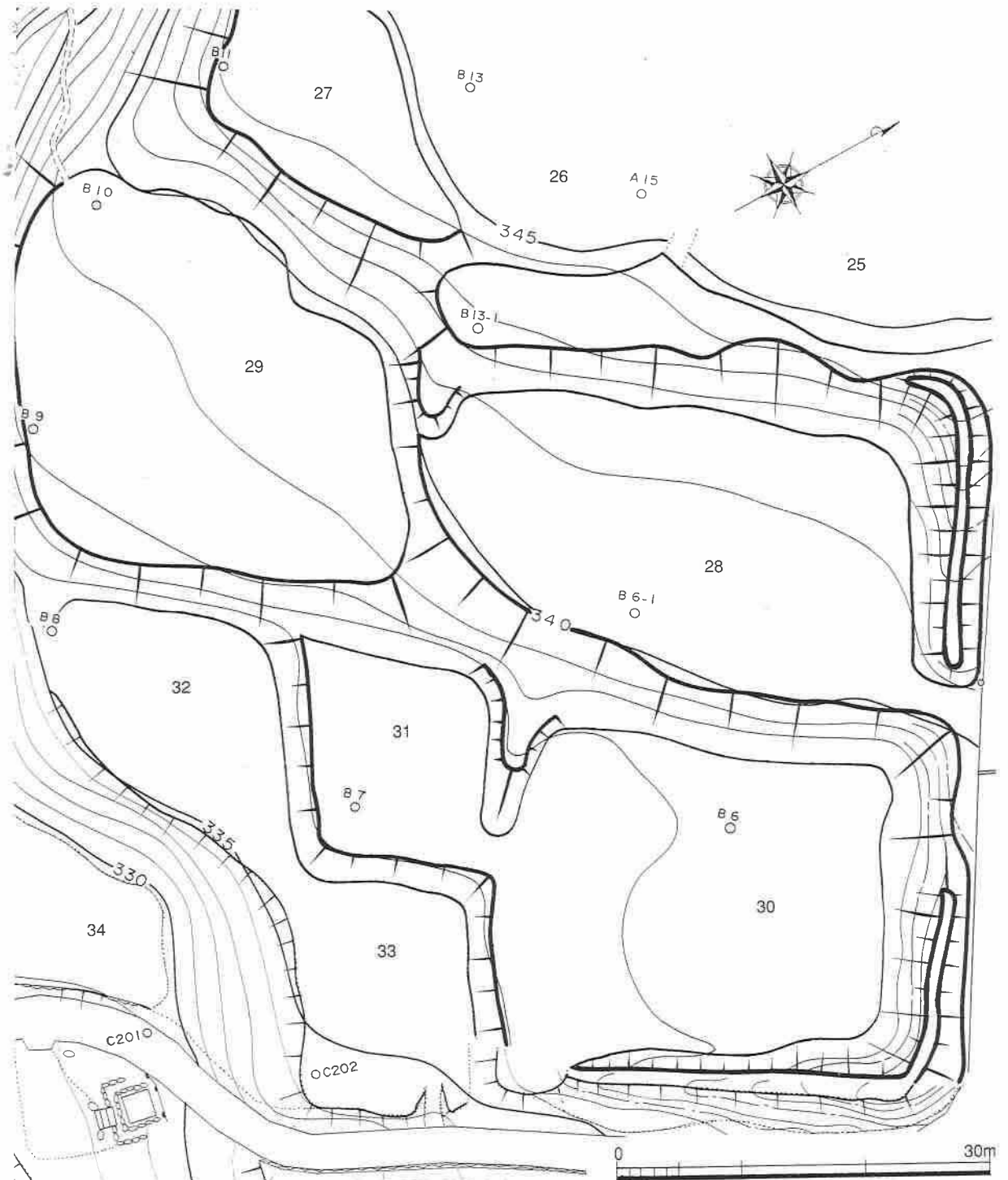
絵図では、風呂屋谷から館内にひかれた「養水」(用水)が描かれているが、23と24の間から、26と27、28と29の間あたりに該当すると思われるが、その痕跡は



第16図 弾正屋敷遺構図 (S=1/500)

確認できなかった。また、中央付近に風呂屋谷に下る道があるが、25・26と28の間の法面は中間でややフラットになっており、絵図に描かれた屋敷間の道の可能性がある。この道は、いったん29に下りて、この削平地の西隅にある風呂屋谷に下る道につながる。29は、絵図の「厩」に相当する。

28・30は、京極氏館内で唯一、明瞭な土塁を伴う削平地である。28の土塁は中央道路に



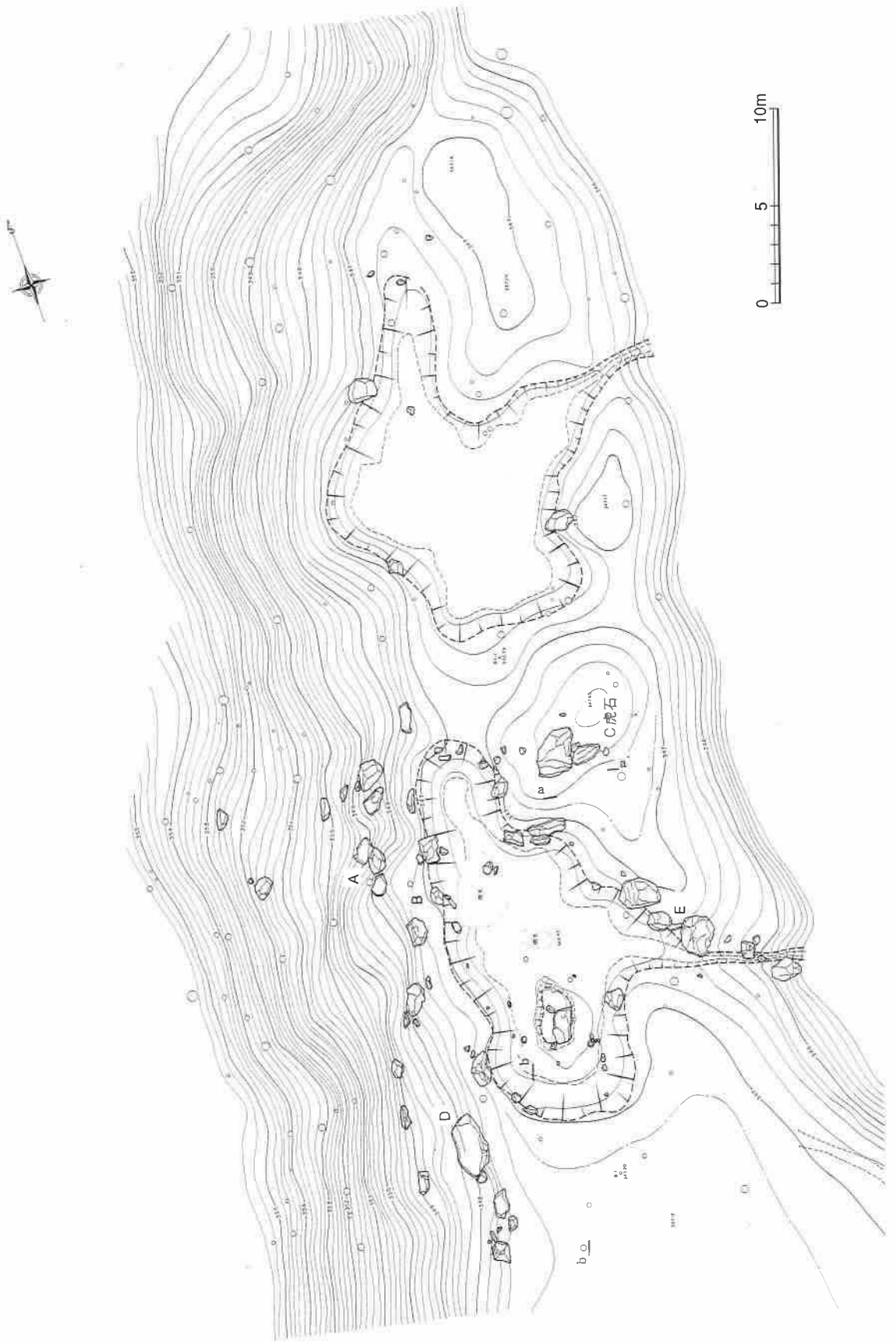
第17図 隠岐屋敷・厩跡遺構図 (S=1/500)

沿って延長約26mあり、山側で90度屈曲する。基底部幅5～6m、高さ2～3mを図る。

土塁は削平地の東コーナーで切れており、ここが入り口にあたると思われる。30の土塁は、中央道路に沿って90度屈曲する。北は延長約15m、南は延長約28mを測る。基底部幅は5～7mを図る。

34のあたりは、絵図では山林になっている。薬師堂などの移転により、過去に改変された可能性が高い。18・32・33との比高差は約5mあり、前面に「内堀」がある。集落からの道をここで屈曲させていることから、館の虎口的な機能を有していたと考えられる。絵図には「二ノ御門」の記載があり、門の存在が伺える。

絵図には「二ノ御門」の東には、「御手洗二用フ」「清明水」と「井」印が描かれているが、現地では確認できなかった。ただし、この付近は水が良く出ており、近年まで生活用水としてパイプを通して利用されていたことから、溜め井戸であった可能性もある。



第18图 京極氏庭園跡平面图

第3節 京極氏庭園跡

1 全体構造（第18図）

京極氏庭園跡は、京極氏の居館跡北側の奥まったところにあり、その範囲は最大幅南北約60m×東西20mであるが、これは平坦面だけで、景石が残る上段削平地の切岸部を加えると東西幅は約30mとなる。作庭主体は、上平寺に館を構え城下を整備した京極高きと考えられ、作庭者は分からない。時期は館が整備された16世紀の前半で、梅本坊公事的一件で高きが尾張に追われた大永3年（1523）を下限とする。作庭時期が明らかな武家屋敷庭園として、また全国的にも遺存数・調査例の少ない戦国期の武家庭園の中で、ほぼ原形をとどめる遺構として注目される。

絵図には「御自愛泉石」とあり、守護館に伴う庭園であることはまちがいない。京極氏の居館については、発掘調査を実施していないため内部空間が不明であるが、居館正面は南側と考えられ、庭園は最奥部に位置している。現況は山林で、2つの池跡と大小100点を数える景石が残る。庭石の小さいものは戦前に庭作りに持っていかれ、集落内や隣接する寺林集落で確認することができる。また、大垣方面にも売られた石があるという。石は南側の池に多く、中島状のものや護岸石が残る。逆に北側の池はあまり残っていない。古賀信幸氏の観察では、南の池のすぐ南側の平坦地付近に立つと、それぞれ別々に配置されているように見える景石が一方向を向いて、その石の一番形の良い面が見えるように配置されていると述べられている（『戦国期庭園の調査』2003『京極氏の城・まち・寺』伊吹町教育委員会）。この部分に、会所的な施設があり、その建物から一番良く見えるように石の配置・配列が計算されていると考え、池泉観賞式の庭園との解釈をされた。別に、二つの池は別々に作られ、使用時期が違う可能性も想定されている。いずれにしても、今後の詳細な調査で明らかにしていきたい。

二つの池の間は、島状の高まりになっており、その中央に巨石がやや傾いて立つ。この石は地元で「虎石」と呼ばれている。平らな石と斜めに立つ石の二つで構成されており、亀島（手足の石を配した高まり）上の鶴と亀を表すという見解もある。斜面中央付近の石組は、滝副石（A）や水分石（B）といった役石を想定することができる。虎石は羽根を持った鶴石組（C）、南西側斜面に横に据えられた大石を亀石組（D）に見立てることもできる。南側の池の排水路には石橋が架かっていたようで、橋挟石（E）が見られる。今後、一乗谷朝倉氏遺跡の湯殿跡庭園などを参考に庭園構造の検討を進めていきたい。

用いられている石は、護岸の石にわずかに砂岩が用いられているほかは、ほとんどはチャート質の石材で、館の東に谷を作る藤古川に散在している。

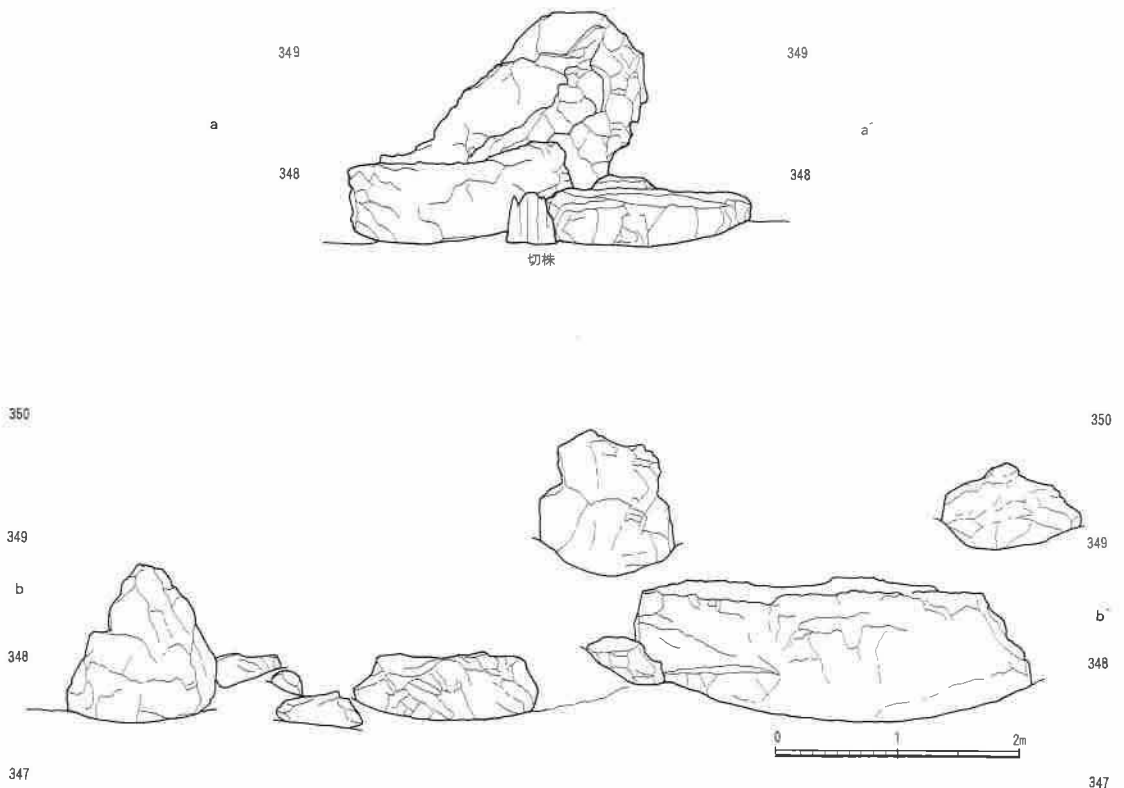
また、内堀付近に「ヒトハカリ石」という名の石があり、その上の平らな石は京極氏庭園から持ってきて内堀の橋に架かっていたものだと伝えられている。

池の水は、導水施設などは確認しておらず、現状では上から溜まったもので普段は水があり、11月頃に枯れる。排水施設については明瞭に残っており、それぞれの池が東側に排水

路を持つ。

こうした館に伴う庭園が、守護ないしは幕府に連なる有力武士の館に通有のもので、室町幕府の下で発達した、庭園を臨む会所での儀礼という共通の目的のための施設と考えられる（小島 1997『城と城下』）。周防山口の大内氏館、飛驒の江馬氏館（飛驒市）、越前一乗谷の朝倉氏館（福井市）、信濃の高梨氏館（中野市）などの庭園がこうした系譜を引く。

いずれにしても、京極氏庭園は、京極氏の権力を具現化するものであり、16世紀前半の守護館をそのまま残す貴重な事例である。



第19図 京極氏庭園跡景石立面図

第4節 家臣屋敷跡

1 全体構造（第20図）

滋賀県教育委員会がおこなった中世城郭分布調査では、家臣屋敷が集まるこの地域を「上平寺南館」としているが、この名称が遺構の性格とそぐわないように思われることから、『分布調査概要報告Ⅱ』（2000）では、小字名から「高殿地区」とした。しかし、今回は遺跡の性格をストレートに表す「家臣屋敷跡」を用いることにする。

家臣屋敷跡は、伊吹山頂から南へのびる尾根が、上平寺集落の西側に舌状に張り出した先端部にあり、標高285～330m付近にあたる。この尾根は、西側の政所川から弥高川・天野川を経て琵琶湖に流れる水系と、藤古川から牧田川・揖斐川を経て伊勢湾に流れる水系の分水嶺となっている。

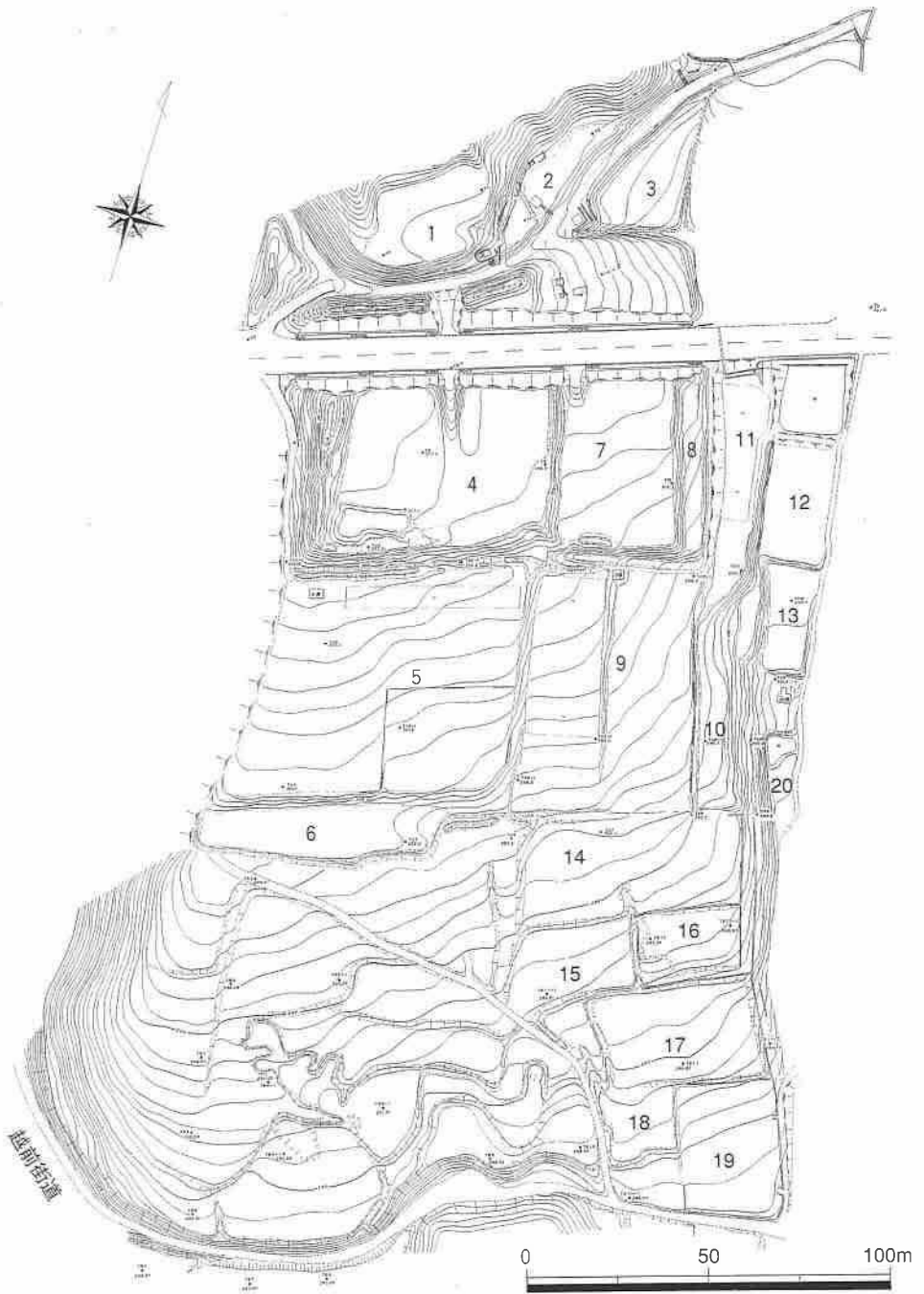
1から北は、馬の背状の尾根で削平地はない。西は絵図に「要害谷」と記された深い谷で、現在は埋め立てられている。東は水田で、城下地区になる。南端の「越前街道」の南にも削平地があり、光了寺跡などがあるが、今回の調査区には含めなかった。

遺跡内の北部は、昭和45年頃に開通した町道藤川相撲庭線により分断されている。さらに、地形図作成後に、町道川戸線改修で1～3間の堀切状の道は、平成10年の拡張工事により改変され、さらに残っていた3の北側の土塁も削平された。

全体の範囲は約300m×約150mを測る。絵図には「駒繫」「若宮」「加州」「多賀」「浅見」「黒田」「西野」「上臈衆」の各屋敷が描かれている。屋敷区画は、北半部と、南半分の東側に集中し、同西側は土取り等により著しく現状が変更されている。

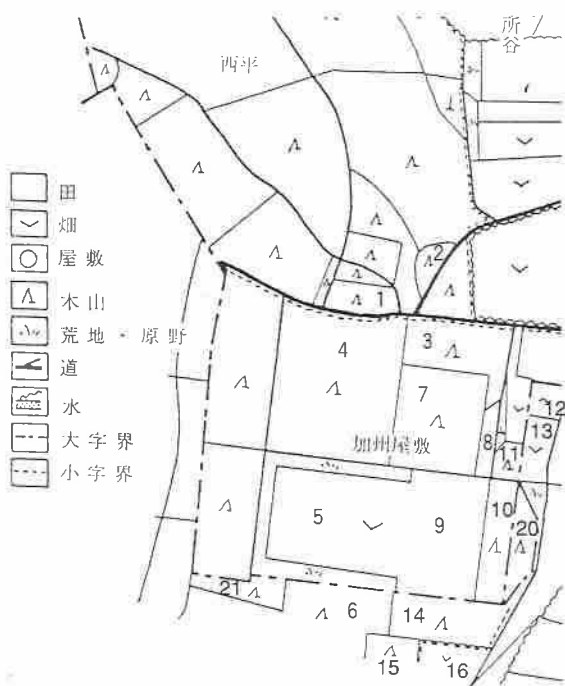
ここではまず、各削平地の規模と内容を以下に記載する。数値は各削平地の最大幅を南北×東西で示す。主要な遺構については、項を改め『絵図』と対比しながら検討したい。

- 1 21m×40mの楕円形の削平地である。絵図には「駒繫」の記載がある。西および南側に土塁があり、南東端に2からの入り口を持つ。現在は分水嶺公園になっている。
- 2 10m×45mの細長い削平地で、南西端は一段高くなり墓地として利用されている。中央山手には杉本坊歴代の墓地がある。町道川戸線工事および分水嶺公園整備により改変されている。
- 3 18m×40mの区画で、緩やかに東へ下る斜面となっており、削平地とは呼べないかもしれない。延享2年（1745）の「當寺中興贈法印大阿闍梨光昌大和尚」の墓石が建つ。また、付近に町道工事の際に出土した石をつんだ塚がある。
- 4 45m×55mの方形の屋敷地である。北側を町道藤川相撲庭線により分断されており、平成10年までは、その北に土塁が残っていた。土塁は、屋敷地の西側と南側西半分に見られるほか、7との境にも若干確認できる。南西端に池状の窪みを確認した。
- 5 60m×70mの方形区画で、南西端がやや張りだしている。家臣屋敷地区最大の屋敷地である。4との間に堀状遺構と土塁をもつ。南東隅に27m×34mの区画がある。

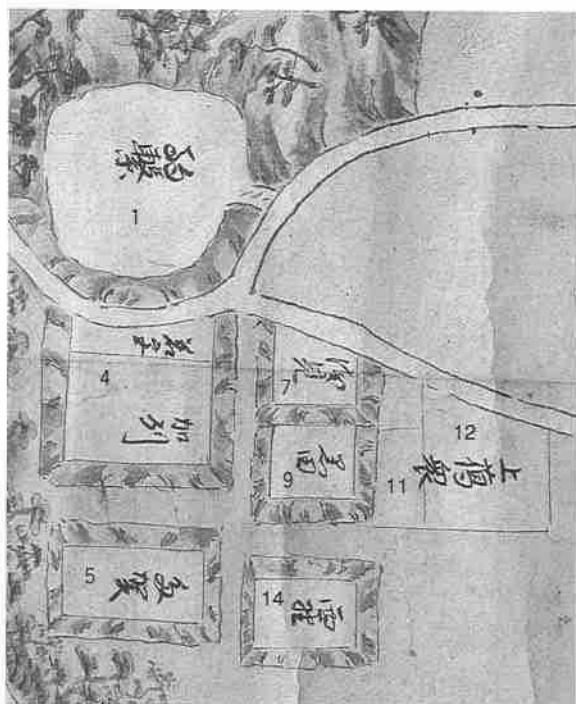


第20図 家臣屋敷跡地形図

- 6 5の南に付随する14m×64mの細長い削平地である。
- 7 45m×30mの方形の屋敷地で、4との比高差は約2mを測る。北端を町道が破壊している。
- 8 45m×5mの細長い区画で、7との比高差は約1.5mである。



第21図 家臣屋敷跡地籍図

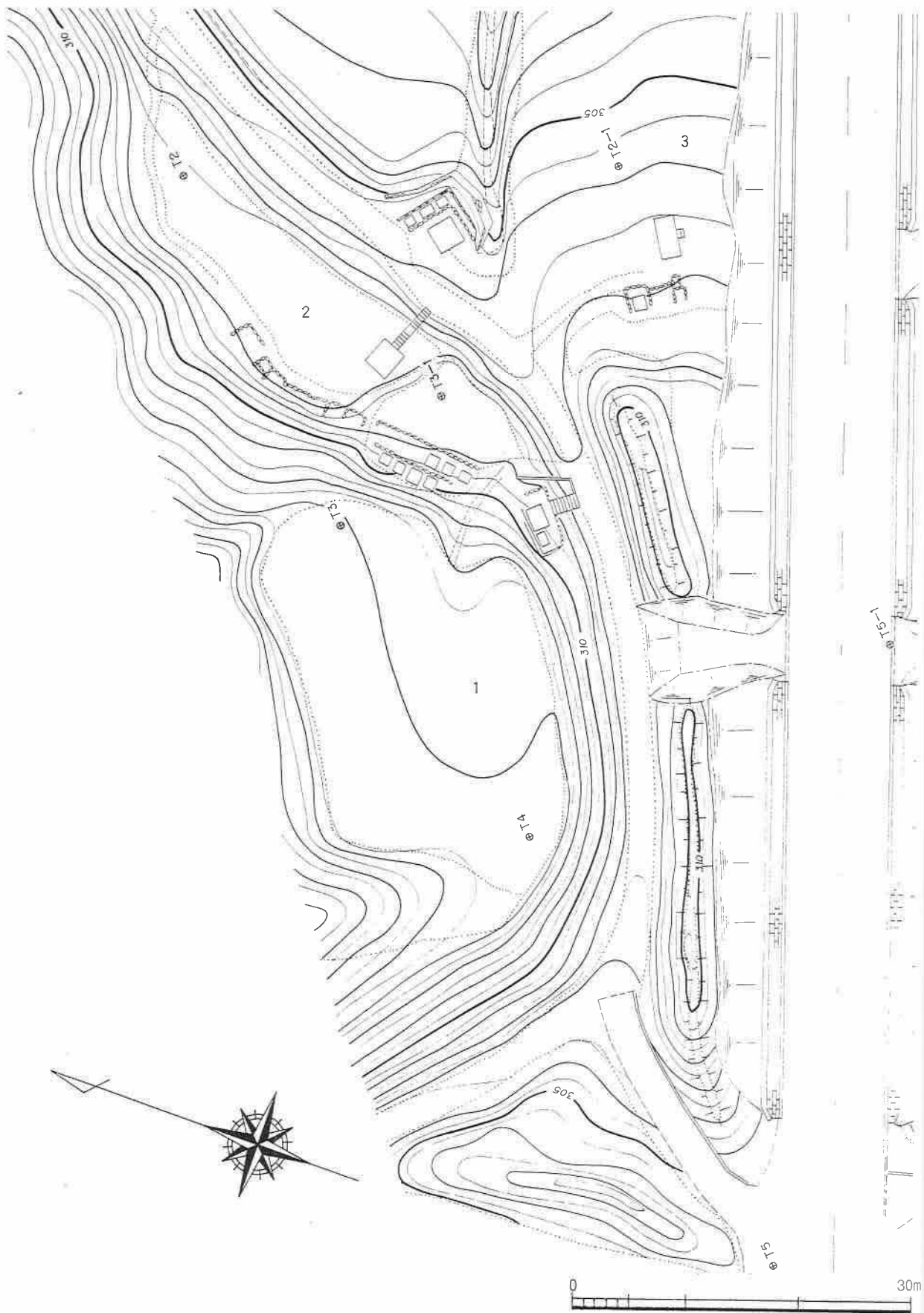


第22図 家臣屋敷部分の絵図
(番号は第20図に対応)

- 9 66m×48mの屋敷地で、中央に約0.5mの段差がある。北西端に堀状遺構と土塁が残る。5との比高差約1m。7との比高差は約1.5mを測る。
- 10 40m×10mの不整形の削平地で、9との間に幅約2mの溝がはしる、一体のものか。
- 11 60m×11mの細長い削平地で、8との間には北から9への侵入路がある。
- 12 31m×17mの長方形の削平地である。北側には約17m四方の貯水池が隣接する。11との比高差は約2mである。
- 13 28m×13mの長方形の削平地である。西側一段上に小区画がある。
- 14 30m×60mの長方形の削平地で、ここから南は大字藤川の字「西野々」となる。9とは高さ約0.6mの石垣で区画されている。
- 15 17m×30mの削平地で、南西端は道に開く。
- 16 15m×28mの長方形の削平地である。17との間に最大幅約2mの通路状の遺構がある。
- 17 25m×40mの長方形の削平地である。
- 18 17m四方の正方形区画である。
- 19 35m×27mの方形区画で、南は北国脇往還に接する。家臣屋敷跡の南端に位置する。

以上、各削平地の概要を述べた。

『概要報告書Ⅱ』では、今回の調査で確認した現況区画と、絵図および明治初年の地籍図との比較から、それぞれの削平地の性格について考察した。それぞれの対比については第21・22図を参照いただきたい。以下に、主要遺構の状況について検討する。ただし、絵図の表記がどこまで信頼性があるのかは、項を改めて検討したい。



第23図 駒繫跡遺構図 (S=1/500)

2 駒繫跡（第23図）

1は、絵図の「駒繫」にあたる。隅丸方形に描かれ出入口を東へ開けているのは調査時の現況と同じである。ここから北は字「西平（にしべら）」である。1は、通称「カイコザンマイ」あるいは「相撲取場」と呼ばれていた。北は伊吹山から伸びる尾根であり、南は、4との間の堀切道で比高差約6mを測る。西側は現在埋め立てられているが、もとは深い谷で絵図の「要害谷」にあたる。

標高は約313mで、堀切道を臨む南側と、要害谷側には土塁がある。南側の土塁は低く、最も高い所で約28cm、東に行くにしたがって低くなり入り口付近で消える。西側の土塁は、この削平地を構築する際に削り残したものと考えられ、長さ約15m、基底部幅約10m、付け根部の高さ約4mを測る。北東端もわずかに土塁状の張出し部がある。

分水嶺公園整備に伴う発掘調査では、「駒繫」の内容や性格を明らかにする遺構は出土しなかった。しかし、土層断面の観察などから、1が京極氏時代に尾根をカットして整地されたと判断された。また、明確な柱穴などが確認されなかったことは、まさにこの場が城下の馬を留め置く場であり、仮説的な施設であったことを物語っているのかもしれない。また、堀切道の上部にあり、土塁を設けて城下西側の防御を担う武者隠し的な削平地と捉えることもできる（2002『駒繫跡・杉本坊墓地』伊吹町教育委員会）。

2は絵図には描かれていない。絵図成立時点では杉本坊の墓地がなかったとも考えられる。ちなみに2の発掘調査では、杉本坊関連の墓がこの地に確実に営まれたのは、埋葬施設を伴って出土した延享3年（1746）の墓石であることを確認した。この墓地には、この墓石を含め、自然石に五輪塔を陰刻したものや、一石五輪塔・板碑・石仏など23基以上の墓石がある。

3 若宮氏・加州氏屋敷跡（第24図）

4は北端を町道により大きく寸断されているが、道の北側にもかつて土塁が残っており、南東部を除いて土塁で囲まれていた。特に要害谷に面する西側の土塁は、最大で高さ約3.5m、基底部幅約10m、堀切道を挟んで1と対峙する北側の土塁は、堀底からの高さ約3mと大きく、防御性が高い。南側の土塁は西の土塁が屈曲して中央付近で消える。高さ約0.9mを測る。東側は中央から北に低い土塁があり、町道端で消える。また、町道から北では確認できなかったことから、4の北東端は土塁が切れていた可能性がある。

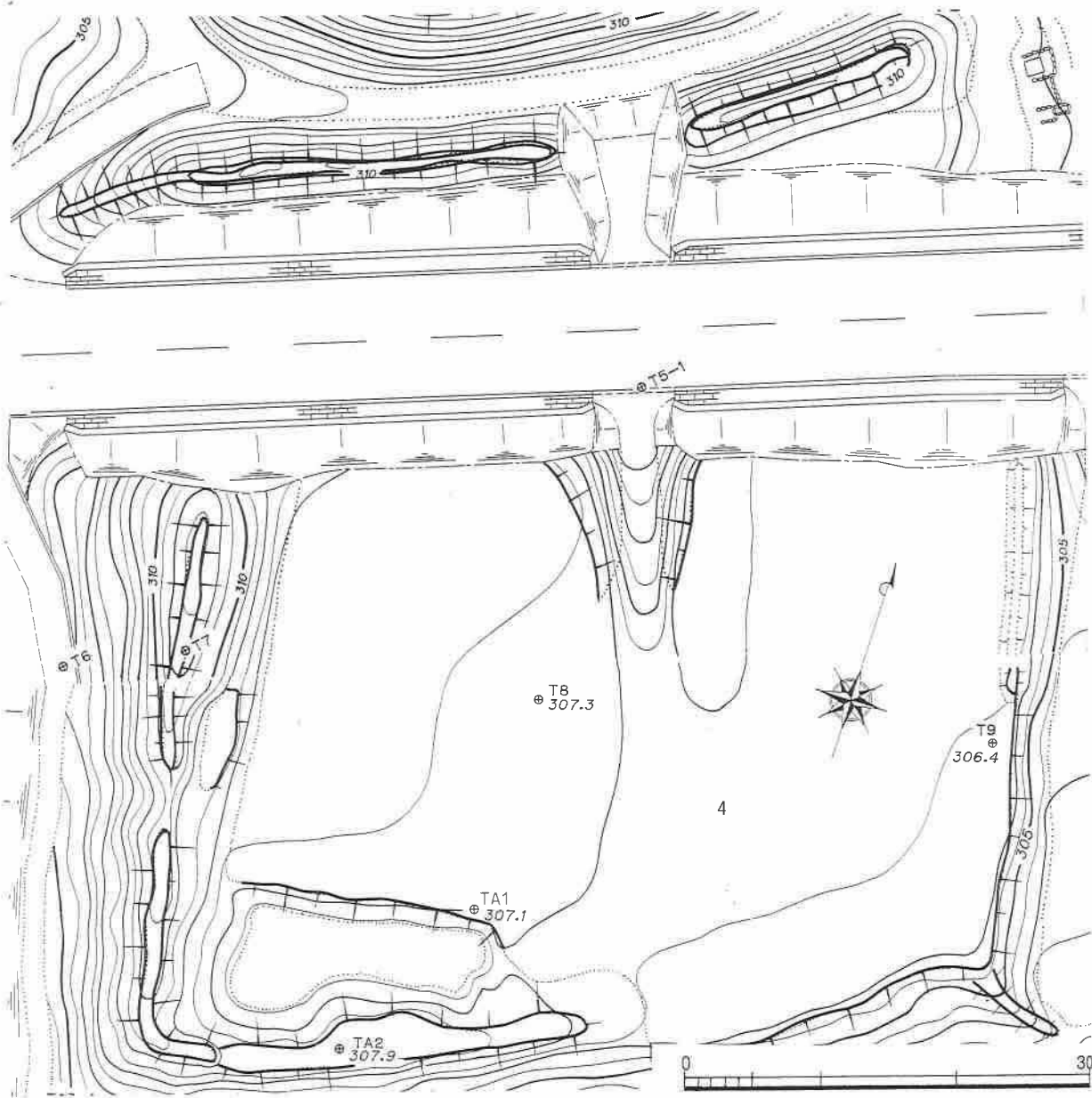
このような土塁の状況から考えると、4の入り口は、堀切道から北東端へ入る道が考えられる。町道拡幅の際に、4の北東部で検出した門か築地の基底部と考えられる石垣は、ちょうど北東端からの進入経路にあたり、屋敷内と通路を画すものと考えられる（2002『推定若宮・浅見屋敷跡』）。

その他、4の南西端には土塁に囲まれたように17m×7mの不整形の窪みを確認した。屋敷に伴う庭園とも考えられるが、石などは確認されなかった。

さて、『概要報告書Ⅱ』では、1の北半分を絵図の「若宮」、南半分を「加州」と判断し

た。絵図の描写では、「多賀」「浅見」「黒田」「西野」の家臣屋敷が土塁か法面と思われる明瞭な区画で囲まれているのに対し、「若宮」「加州」の間は実線のみで区画され、同じ屋敷地内にあるように見える。このことから4に両者が并存していたと考えた。地籍図では、現在の字「高殿」全体を「加州屋敷」としている。また、小島氏の報告では、高殿の11・12番地のみを「加瀬屋敷（カセノヤシキ）」といい、「その地主は、豪族が住んでいた、カセはカシュウではないか、と言っていた」と、古老の話を紹介している。11番地は7、12番地は3と8にあたり、4の南半を加州屋敷とする考察とは若干の齟齬が生れる。

若宮氏および加州氏については、『概要報告書Ⅱ』で触れた。若宮氏は、坂田郡飯村（近江町）に本拠を置く一族で、京極持清のもとで多賀氏と交代で所司代を務めるなど、古く

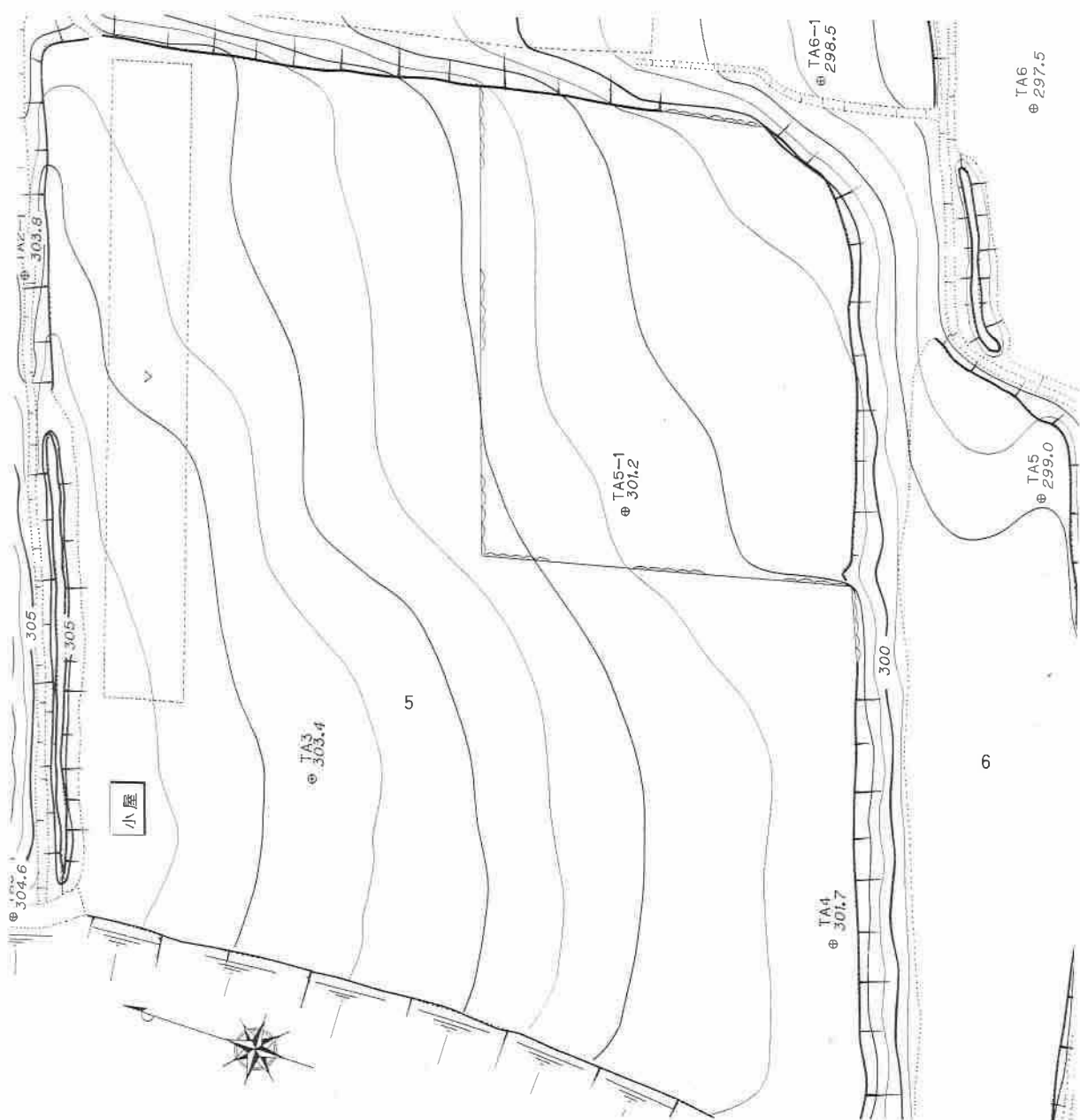


第24図 若宮氏・加州氏屋敷跡遺構図 (S=1/500)

から京極氏の有力な被官であった。加州氏は、坂田郡長岡（山東町）を本拠とした京極氏の支族で、京極高敷を祖とした。代々加賀守を称したので、加賀または加州を名乗る。（以下、各氏の概要についても『概要報告書Ⅱ』参照）

4 多賀氏屋敷跡（第25図）

5は「多賀」屋敷と推定する。4との間に幅約0.5m程度の浅い溝と、北西端の低い土塁状の盛り上がりを除くと、四周に防御施設を持たない。9の北側を通るルートが屋敷地への侵入路であろう。南側に約1.5m落ちて6の削平地を伴うが、これより南、北国脇往還まで明確な遺構はなく、絵図・地籍図ともに林になっている。



第25図 多賀氏屋敷跡遺構図（S=1/500）

地籍図では「加州屋敷」の文字の南に、広い畑の区画があり、区画の中央西側外周が逆コの字の荒地・原野になっている。これは土塁をあらわすものと考えられるが、現状ではこの部分に明瞭な土塁はない。上段4には、前述したように同様の土塁が現存する。しかし、地籍図の区画からは、ここが5と9になると考えられ、小島氏の聞き取りでも「多賀屋敷というが、確かでないともいわれる」と、可能性をのこす。

多賀氏は、京極持清頃までの京極氏の重臣で、守護代や京都所司代を務めた。犬上郡下之郷（甲良町）を拠点とする豊後守家（豊州家）と、浅井郡月ヶ瀬（虎姫町）を拠点とした出雲守家（雲州家）に分かれるが、後者は長享元年（1487）高次に敗れ断絶している。

5 浅見氏屋敷跡・黒田氏屋敷跡・上臈衆屋敷（第26図）

7は絵図の「浅見」屋敷と推定している。北側を町道で掘削されているが、地籍図で判断すると、4および、3・8（元は一区画）で囲まれており町道あたりが北端となる。4のように顕著な土塁は見られないが、南西端に基底部幅約2mの3つの土塁で囲まれた虎口状の空間を確認した。

浅見氏は、浅井郡尾上城（湖北町）を拠点にしており、文明2年（1470）の京極家内紛以降の京極家被官である。家臣団の中ではかなり力を持っていたようで、大永3年（1523）のクーデターでは、浅見貞則が盟主となっている。

9は「黒田」屋敷に該当すると思われる。5との段差があり、さらに9も中央に段差を持つが、地籍図の記載では、前述したとおり5と同じ区画の畑地として描かれている。絵図では「浅見」に続く単独の屋敷地として描かれている。黒田氏は、京極満信の子宗満を祖とする支流である。坂田郡黒田庄を領した。

絵図の「上臈衆」は、三つに区画されている。西側の南北二区画と東側の台形状の区画である。上臈衆とは、高次に近住していた武士団でその屋敷を指すと考えられる。小島氏の調査では、「小字高殿東端の田をジョウロウヤシキと言う。その東の山すその田は、小字上平になるが、ジョウロウヤシキと言っている」とあり、町道北の畑地までを含む。今回の調査地のうち、11が絵図の西側南区画で、北区画は道路敷きと北の畑地、12は東側の台形区画にそれぞれ該当すると思われる。平成10年度の発掘調査では、伝世品と思われる白磁皿の破片が出土しており、ある程度の階層の人物が住んでいたのではないだろうか。

6 西野氏屋敷跡（第27図）

14は絵図の「西野」屋敷と推定している。9と14は、大字上平寺と藤川の境で、14から南は字「西野々」となる。この地名は「西野」屋敷と関連していると思われる。

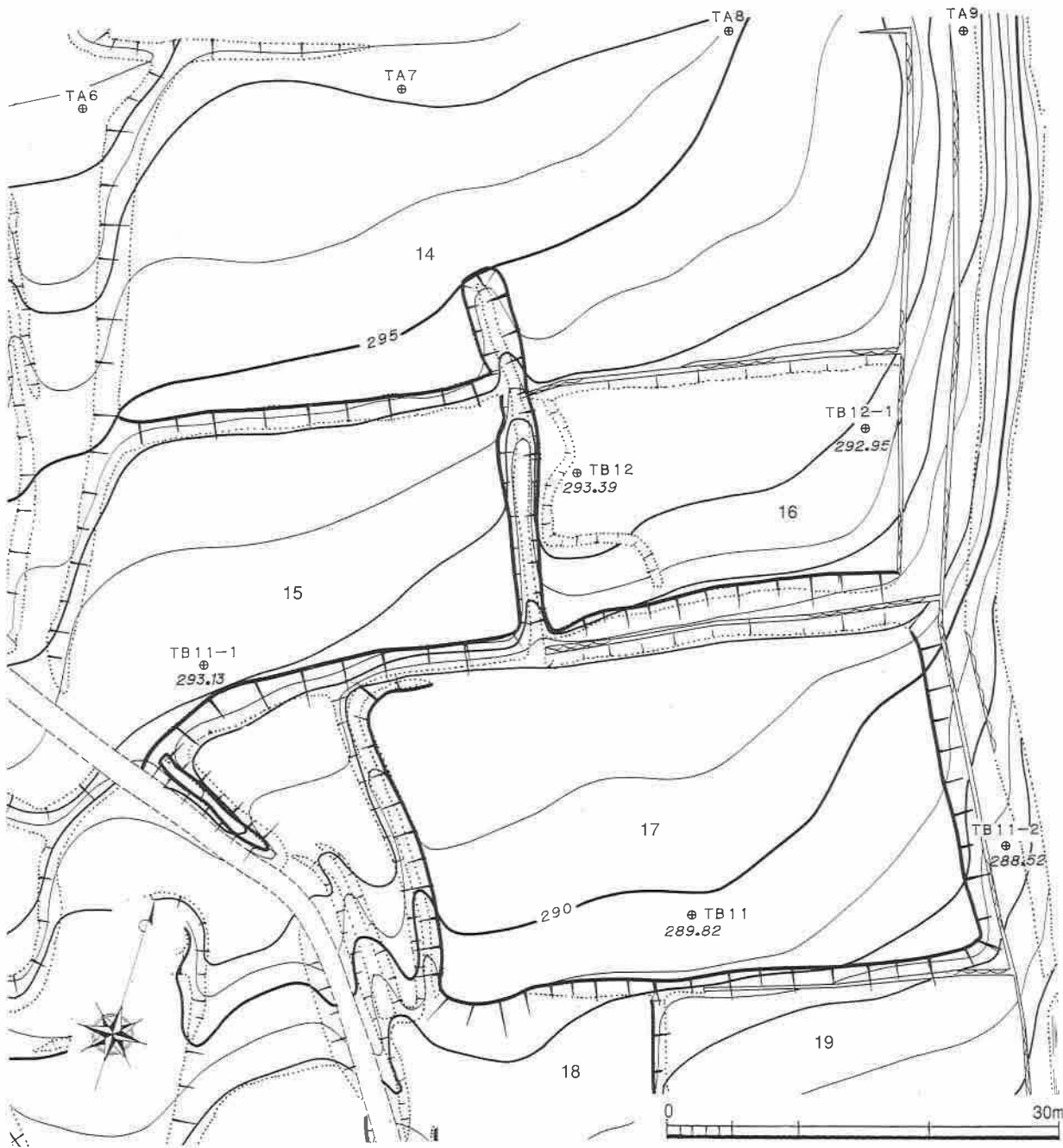
北西隅に9から続く通路状の遺構があるほか、10から14の東側を通り、16・17間の道から15・16間を経て14に入る道があり、このあたりの屋敷群を結ぶものであろう。これらの屋敷群は、とくに防御施設を持つことなく、19で北国脇往還に面す。

14は、伊香郡西野城（高月町）を本拠地とした京極氏の被官・西野氏の屋敷と考えられる。



第26図 浅見氏・黒田氏屋敷跡遺構図 (S=1/500)

家臣屋敷の南側を迂回する北国脇往還は、東山道を関ヶ原で分かれ、藤川・寺林を経て上平寺城下の南端を通過して、大清水・春照から北国街道木之本に合流する古代からの重要な交通路である。町内の藤川（寺林）・春照は江戸時代の宿場町であり、上平寺城下はこの道を経済的な拠り所として取り込んでいることがわかる。



第27図 西野氏屋敷跡遺構図

第5節 上平寺城跡

1 全体構造（第29・30図）

測量範囲は、城跡の北を区切る通称「大堀切」から、南端の豎堀群までとした。東西は、川戸谷および赤谷の急斜面で、要所に配置された豎堀の先端と思われる部分までを図化するようにした。この結果、測量範囲は南北約450m、東西約150mとなった。

平成5年以前の上平寺城跡は、標高669mという高所に加えて、雑木に覆われ、全域が熊笹と茨が繁茂するブッシュであった。また、山麓上平寺集落からの登山道はほとんど使われることなく、西尾根上の弥高寺からのルートはすでに消滅していた。さらに、熊の出没もあり、近づこうとする研究者を阻んできた。

伊吹町教育委員会では、平成2年から県指定史跡弥高寺跡の主要遺構と遊歩道の確保を目的に刈り払いを行ない、平成5年から上平寺城へのルート開拓と、整備を順次行なって、ようやく主郭に到達したのは平成7年のことであった。以後、主郭から思い切った雑木の伐開を行ない、平成13年、東西の腰郭と最南端の巨大な豎堀の刈り払いで、ほぼ全体の遺構確認を終えることができた。また、この間平成11年には、山麓の上平寺館からの登山道の刈り払いを行なった。これらの作業により、ようやく測量調査を行なうことができた。

城跡は伊吹山より南に派生する、刈安尾と呼ばれる尾根の先端に構築されている。標高669.0mの山頂の主郭1を頂点にして、主な曲輪が順に並び、中央の道で結ばれている。主な曲輪には一段低く腰曲輪を配置し、各曲輪の間に堀切や豎堀を有効に配して防御性を高める。主郭および中央部の曲輪3・4は、土塁囲いとなっており、高く厚い土塁を屈曲させて虎口㊤を設け、外柵形空間5を構成する。南端の曲輪10は城中で最も大きい。土塁は用いられていない。その先端には、11条の豎堀㊦～㊧が放射状に展開しており、土塁囲いの虎口とともに、上平寺城で最も見ごたえのある空間である。

絵図では各曲輪を方形に描くものの、その配列はほぼ現況のままである。山城部の右肩には「霧筒城」の記載があり（伊吹町本では消されている）、主郭に「本丸」、その南の曲輪に「二」、真ん中の堀切を挟んで「三」と記されている。二、三は、それぞれ二の丸、三の丸を指し、本丸とともに中世には用いられなかった城郭用語である。「三」の腰曲輪には「此所小屋敷」とあり、さらにもう一段東に小曲輪が描かれているところなど、現況に非常に忠実である。2つの堀切は「ホリ」「湟」と記されている。館から山城への道は、尾根筋を曲りながら登ることから「七曲」と呼ばれていたようだ。この尾根には「刈安尾」の記載がある。

上平寺城の名称については、『概要報告書Ⅲ』で、中井均氏が以下の考察をしている。「城郭が存続していた時代の史料にその名を見出すことはできない。『江北記』では「大永三年三月九日 かりやす尾の御城より御忍にて尾州へ御取退候。」とあり、かりやす尾城と呼ばれていたことがわかる。さらに、『信長公記』元龜元年（1570）6月条には、「たけくらべ、かりやす両所に要害を構へ」と記されている。また、後世の資料でも、例えば『上平

『山城絵図』（伊吹町所蔵）は江戸時代初期に描かれたもので、「霧箇城」と記されており、城が所在する尾根を「刈安尾」と記しているが、上平寺城は見えない。さらに明和七年（1770）、深井彪によって編纂された『諸国廢城考』でも「刈安城」と記されている。

ところが、近世の地誌『近江輿地志略』では「上平寺は伊吹八箇寺の内也、真言宗也。門前の在家十軒許、西北の尾上に京極の居城の跡あり、上平殿といふ。天守の土台石垣今に歴然たり。」と記されており、上平寺という寺院の存在を記し、城跡については上平殿と称している。また、『江州佐々木南北諸土帳』には「伊吹山刈安上平寺城主江北太守」とあるほか、『寛政重修諸家譜』の「京極家譜」では「（元龜元年）十一（二）月右府、浅井・朝倉と和睦のち高吉も上平寺城にかへる、」とある。

つまり、城が存続していた段階ではかりやす城、あるいはかりやす尾城と呼ばれていたようであり、近世の地誌で初めて上平寺城の名称が登場するようである。しかも、上平寺城についても本来は伊吹山寺に関わる上平寺という寺院名であり、その寺院を利用して築城されたことにより、上平殿と称されたのが後に上平寺城と呼称されるようになったようである。

さらに地元では上平寺城とは呼ばれておらず、京極氏の祖、氏信が鎌倉の桐ヶ谷に邸を設けたことに由来する「キリガジョウ（桐ヶ城）」と呼ばれるのが一般的であった。

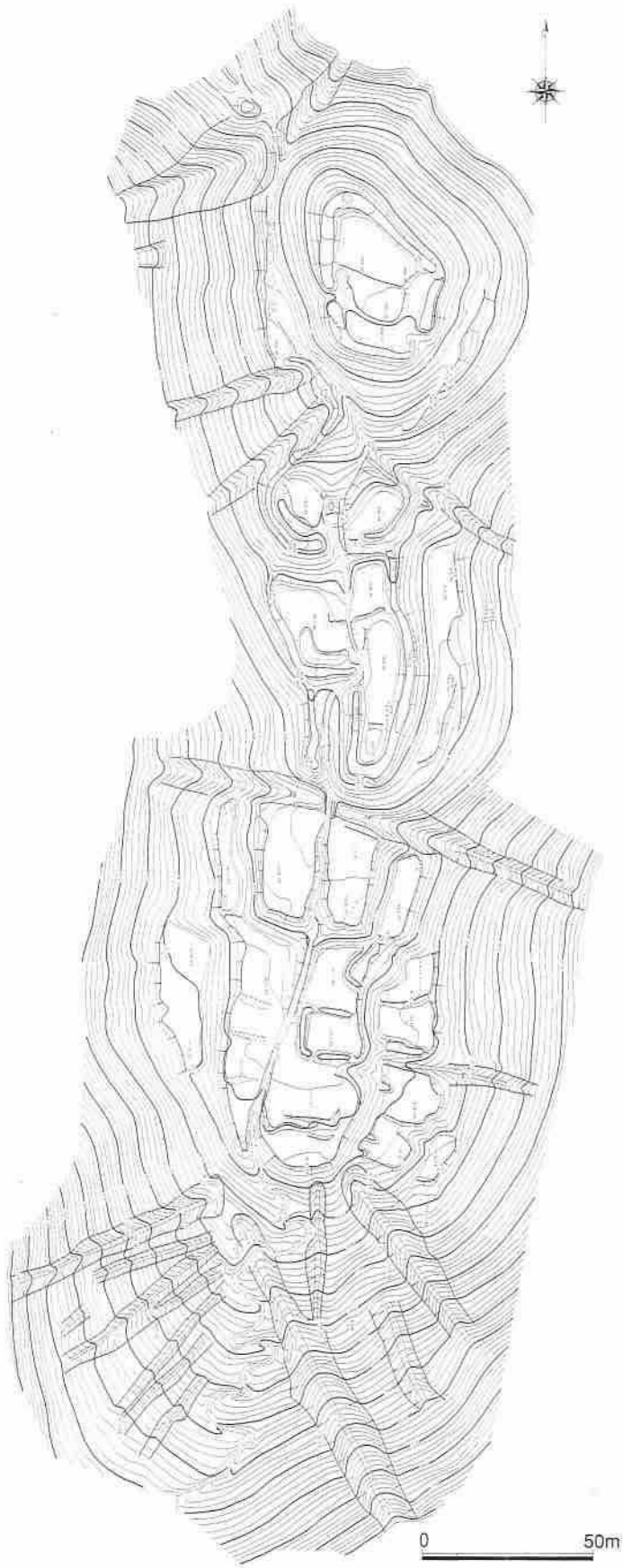
こうしたことから、本来刈安城跡あるいは桐ヶ城跡とすべきであるが、現在の研究ではほぼ上平寺城跡の名称が定着しており、ここで刈安城跡・桐ヶ城跡に改称すると、かえって煩雑で混乱をまねく恐れがあり、本稿でも上平寺城跡を用いることとした。」本書もこれに従うことにした。

ここではまず、各遺構の規模を以下に記載する。数値は最大幅を南北×東西で示す。ただし、各曲輪を1～17、堀切・豎堀を㊦～㊩、その他の遺構を㊰～㊲で表した。主要な遺構については、項を改め『絵図』と対比しながら検討したい。

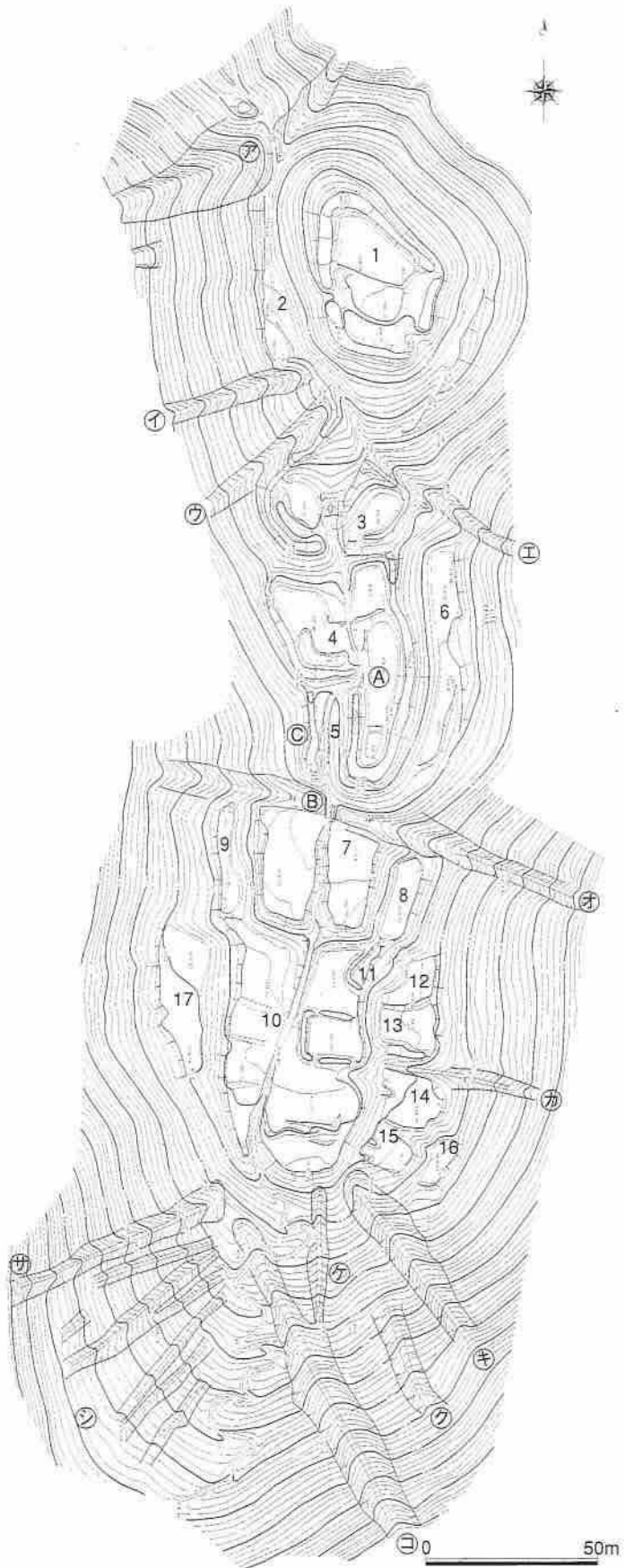
- 1 主郭で、46m×35mの平面台形状を呈す。四周を土塁で囲まれ、東西に1ヵ所づつ虎口が認められる。絵図の「本丸」にあたる。
- 2 主郭の切岸直下に設けられた帯曲輪で、49m×8mを測る。尾根筋から曲輪3への連絡路としても機能している。
- 3 20m×42mを測る。中央通路を挟んで東西に分かれ、三方に土塁が巡る。絵図に「二」と記された曲輪である。
- 4 62m×37mを測る。最大で天場幅約4m、基底部幅約8m、高さ約1.5mの土塁が巧妙に巡り虎口㊰を構成する。



第28図 上平寺城跡部分の絵図



第29图 上平寺城跡地形图



第30図 上平寺城跡遺構図

- 5 4の南西外側に付属する枅形空間で、25m×10mを測る。
- 6 4の東側直下の長大な腰曲輪である。63m×7mを測る。中央南寄りに斜面を下る道がある。
- 7 堀切㊦をはさんで5の南に位置する。40m×32mを測る。中央の道で二分される。絵図に「三」と記された曲輪である。
- 8 7の東側に張り付く腰曲輪である。25m×7mの長方形を呈す。
- 9 7の西側に張り付く腰曲輪である。30m×5mの不整形を呈す。
- 10 65m×38mの城中最大の曲輪である。7とともに土塁は巡らない。
- 11 10の北東端の低い土塁に囲まれた小区画である。12m×3mの不整形を呈す。
- 12 12～16は10の西側直下に並ぶ小曲輪である。12は12m×15mの不整形をしている。
- 13 12の南に続く台形の曲輪で、15m×16mを測る。14との間に土塁と堅堀㊧が設けられている。
- 14 15m×16mの小曲輪で、10から下る道があり、小土塁を伴う。
- 15 10m×13mの小曲輪で、北東端に16へ下る道がある。10の斜面側に2つの小土塁がある。
- 16 15の東下に設けられた小曲輪で、15m×6mを測る。
- 17 10の西側直下にある三角形の腰曲輪で、44m×15mを測る。

次に、堀の規模について概観する。

- ㊦ 城跡北の尾根筋を防御するために設けられた堀切である。中央に道幅約1m、延長約10mの土橋が設けられている。東側は上場最大幅約24m、下場幅約4m、深さ約7mで、延長50m以上の堅堀になっている。西は上場最大幅約10m、下場幅約2m、深さ約3.5m、延長は36m以上である。
- ㊧ 主郭1と3を区切る堅堀で、帯曲輪2の南に設けられている。上場最大幅約8m、下場幅約2m、深さ約3m、延長約42m以上を測る。
- ㊨ ㊧の南にならぶ堅堀である。上場最大幅約9m、下場幅約1.8m、深さ約2m、延長約50mを測る。
- ㊩ ㊨の東側に対峙する堅堀である。上場最大幅約6m、下場幅約1.8m、深さ約2m、延長約51mを測る。
- ㊪ 4・5と7を区切る堀切で、上場最大幅約8m、下場幅約1.6mを測る。東西斜面は堅堀となり、堀切との傾換点に土橋状の土塁が設けられている。堅堀の延長は東が70m以上、西が38m以上を測る。
- ㊫ 10の東側の腰曲輪群の中央に設けられた堅堀で、上場最大幅約6m、下場幅約1.2m、深さ約1m、延長は約48mである。
- ㊬ 城跡南端を防御する放射状の堅堀群で、一番東に位置する。上場最大幅約13m、下場幅約2.8m、深さ約3m、延長約62mを測る。

- ㊸ ㊶の西に位置する。先端部は明瞭でない。上場最大幅約9m、下場幅約2m、深さ約1m、延長約33mを測る。
- ㊹ ㊶の西に位置する。上場最大幅約6m、下場幅約2m、深さ約1m、延長約40mで㊸に合流する。
- ㊺ 豎堀群最大の豎堀で、上場最大幅約16m、下場幅約2.5m、深さ約3.5m、延長は100mを超える。先端が登城道により分断されている。
- ㊻ 豎堀群の西端に位置する。上場最大幅約11m、下場幅約1.8m、深さ約2m、延長約70mを測る。
- ㊼ 登城道と㊻に挟まれた西側斜面には7条の小規模な豎堀が並ぶ。上場幅約4～5.5m、下場幅約1m、深さ約0.2～0.5mを測る。延長は10～58mを測る。

2 主郭（第31図）

主郭1の周囲には低い土塁が巡らされ、さらに曲輪内部は3段に構築されている。虎口は東西2ヶ所に認められ、3段に段築された一番南側の段は両虎口からの進入路として構築されたようである。この主郭1の周囲の切岸は非常に高いうえ、急傾斜となっている。これは主郭が最も尾根筋に近い位置に配されたためである。東側虎口の約6m下で、幅約1.5～2mの道状の遺構を確認した。延長約48mを確認したが、両端の取り付け部は確認できない。

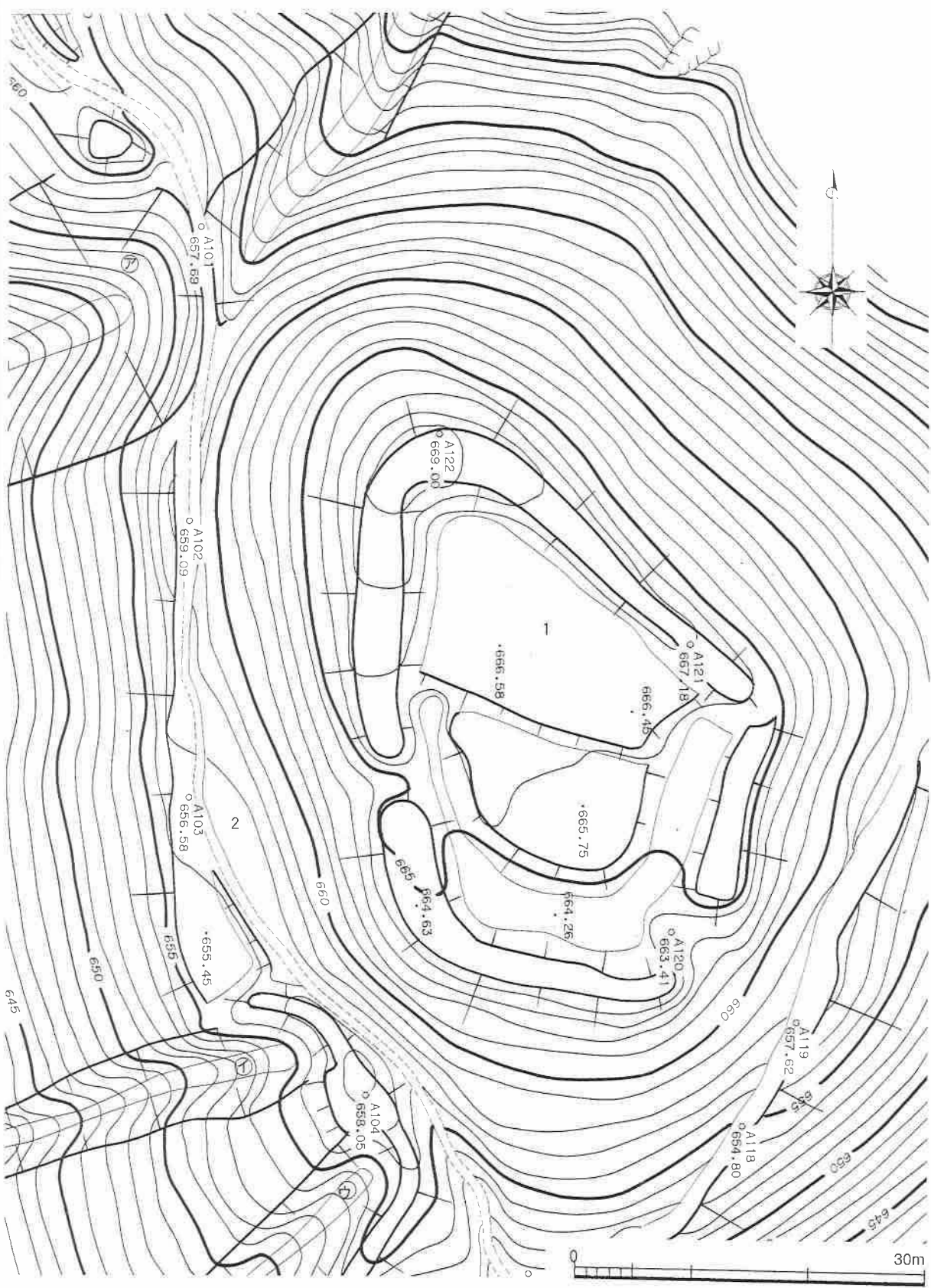
この尾根筋を防御するために尾根を切断する巨大な堀切㊿が設けられている。㊿の中央には土橋が架けられ、東西の両斜面は豎堀となって尾根を遮断している。

㊿の土橋を渡ると主郭の切岸直下に設けられた帯曲輪2に入る。この帯曲輪2は尾根筋から曲輪3への連絡路としても機能しており、敵が侵入してきた場合は曲輪3へ取りつかせないように2本の豎堀㊽と東端に豎堀㊾が設けられている。さらに曲輪3の東側には豎堀㊿が設けられている。

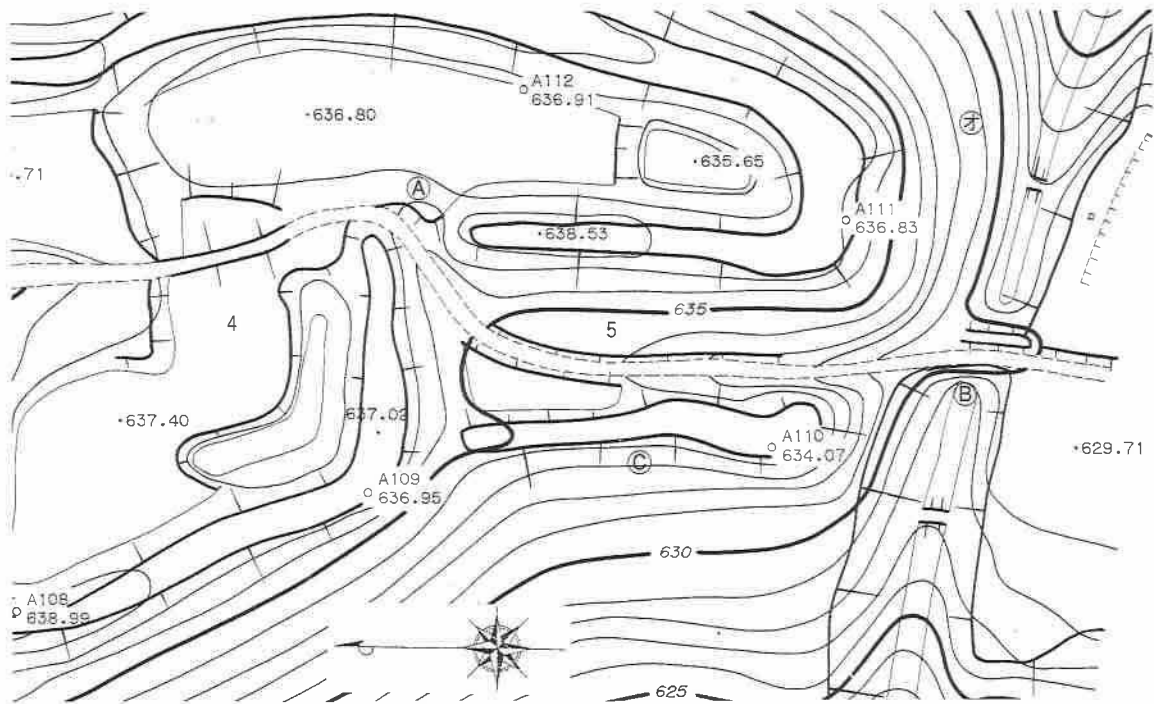
3 虎口（第32図）

曲輪4の周囲には高く厚い土塁が巡らされており、本城跡中で最も見ごたえのある遺構となっている。特に圧巻は虎口㊿の構造である。南方より曲輪4に至るには堀切㊽に設けられた土橋㊾を渡って虎口㊿に進入するわけであるが、その間に外升形空間5を通過しなければならない。この5は曲輪4の土塁から常に横矢がかかるとともに正面の土塁からも攻撃を受けることとなる。しかも西側にも土塁㊿があるため、縦列でしか攻められないようになっている。

曲輪4の南面は曲輪7との間に堀切㊿が掘られており、東西斜面に向っては豎堀となっている。この堀切㊿で興味深いのは堀切が豎堀となる傾換点の堀底に土橋状の土塁が設けられていることである。おそらく豎堀を登ってくる敵に対する仕切の土塁と考えられる。



第31図 主郭遺構図 (S=1/500)

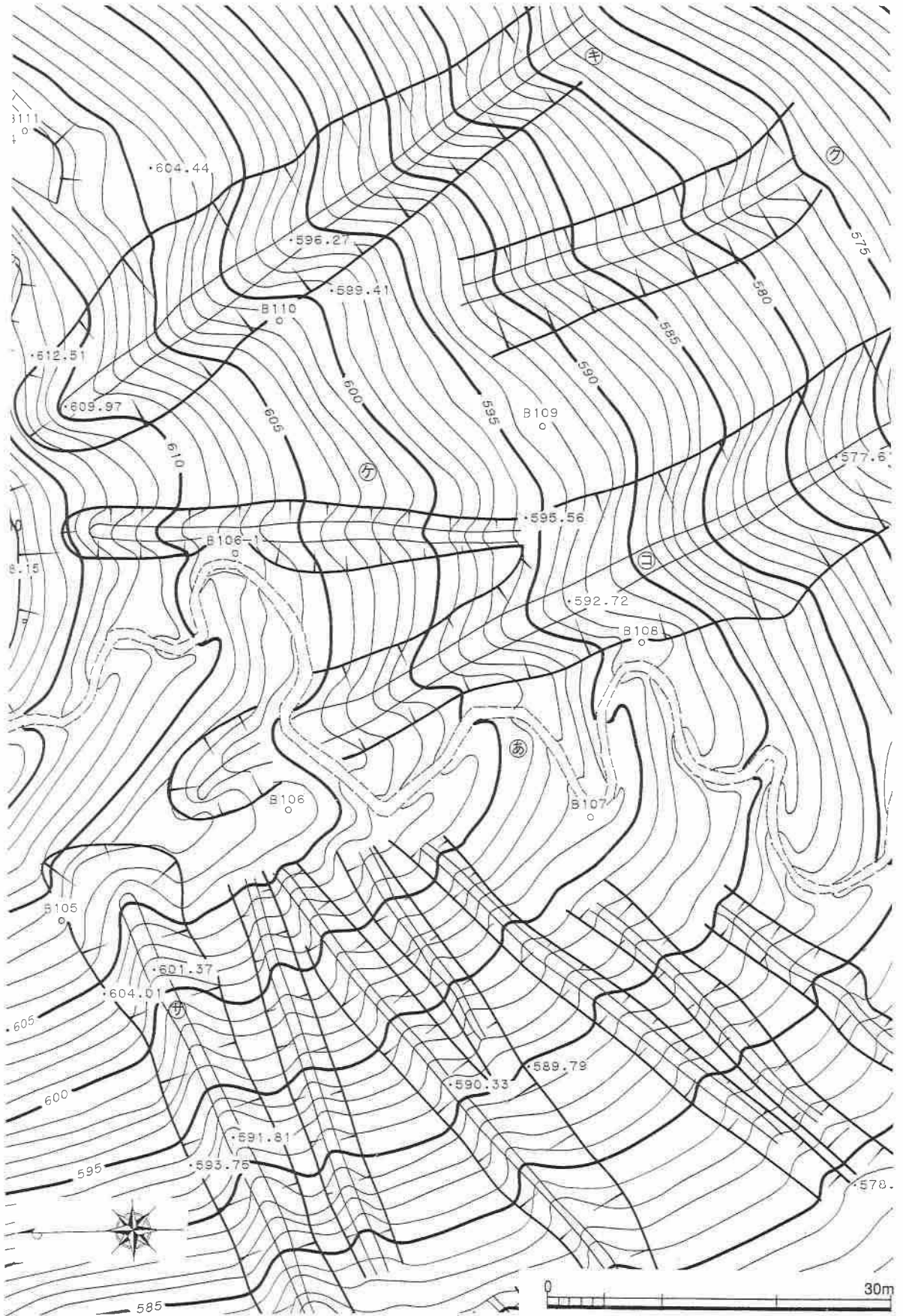


第32図 虎口遺構図 (S=1/500)

4 豎堀群 (第33図)

堀切④より南側にはまだ曲輪が続くが、それらの曲輪は土塁囲いとなっておらず、この堀切によって明らかに曲輪機能に格差の存在することがわかる。その曲輪7であるが、東西にそれぞれ腰曲輪8・9を伴っている。その南側に一段低く設けられた曲輪10は本城跡中最大の面積を有する曲輪である。従来の調査ではこの平坦面のブッシュが激しく、単調な平坦面でしか捉えられなかった。今回の測量調査ではさらに曲輪内に段差が設けられていたり、方形に巡らされた低土塁の存在が確認された。こうした遺構の存在から兵の駐屯場所として機能していた可能性が高い。曲輪の東西両側には曲輪7と同様に腰曲輪12~17が設けられている。このうち東側の腰曲輪12・13と14・15は豎土塁と豎堀⑤によって仕切られており、特に南側部分はさらに一段下へ取り付く小削平16が認められ、それぞれが通路で結ばれていることから虎口の可能性がある。絵図には「此所小屋敷」とあり、長方形の一区画で描かれているが、「小屋敷」は12~15の小曲輪を指すものと思われる。

さて、10の先端部の豎堀群については、中井均・高橋順之が「南側斜面には豎堀がいびつではあるが放射状に設けられている。」として存在は報告(1994「上平寺城とその城下町-遺構と絵図からの再検討-」『近江地方史研究』29・30合併号)していたが、必ずしも実態を十分に把握できなかった南端斜面の豎堀群の存在を明確にした意義は大きい。豎堀群⑥~⑦は、11条からなる豎堀群で、途中で1本になったりして、やや統一性には欠けるが、南端に放射状に施しており、尾根先端防御をしっかりとこなっている。また、この豎堀群の間に城道⑧が折れ曲がりながら山麓へ続いている。この城道⑧は「上平寺城古図」に描かれた、七曲に相当するもので、山麓居館と山城を結ぶ大手ルートであったと考えられる。



第33図 豎堀群遺構図 (S=1/500)

第6節 弥高寺跡

1 全体構造（第34・35図）

弥高寺跡の分布調査については、すでに用田政晴氏が『弥高寺跡調査概報』でまとめているので、本節ではこれに新たな知見を加えながら引用していきたいと思う。

測量範囲は、昭和60年が南端の門跡と思われる山道の西側に石を積んだ個所付近から、上方の坊跡と思われる郭状遺構が集中する範囲までとし、本坊跡と背後の墓地を上限とされた。昭和62年には、本坊跡の裏の部分と、南東端の比較的大きな郭状遺構が集中する部分の補足調査が行われた。今回の分布調査では、『概報』で「かなり大規模な堀切状遺構があり、この付近まで測量を行う必要がある」として課題となっていた本坊跡背後の遺構群（地元では「高つむり」「高天原」という）と、刈り払い作業中に確認した薬師谷の郭状遺構群。本坊西側斜面の豎堀。堀切を確認した南西尾根周辺の遺構群を調査範囲とした。

本坊跡背後の大堀切を遺跡の北の結界としたが、弥高区字史『彌高物語』や現地踏査では、さらに上方に「殿山」「長小場」と呼ばれる平坦地があり、標高904mの弥高山山頂は「経塚」と呼ばれている。また、山麓登山道入り口にあり石垣を伴う「大門」や、登山道沿いにも「丸山」「ノタガタ尾」「役山」という削平地があり、今後継続した調査が必要である。

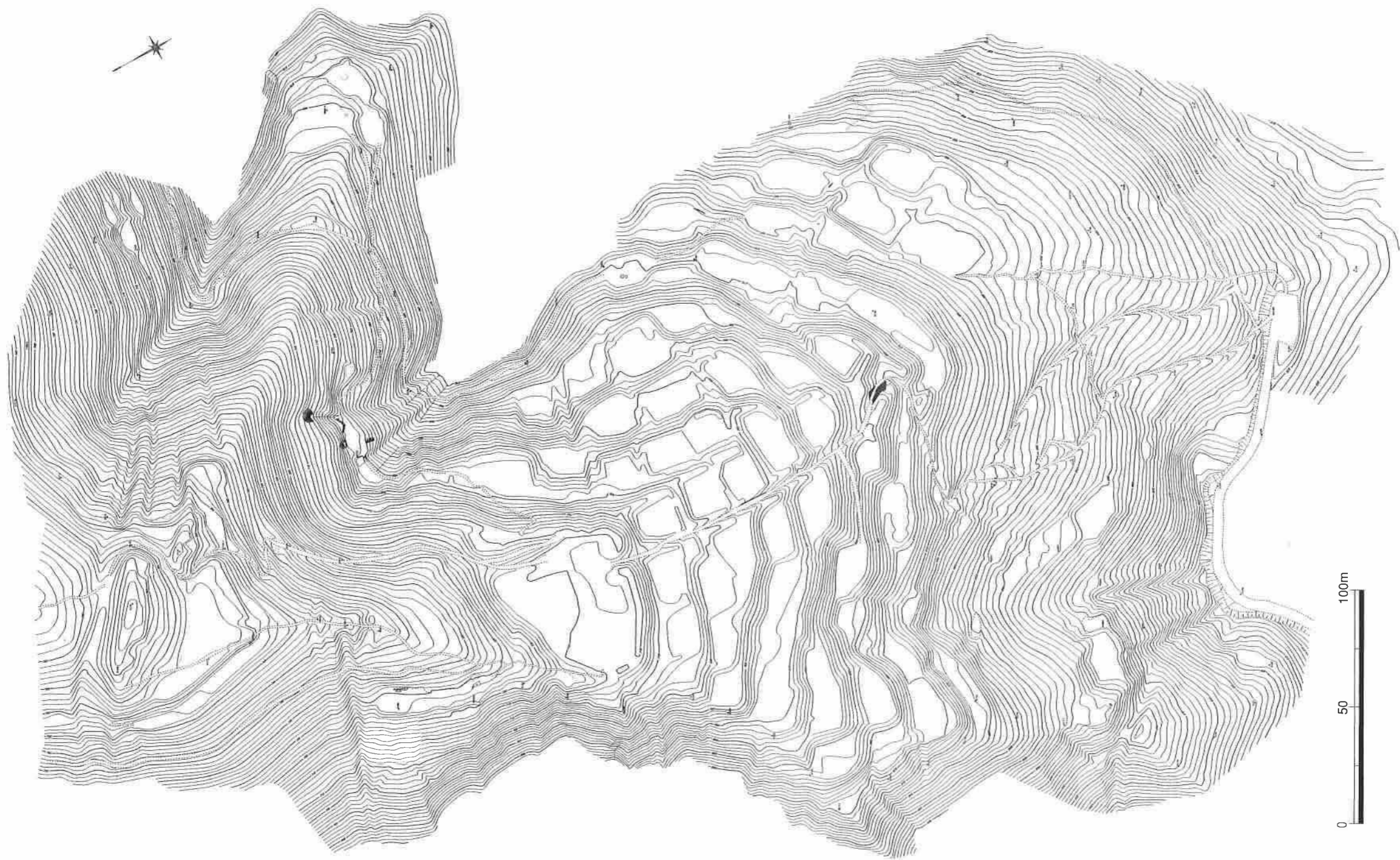
坊跡群は東西約250m、南北約300mの範囲に集中し、本坊跡を頂点として下方へ広がる。

昭和60年の調査では、本坊跡も含めて56の坊跡（1～60の内）が確認された。本坊跡を別にすると、60m×13mを計る長大なものから、11m×7m程度の小さなものまでがあるが、20m×15m程度のものが大半を占める。そのほとんどが、坊跡の長辺を等高線にそろえてあるため、中ほどから西側の坊跡は東西方向に並び、東側は南北あるいは東北・南西方向となっている。さらに、昭和62年の補足調査では、東南隅に6つの坊跡（61～66）が図化された。今回の調査では、南西尾根上に堀切・豎堀を望む位置に67～82の削平地を確認し、本坊跡背後には、巨大な堀切と豎堀群を伴う大小の削平地群（83～93）がある。また、上平寺城へ向う道筋の薬師谷に面した尾根上には、大小6つの削平地（94～99）と斜面に3つの小削平地（100～102）があった。現時点で、「弥高百坊」の通称どおり100の削平地があることになる。

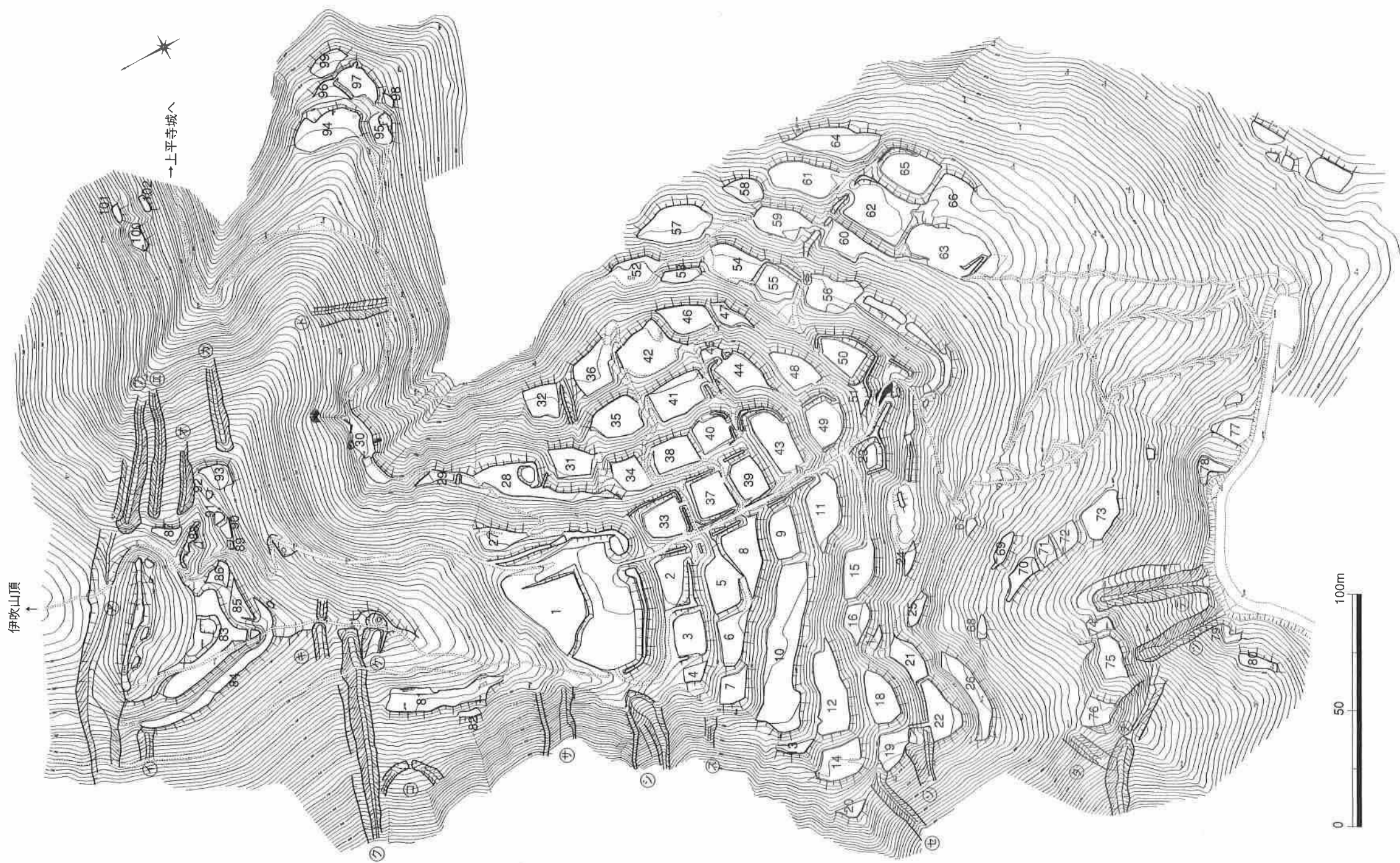
門跡および大門跡から本坊跡へ至る道を中央の道とし、坊跡相互は複雑に入り組んだ道により結ばれる。また、行者谷から石段を下り、現在、宝篋印塔および五輪塔が残る坊跡へ至る道があるが、この道をもって東の限りとしており、西側は急峻な斜面でもって遺構群は終る。

本坊跡から背後・上方へ至る道は2本ある。1本は本坊跡の東奥から伸び、上方の大がかりな堀切状遺構に至る道。この道は、山頂へと続く。もう1本は西側土塁上を登り、石仏・石塔群の遺存している墓地跡を経て、大堀切へ至る道がある。

なお明確な土塁は、本坊跡とその周囲、および中央の道の西側に残るだけで、多くの郭



第34图 弥高寺跡地形图



第35図 弥高寺跡遺構図

は土塁を備えていない。また、明らかに城郭遺構としてとらえられる堅堀・堀切は、本坊跡背後の削平地群の周辺に大堀切や連続する堅堀群が集中するほか (㊶~㊸)、坊跡群の西側斜面 (㊱~㊲)、南西尾根上 (㊳~㊴) に見られる。

ここではまず、各遺構の規模を以下に記載する。数値は最大幅を、ほぼ南北×東西で示す。ただし、各削平地を1~102、堀切・堅堀を㊶~㊴で表した。主要な遺構については、項を改めて検討したい。

(本坊跡)

- 1 弥高寺の本坊跡である。59m×68mを測り、台形状の不正方形を呈す。中央に基壇状の高まりがあり、東西辺および南辺に土塁がめぐる。

(中心の道より西側=地元で「西坊寺」)

- 2 14m×25mの長方形の削平地である。三辺を土塁で囲まれ、南東端に入り口を持つ。また、北東隅には1からの道が取り付く。
- 3 13m×18mの長方形の削平地である。北西端に小規模な土塁をもつ。本坊跡西側虎口から通じる道がある。
- 4 10m×8mの台形の削平地である。
- 5 14m×25mの不整形の削平地である。東端に中央道からの入り口を持ち、南側中央に6への通路が開く。
- 6 12m×24mの台形の削平地で、南東隅に5からの入り口を持つ。
- 7 10m×12mの方形の削平地で、南東隅が張り出すことから6と結ぶ通路の可能性が有る。
- 8 15m×35mの三角形の削平地である。東側に中央道に沿って土塁があり、南端の切れた所が入り口である。
- 9 11m×21mの長方形の削平地である。中央道側は、11まで延びる土塁で遮断されている。削平地への入り口は明確でないが、土塁に沿って11から南東端へ登るルートが考えられる。
- 10 18m×73mの長大な削平地である。9同様に、11から南東端に進入する通路が予想される。
- 11 14m×34mの菱形の削平地である。9から延びる土塁が切れる東端に入り口を持つ。
- 12 14m×42mの三角形の削平地である。山側北西端にわずかに土塁状の出っ張りがある。
- 13 15m×5mの三日月型の小削平地である。10から12への通路の役割を果たす。
- 14 20m×15mの不整形の削平地である。南側に通路が開く。
- 15 12m×28mの楕円形の削平地である。中央道から幅約2mの道が東端に取り付く。
- 16 10m×18mの台形状の削平地である。西端から17、21、18へ通じる道がある。

- 17 4 m × 10 mの小削平地で、16と21を結ぶ。
- 18 12 m × 25 mの三角形の削平地で、かつて反射板が設置されており、工事の際に多量のかかわりが出土したと伝えられている。22との間は堀切状を呈す。
- 19 12 m × 16 mの三角形の削平地である。20との間に豎堀が落ちる。22と結ぶ土橋状の通路があり、堀切となっている。
- 20 14 m × 6 mの三角形の小削平地である。
- 21 9 m × 20 mの長方形の削平地である。16から道が通じる。
- 22 15 m × 27 mの三角形の削平地である。山側は堀切状になっており、西側斜面に豎堀が落ちる。
- 23 9 m × 12 mの小削平地で、西辺および南辺を土塁で囲まれ、南東側の土塁は約16 m延びて大門の枳形を構成する。斜面の南下にも「大門」手前の道に並行して土塁があり、武者隠し的な役割をもった曲輪であろう。
- 24 5 m × 15 mの小削平地である。東側には土塁状の遺構が続く。
- 25 5 m × 12 mの小削平地で、南側の谷に臨む。
- 26 7 m × 42 mの湾曲した削平地である。ここまでが、西側の坊跡群としてのまとまりとみることができる。

(中心の道より東側 = 地元で「東坊寺」)

- 27 23 m × 10 mの台形状の削平地である。本坊跡東辺中ほどからの道が南端に取り付くが、本坊の当該部分の土塁が切れておらず、本来の道かどうか疑わしい。逆に北側から入る道状遺構があり、本坊北東隅からの道がここを通り、28につながる道が想定できる。
- 28 70 m × 15 mの長大な削平地で、中央付近で南東に張り出し、ここに直径約9 mの池状遺構がある。その南に31へ、南端には34へ下る道状の遺構がある。29とは土塁で区切られる。
- 29 18 m × 6 mの削平地で、28の北に接する。行者谷への通路をなす。
- 30 8 m × 40 mの不整形の削平地で、池状遺構、入定窟、行者の水と呼ばれる湧水がある。
- 31 20 m × 12 mの台形の削平地である。28・34より道が通じる。
- 32 14 m × 15 mの台形の削平地で、36との間に土塁と豎堀が設けられている。
- 33 18 m × 19 mの台形の削平地で、南辺および東辺に土塁を備える。中央道から南西端に入る道があるが、南辺の土塁の中央東寄りに口が開いており、土塁に沿って道があることから、本来ここが入り口であったと思われる。
- 34 13 m × 15 mの方形の削平地である。28および37と結ぶ通路。中央道から37・38を経由してここに至り、さらに35・36・41・42へ通じる道がある。
- 35 23 m × 16 mを測る楕円形状の削平地である。南端で34から下る通路で結ばれる。
- 36 16 m × 15 mの方形の削平地で、南端で35からの道を通じ、別に42と結ぶ道がある。
- 37 15 m × 17 mの方形の削平地である。東西両辺に土塁を備える。中央道からの道が南端

- を通り南辺東よりに入り口が開く。この道は、前述したように東側下方の削平地群を結ぶ。
- 38 18m×12mの長方形の削平地である。南西隅と北東隅に入り口が開く。
- 39 13m×18mの長方形の削平地である。東側に土塁を備える。入り口は北西端にあたる。
- 40 17m×14mの長方形の削平地で、南辺に土塁を備える。この土塁の中央が切れており、ここが入り口と考えられるが、どのルートで中央道とつながるかは明確でない。このあたりの削平地（40・41・43・44）は土塁が多用されている。
- 41 24m×15mの長方形の削平地である。南辺に土塁が設けられており、中央が切れて入り口となる。40からの道が通じる。
- 42 22m×20mの台形の削平地である。北西端に35からの入り口、南端に41からの入り口が開く。松が生え、南東端に庭園かと思われる遺構があり、石が散在する。
- 43 13m×30mの長方形の削平地で、東辺に屈曲する土塁を備える。中央道から2ヶ所の入り口を持つ。
- 44 13m×20mの方形の削平地で、45と一体のものと考えられ、その境には南北に土塁が設けられ虎口状を呈す。40からの道が通じている。南西端には48～50への道が延びる。
- 45 9m×5mの小規模な削平地である。
- 46 25m×12mの菱形の削平地で、42からの道が南西端に通じる。
- 47 22m×7mの小規模な削平地で、46に接する。
- 48 25m×13mの三角形の削平地で、44からの道が南西端に通じる。この道は50へ下る。
- 49 15m×25mの楕円形を呈する削平地である。中央道側に小規模な土塁と、東辺に屈曲する土塁を備える。南端の土塁の切れ目に道が認められる。
- 50 20m×12mの長方形の削平地で、三方を土塁がめぐる。この土塁は、西上段の51も圍繞することから一体のものと考えられる。大門跡を臨む位置にあることから、武者隠しの役割をもつ削平地であろう。北端から56・54に下る。
- 51 6m×14mの小規模な削平地である。大門の枳形を構成する。
- 52 20m×11mの楕円形の削平地で、宝篋印塔と五輪塔が置かれている。南北の道は、行者谷と駐車場を結ぶ。
- 53 18m×6mの長方形の削平地である。
- 54 23m×14mの不整形の削平地で、一段下がって55と一体となる。南西端に50からの道が取り付く。
- 55 19m×17mの方形の削平地で、南側に低い土塁が残る。56の縦の土塁との関連から武者隠しの機能も考えられる削平地である。
- 56 25m×15mの不整形の削平地で、南西端は大門の空堀の堀底につながる。50からの道が北東端に取り付く。ここに小規模な土塁があり、ここを基点に、南東斜面に土塁が設けられている。
- 57 33m×16mの楕円形の削平地である。

- 58 18m×10mの楕円形の削平地である。
- 59 25m×12mの楕円形の削平地である。行者谷と駐車場を結ぶルート上にあり、60とは開口する土塁で仕切られる。南西端の道は、60・63を経て駐車場に通じるが、土塁に沿って南東に下る道があり、本来のルートを検討する必要がある。
- 60 13m×20mの削平地である。59との境の土塁は開口しており、隅石が置かれる。
- 61 30m×13mの楕円形の削平地である。南端に口を開く。
- 62 18m×30mの長方形の削平地である。南東端に中央が開口した土塁が残り、59からの道につながる。
- 63 20m×35mの長方形の削平地である。南東端に土塁を備える。
- 64 43m×15mの楕円形の削平地で、坊跡群の南端を形成する。北東側に「一本杉」とよばれる巨木がある。
- 65 15m×25mの長方形の削平地で、東角に屈曲する土塁があり、北東に入り口が開く。
- 66 緩やかに傾斜する削平地で、ここから南は自然の傾斜となる。

(南西谷部の削平地)

- 67 7m×4mの小削平地である。
- 68 4m×10mの小削平地である。67・68は他の削平地群との継続性が見られない。
- 69 17m×5mの小削平地である。
- 70 20m×7mの不整形の削平地で、71～73と連続して竪堀状遺構㊦に面して展開する。
- 71 8m×10mの方形の削平地である。
- 72 10m×10mの方形の削平地である。
- 73 20m×14mの三角形に近い削平地である。
- 74 11m×4mの不整形の削平地で、75と並び、竪堀状遺構㊧・㊨の先端部に位置する。
- 75 11m×19mの不整形の削平地である。
- 76 12m×12mの方形の削平地で、竪堀㊩と堀切㊪を扼する位置にある。
- 77 18m×12mの三角形の削平地で、林道工事で削平された。
- 78 16m×12mの逆L字の削平地で、林道工事により改変されている。西の谷部に湧水「マタギの水」がある。
- 79 8m×8mのくの字状の削平地である。
- 80 17m×5mの長方形の削平地で、林道(元の道をほぼ踏襲)に面す。

(本坊跡背後の削平地群)

- 81 51m×10mの長細い削平地で、2ヶ所の墓地がある。北端は竪堀㊫で遮断されている。
- 82 81に隣接する10m×3mの小削平地である。墓域の一部と考えられる。
- 83 29m×50mの不整形の削平地で、背後は大堀切の高い土塁となっている。削平地の中央に12m×20mの池状落ち込み遺構がある。

- 84 73m×4mの細長い削平地で、83の南西側に取り付く帯曲輪である。
- 85 8m×20mの三角形の削平地で、83の南側に張り付く。84からここに入り、83南端の張り出し部に入る虎口の役割を果たす。
- 86 9m×9mの台形の削平地である。
- 87 13m×7mの三角形の削平地で、堅堀㊦・㊧の先端に位置する。
- 88 4m×21mの細長い削平地で土塁状遺構の天場にあたる。地元では古墳だと伝えられている。
- 89 3m×4mの小削平地で、90・91と並ぶ。
- 90 4m×6mの小削平地である。
- 91 4m×5mの小削平地である。
- 92 3m×3mの小削平地である。
- 93 13m×11mの菱形の削平地で、堅堀㊨の先端に位置する。

(薬師谷の遺構)

- 94 40m×14mの不整形の遺構で、薬師谷の尾根がやや緩やかになった所の中心に位置する。
- 95 7m×14mの長方形の削平地で、南端に落ち込みがある。
- 96 16m×9mの三角形の削平地で、やや緩やかに傾斜して97に続く。
- 97 10m×19mの三角形の削平地である。
- 98 3m×7mの小削平地である。
- 99 15m×8mの長方形の削平地である。
- 100 94～98とは薬師谷を挟んで対峙する小削平地で、5m×11mを測る。「薬師堂跡」といわれる。
- 101 3m×9mの小削平地である。
- 102 3m×8mの小削平地である。

次に、堀の規模について概観する。

- ㊦ 遺跡群の北を画す大堀切で、上場最大幅約20m、下場幅約3m、深さ約6m、延長約11mを測る。
- ㊧ 84の北端に取り付く小規模な堅堀で、上場最大幅約7m、下場幅約1.5m、深さ約1m、延長約14mを測る。
- ㊨ 83を中心にした遺構群の東側谷部に設けられた4本の連続堅堀群の北端で、上場最大幅約11m、下場幅約2m、深さ約3m、延長約60mを測る。
- ㊩ 上場最大幅約5m、下場幅約1.2m、深さ約1.8m、延長約54mを測る。
- ㊪ 上場最大幅約6m、下場幅約1m、深さ約2m、延長約27mを測る。
- ㊫ 上場最大幅約7m、下場幅約2m、深さ約1.5m、延長約38mを測る。

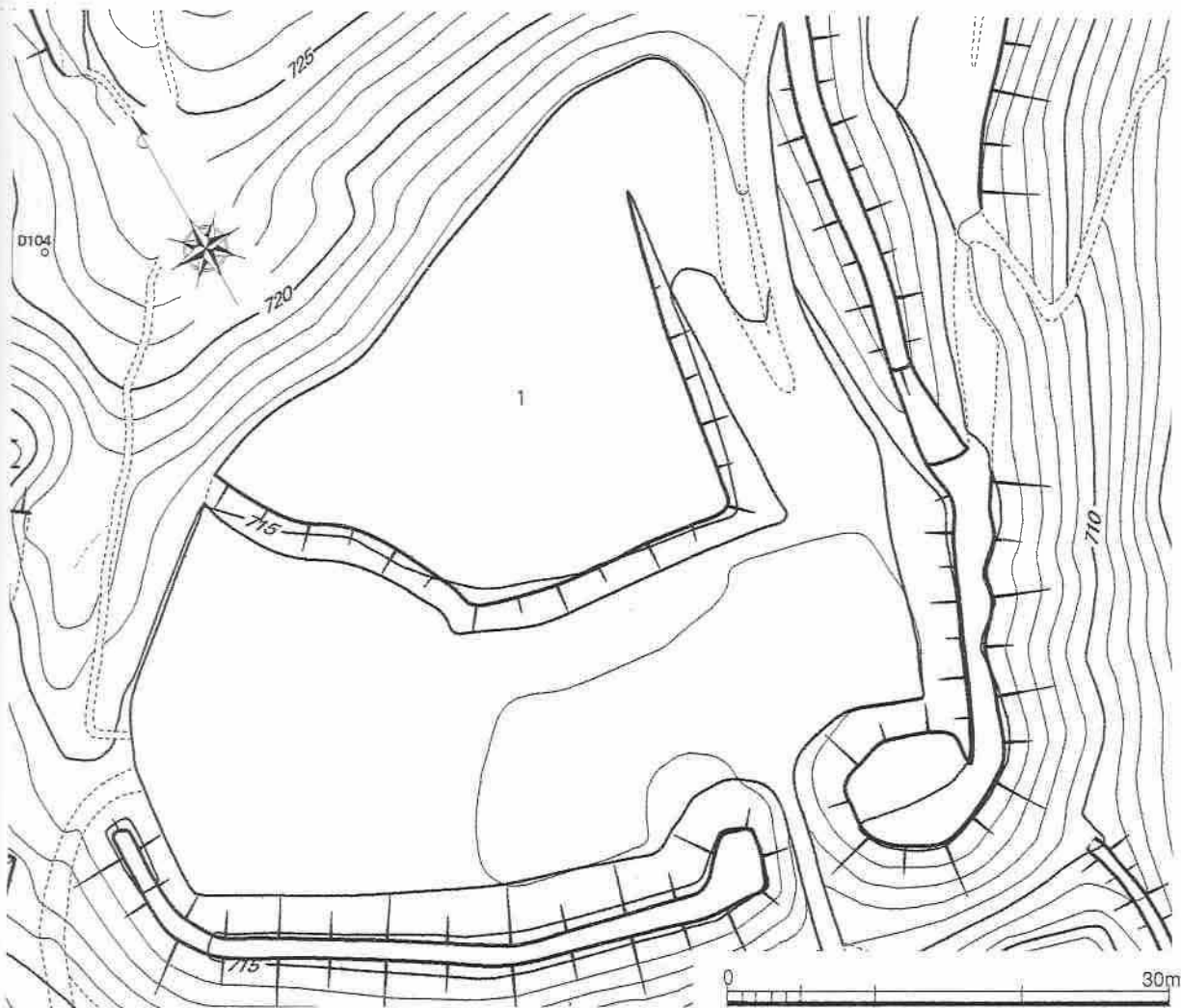
- ㊦ ㊧とともに、本坊跡から83に至る尾根上に設けられた小規模な堀切で、中央に土橋を備える。上場最大幅約6m、下場幅約2m、深さ約1.4m、延長約25mを測る。
- ㊨ 本坊跡と83の曲輪群の中間地点西側斜面に設けられた堅堀で、上場最大幅約9m、下場幅約3m、深さ約2.5m、延長約93mを測る。
- ㊩ 小規模な堀切で、東側は土塁状をなす。上場最大幅約8m、下場幅約4m、深さ約0.8m、延長約17mを測る。
- ㊪ 堅堀㊨の南に位置する半円状の堀状遺構で、性格は不明である。幅約4m、延長約15mの湾曲した浅い堀状をなす。
- ㊫ 本坊西側の堅堀状遺構である。上場最大幅約16m、下場幅約5m、深さ約4m、延長約25mを測る。端部は天然の谷となる。
- ㊬ 本坊西側の堅堀状遺構である。上場最大幅約15m、下場幅約6m、深さ約2m、延長約38mを測る。端部は細くなる。
- ㊭ 西側斜面の小規模な堅堀状遺構で、上場最大幅約5m、延長約10mを測る。
- ㊮ 19に接する堅堀で、上場最大幅約6m、下場幅約1m、深さ約1m、延長約30mを測る。
- ㊯ 22の北側の堀切で、上場最大幅約12m、下場幅約2m、深さ約1m、延長約43mを測る。
- ㊰ 76西側の堅堀で、堀切㊱に合流する。上場最大幅約7m、下場幅約2m、深さ約1.5m、延長約23mを測る。
- ㊱ 南西尾根を切断するように設けられた堀切である。上場最大幅約9m、下場幅約3m、76からの深さ約8m、延長約66mを測る。
- ㊲ ㊱と並ぶ堅堀で、天然の谷を利用している。上場最大幅約9.5m、下場幅約3m、深さ約3m、延長約45mを測る。南端は林道で消える。
- ㊳ 上場最大幅約9m、下場幅約2m、深さ約4m、延長約52mを測る。
- ㊴ 行者谷と薬師谷の遺構群の中間に単独で位置する堅堀で、上場最大幅約9m、下場幅約1m、深さ約1m、延長約29mを測る。

2 本坊跡（第36図）

本坊跡と呼ばれる大きな郭状遺構1は、坊跡群のほぼ頂点に位置し、標高714m地点にある。ほぼ南面し、東西辺および南辺には北から張り出た自然地形を利用し、それに続ける形で土を盛るなどして基底部幅3～4m・高さ1～1.5mの土塁がめぐる。

土塁は南辺中ほどやや東寄りとし、西辺中ほどが切れ、下方の坊跡2・3へとつながる道が取りつく。

更に上方へは、北東隅と西辺土塁上から2本の幅1m足らずの道が伸び、特に西側の道は墓地跡81へと続く。また東辺にも行者谷30へ至る道が残るが、その部分は土塁が切れておらず、本来の道かどうか疑わしい。



第36図 本坊跡遺構図 (S=1/500)

本坊跡は土塁を含めて最大東西幅約68m、最大南北長約59mを計る台形状の不正方形を呈する。本坊跡の北半には、一段高くなった部分があり、何らかの建物基壇跡に似る。高さは約1mあり、その基壇状遺構の東辺はほぼ主軸（南北方向）に沿うが、西辺は主軸とかなり斜交するように伸びている。

仮に、基壇状遺構の南辺と東辺を生かすなら、最大、方18m程度の建物が想定できる。

本坊跡には一辺60cmの石塔台座と思われる切石と2個の自然石が見られ、基壇状遺構では、礎石と見られる2～3点の石を確認した。

本坊跡の西側斜面には、城郭遺構である堅堀㊤・㊦があり防御性を高めている。

3 門跡 (第37図)

駐車場から約160m登ったところに門跡がある。ここから傾斜がゆるやかになり、幅1mほどの道の両側には、人頭大の山石を1mばかり積み上げている。この石積は長さ3mほどに渡ってあり、『概報』の中で用田氏は、ここを一つの門跡と推定している。またその3mほど手前に、この石積を避けるようにう廻する山道との分岐点があり、約50cm大の山石が1個、目印のように遺存していた。



第37図 門跡・大門跡遺構図 (S=1/500)

この付近から山道はゆるやかになり、約90m先へ行ったところに大門跡と呼ばれているところがある。

4 大門跡 (第37図)

大門跡の手前までは道は東へ向かっていたものが、鋭角に北西へ折れ曲る部分を地元では「大門」と呼んでいる。上方へ向って右手に土塁が張り出し、左手に石仏および五輪塔が乱雑に並ぶ。そして両側に30～50cm大の石が散在しており、もとはきっちり積まれていたものと思われる。

この現在使われている道とは別に、大門跡手前で南から登ってくる道がある。この道は大門跡の張り出した土塁の横で、現在の山道に取り付くが、このルートをとると、その形態はまさしく中世山城の虎口状を呈する。また、この道は大門跡の張り出した土塁と南側の巨大な土塁との堀底となっており、図化できていないが、2ヶ所の小規模な土塁があつて障子堀の様相を示す。

西側に石が散在する部分は、左手にも土塁が上方から張り出し、深いV字状の地形の底を道が本坊跡へと向かう。大門跡上方にある削平地50・51と左手奥の23は、高い土塁に囲まれており、大門を防御する武者隠し的な曲輪と考えられる。

この大門跡の先を道はやや北へ角度を変え、そこからは本坊跡まで一直線で約120m測る。

5 行者谷 (第38図)

本坊跡の東辺から東方向へ下る道がある。やや蛇行しながら下ると、細長い削平地28に至る。その削平地の南端に径9mの浅い落ち込みがある。『概報』では、自然石を4個配し、行者谷部に近い水を得やすい位置にあるため、これを池跡と考え、浅井町大吉跡の「元池」の寺院中に占める位置に酷似すると報告している。

本坊跡から池を備えた28へ続く細い道は、更に北の谷部分29へ向う。ものの20mも北へ進むと谷の一番奥まったところにある平坦地30に至る。この谷部分を地元では「行者谷」と呼ぶ。

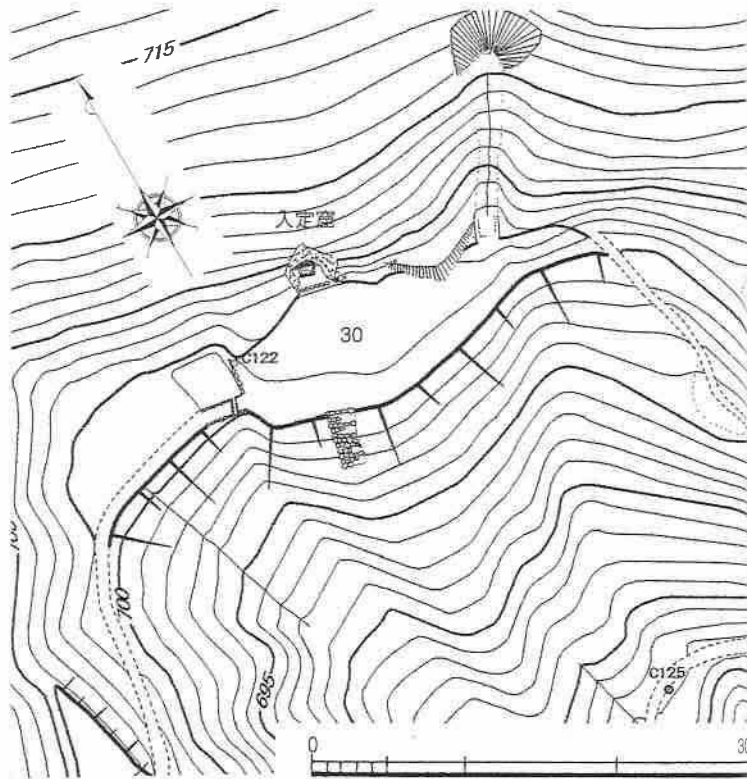
東西幅約40m、南北の奥行きは5m程度の細長い削平地で、ここには中ほどに現在も水を溜める池が残る。もとは、一辺3mほどの平面隅丸方形状を呈し、深さは約50cm、二辺に石を並べ、谷の下方へ向って排水溝も人頭大より少し小さめの石で組んで取りついていたが、近年の出水でかなり崩れている。

この池の東に「入定窟」あるいは「石室」と呼ばれる石窟が山腹に設けられている。切石を組んだ小窟で、人がかがんでようやく入れる大きさであり、内には役行者の陶製像が安置されている。

更にその東約10mに一辺2mほどの基壇状を呈する部分があり、以前ここには、52に現存する宝篋印塔があつたのだという。

入定窟の前から石段が下方に向って設けられていた、これも、しだいに崩れ見る影がない。これは人頭大の石を並べてつくられており、昭和60年当時は10段余り遺存しており、その下方にもいくつか痕跡が残って、約25m下の道へ至っていたものと思われる。下方の道を西へ向うと、もと行者谷にあったという宝篋印塔が残る削平地52へと至る。

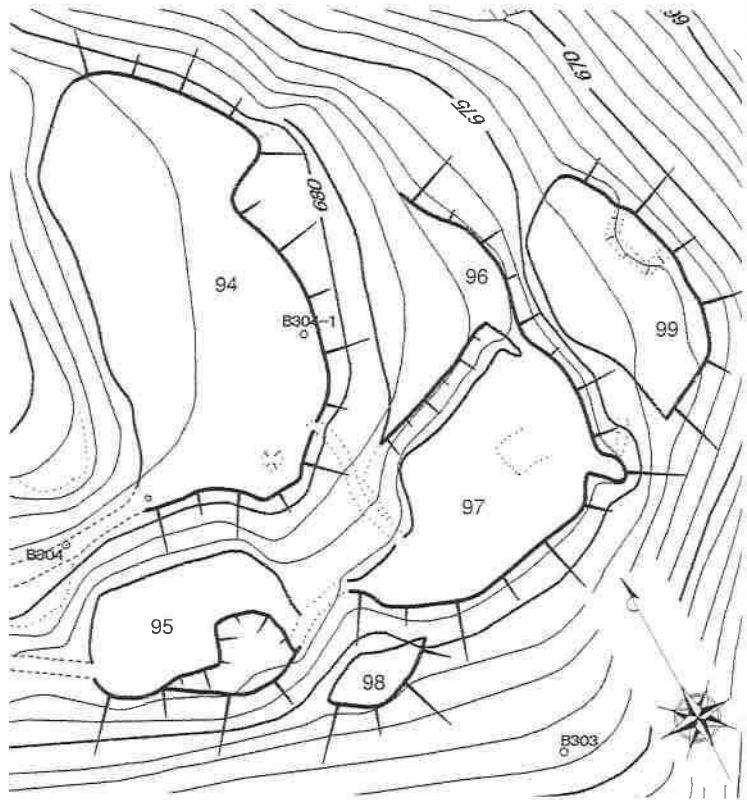
ここは全体の中では東の端にあたり、すでに『改訂坂田郡志』第3巻で紹介されているが、部品を欠く宝篋印塔と高さ138.5cmの五輪塔の他、高さ48cmの一石五輪塔が遺存している。



第38図 行者谷遺構図 (S=1/500)

6 薬師谷 (第39図)

行者谷の入定窟から東へ向う斜面の道は、刈り払い事業のなかで便宜上設けたものである。前述した行者谷の石段を約25m下った道が本来の道であり、ここから上平寺城へ向かう。石段との結節点から東へ約40m行ったところに薬師谷の遺構がある。㊦の大堀切を頂点として南東へ延びる尾根がやや緩やかになったところで、南側の谷を行者谷、北を薬師谷といい、全体で赤谷という。尾根の突端にあることから、弥高寺跡・上平寺城跡はもちろんのこと中山道柏原(山東町)方面への眺望に優れる。



第39図 薬師谷遺構図 (S=1/500)

最も大きい上段の削平地94を囲むように95～99の削平地があり、全体に2～3段の構成になっている。この遺構群は、土塁や堀を伴わないが、行者谷30との間に堅堀㊦が設けら

れており、弥高寺本体部分と一線を画す遺構である可能性がある。

『彌高物語』のなかで山寄仁生氏は、この遺構群を「赤谷峰（薬師平）遺跡」と仮称したうえで、「白鳳二酉年（673）役小角、赤谷山ノ峰ニ来タリ寺ヲ創ス」という文書を引いて、ここを創建の地と推定している。また、谷の北側の小削平地100は地元で薬師堂跡と呼ばれており、『三代実録』にある、承和3年（836）一精舎が建立され薬師如来が安置された地であるという。

いずれにしても、今後の詳細な調査を待たなければならないが、特異な位置にある遺構群である。

7 墓地跡

本坊跡の西辺には北から張り出す自然地形を利用した土塁がある。

この土塁上を北へ向う道があり、本坊跡から約50m進むと道が二股に分かれ、左へとるとわずかに道が幅広くなる地区81に至る。

ここは大がかりな盗掘を近年に受けた部分で、昭和60年の調査当時、調査者の用田氏が現地に入った時はすでに地元の人々の努力により、石仏や五輪塔などは整理されており、蔵骨器片もまとめれていたが、かなりの盗掘坑があちこちに穿たれていたという。現地には盗掘者の草刈り鎌が10本程残されており、大がかりな盗掘を受けたことを物語っていた。

この地区には厳密に言うと完全な平坦地ではないが、幅約4mほどのやや平坦な部分が細長く約50mに渡って南北に伸び、約3mの高低差をもって82が付属する。

『概報』では、この細長い墓地跡の西辺は、盗掘坑での観察によると、10～40cm大の山石で3・4段積まれていたという。

当時、墓地跡に遺存していた石仏・石塔群は、五輪塔の宝珠・請花26、笠19、塔身16、基礎72、石仏・五輪塔板碑26および一石五輪塔が2基からなり、石材の多くは花崗岩製の白っぽく粒の荒いもので、伊吹山系産と思われる。他は堆積岩系であるが、五輪塔板碑のうち一基だけ笏谷石かと思われるものが認められたと報告されている。

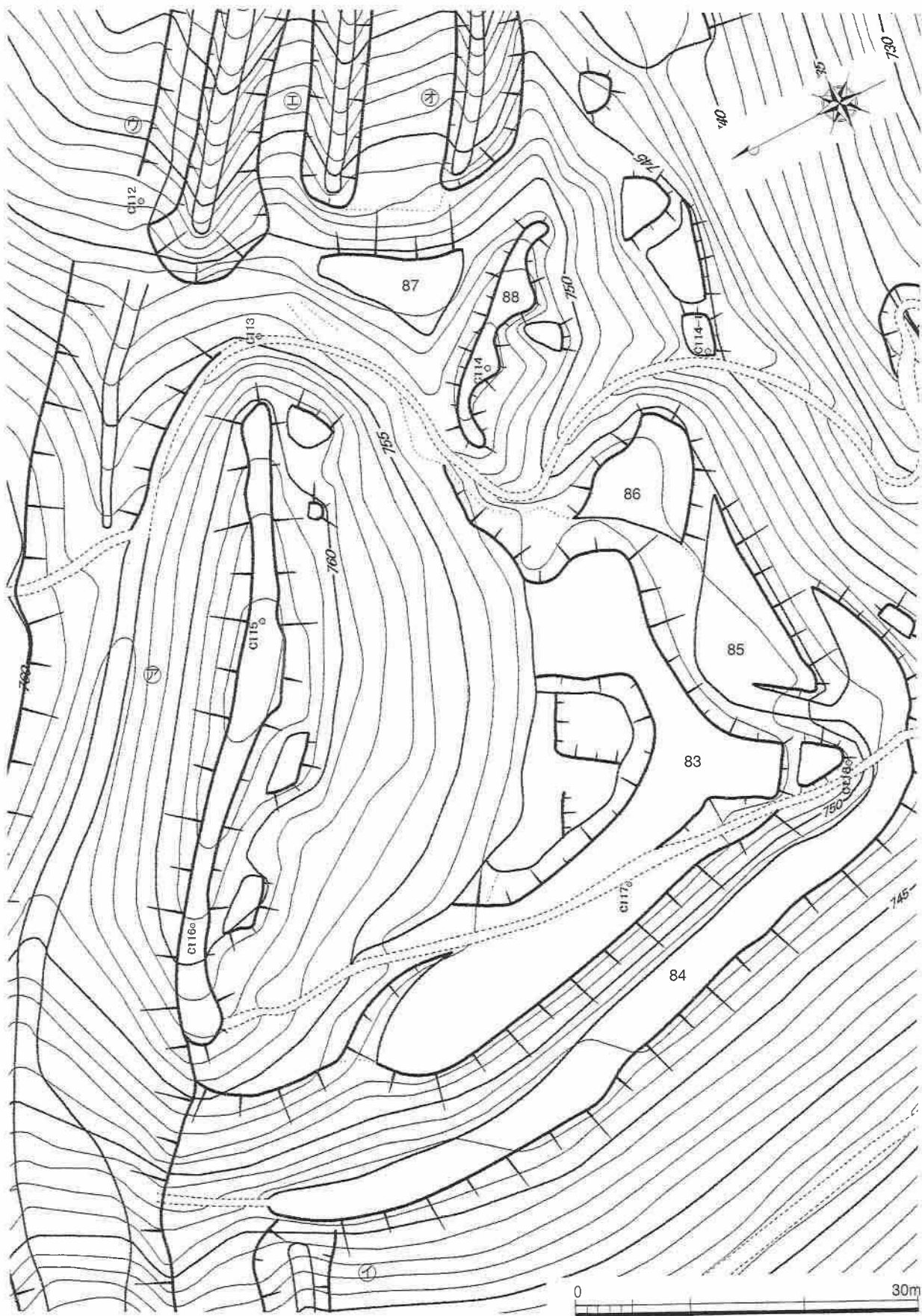
昭和60年に、特に盗掘を受けていた部分を中心に等高線に直交して2箇所、並行して1箇所、1.5～2m×7m程度のトレンチを設定し試掘調査が行なわれた。

試掘と土器類を表採した結果、本坊跡の背後に位置する墓地からは、13世紀後半～15世紀末か16世紀初めごろまでの遺物しか得られなかった。また、出土した陶器類の大半は常滑が占める。墓地の様子は、本来は平坦に近い81の東側山裾に全ての石仏・五輪塔群が横に並んでいたと推定されている。

8 大堀切周辺（第40図）

83周辺を地元では「高つむり」とよび、堀切㊦を「大堀」という。戦時中は「弥高山高天原説の天照大神の古墳」といわれ、竹矢来で囲まれた神聖な場所であったという。

中心をなす83は、大堀切の高い土塁を背にする三角形の削平地で、84～86が帯曲輪状に



第40图 大堀切周辺遺構図 (S=1/500)

前面を取り巻く。84から85に入る道があるが、これが本来の道と考えられ、83の南端が突出して虎口となる。また、本坊跡からここに至るまでに堀切㊦・㊧、堅堀㊨などを配置している。

83の中央の落ち込み遺構は、兵士の駐屯地的な役割を果たしていたのではないだろうか。

大堀切㊦は、山頂からの尾根を完全に遮断し、加えて東側には堅堀㊨～㊩を設けている。堅堀先端の要所には、87や93などの削平地をおき、山頂へ通じる道は、大堀切の土塁や土塁状の88などで屈曲をよぎなくされている。

このように見ていくと、83を中心とする本坊跡背後の遺構群は、相対的に城郭遺構として捉えることができるのではないだろうか。

9 南西尾根部 (第41図)

集中する坊跡群から南西へ延びる尾根上では、この尾根を切断する堀切㊦などの城郭遺構を確認した。天然の谷を堅堀状に深くV字に抉ったと思われる㊰・㊱とともに、弥高寺の南西側の守りを強く意識した防御施設である。

削平地74～76は、これらの堀に伴うものと考えられ、南西に面をそろえる70～73も中心部の坊跡群とは性格を異にするものであろう。

10 坊跡をめぐる道 (第42図)

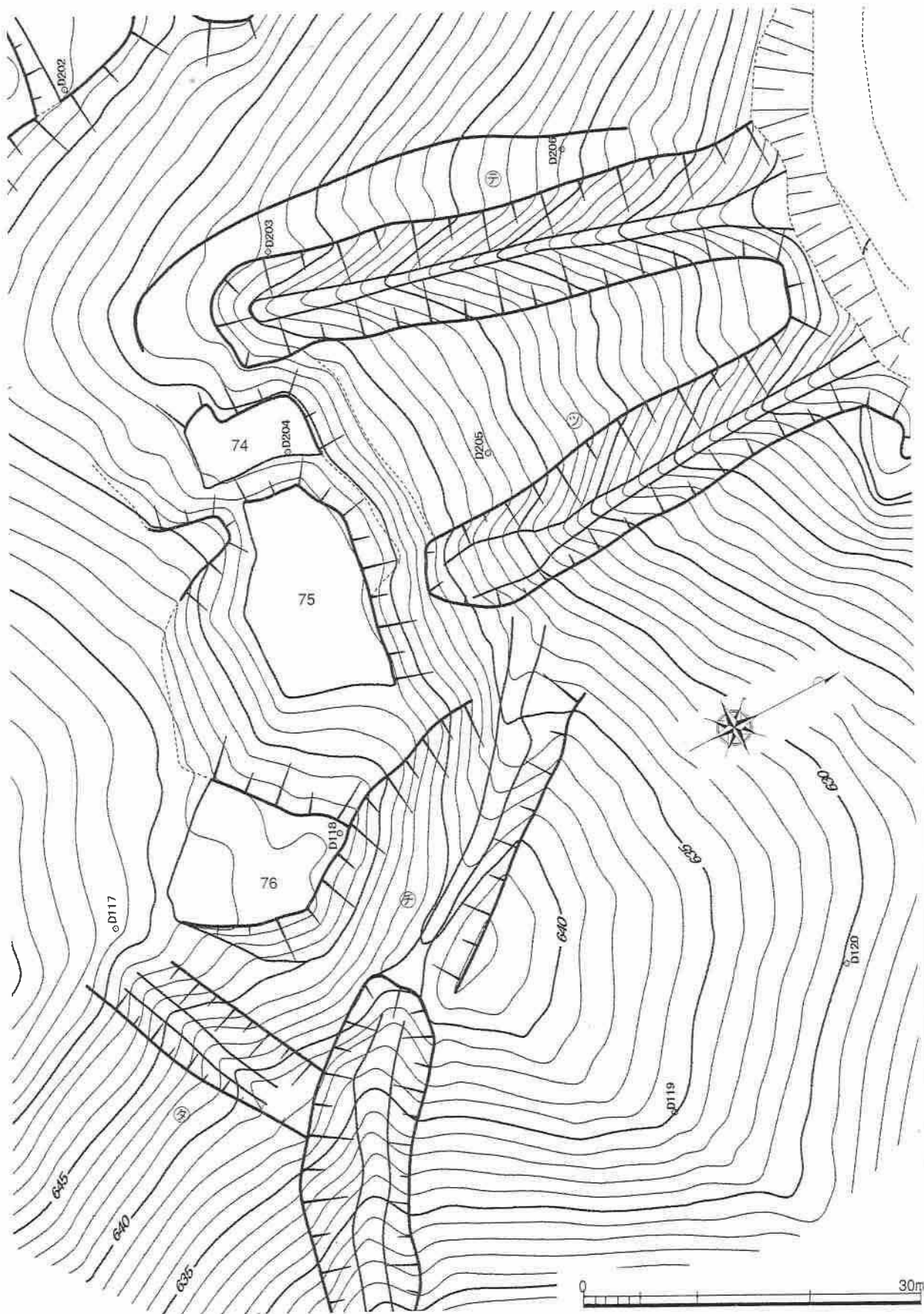
弥高寺跡中心部では、坊跡群の中を縫うように道状遺構が走っており、ほとんどの坊で入り口および主要な道である中央道からの経路を確認することができた。

中央道の西側に隣接する坊跡(2・5・8・11)は土塁の切れる南西隅に入り口を持ち、5はさらに6・7へと水平に並ぶ削平地を結ぶ。15も16・18・21をほぼ水平につなぐ。本坊跡に近い2～4は、本坊跡の西側虎口から直接結ばれ、特に2と東側の33は土塁囲いのうえ、他の削平地と結ばず単独で存在しているようにみえる。9は中央の道と土塁で遮断されているために入り口は不明である。

東側の削平地は、南東に向けて階段状に展開するために道も順番に斜面を下って削平地を結ぶ。中央道に近い削平地は土塁を持つものが多く、南辺の土塁の中央付近を切って入り口とする(33・37・40・41)。39・43は中央道から直接入るようだ。44は45と一体のものと考えられ、両者の境には南北に土塁が設けられ虎口状を呈す。

東側の道は各削平地を連続して複雑につないでいるのが特徴で、例えば中央道から削平地39の北西隅に入る道は、まっすぐ進んで37、38、34を経由して31へ。34で南下すると38の北側入り口を経て41、35、ここで分かれて36と42に至るという具合である。このため、南北方向を中心に2ヶ所の出入り口を持つものも多い(31・34・38・41・42・44・52・54・59・60)。

いずれにしても、中央道からは中心部のほとんどの削平地に行くことが可能で、複雑かつ効果的に坊跡を結んでいたことがうかがえる。



第41图 南西尾根部遺構図



第42図 坊跡群を結ぶ道想定図

第5章 表採調査

地表面採集による遺物は、京極氏館跡が中心である。熊笹の繁茂する弥高寺跡では、各坊跡を網羅した表面採集はおこなえなかった。上平寺城跡については、土師皿細片を採集したのみである。

京極氏館跡については、各削平地で数ヶ所ずつ2m四方程度の刈り払いを実施し遺物の採集を行った。基本的に掘削は伴っていない。そのほか、京極氏の館部分や庭園跡については、全体的に丁寧な刈り払いと除草作業を行っており、このときに採集された遺物も多い。点数が最も多いのは土師皿である。完形での出土はまれで、実測不可能な破片が大半を占めた。甕や播鉢の破片もあるが、体部がほとんどで実測可能なものはほとんどなかった。

主な採集品には、土師皿、播鉢、越前甕、常滑大甕、青磁（龍泉窯の輪花文皿・盤）などがあり、時期が若干下るが志野焼の破片も見られる。

各削平地で採集した遺物は以下の通りである。（削平地の番号は第9図参照）

削平地9：土師皿、常滑大甕、瀬戸播鉢、越前片口、碁石

削平地12（御屋形）：土師皿、常滑大甕、越前大甕、瀬戸播鉢、青磁輪花文皿、青磁碗、近世陶磁、近世瓦、碁石

削平地13：土師皿、青磁

削平地14：土師皿、近世陶磁

削平地17：土師皿

削平地18：土師皿、常滑大甕、越前大甕、瀬戸播鉢、志野向付、近世陶磁

削平地22：土師皿

削平地24：土師皿、志野

削平地28：土師皿、甕

削平地29：土師皿、常滑大甕、志野碗

削平地31：土師皿

削平地32：土師皿、陶器片

ここでは、実測可能な遺物について図示する（第43図）。

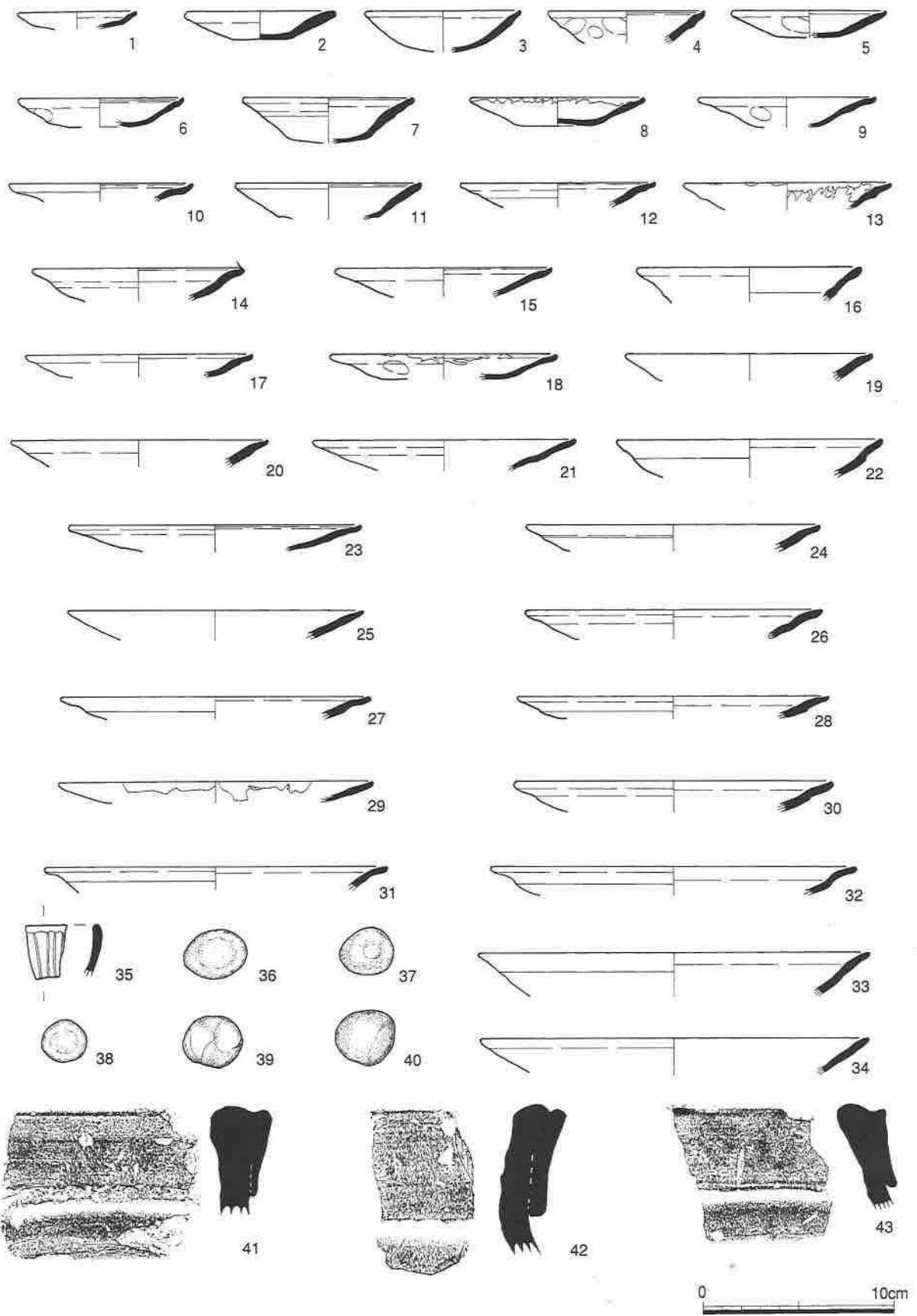
土師皿は、17・31・34が京極氏の館の一段下の削平地13、33が削平地14、25が削平地24で採集したもののはかは、いずれも京極氏の館跡12での表採遺物である。口径は6.4cmから20.6cmを測る。すべて手づくねのもので、ほとんどが口縁端部に1段のナデ調整を施し外反させている。16世紀前半の遺物である。

16は陶器の皿で灰黄色の釉薬を施す。

35は青磁の碗で、薄緑色の釉薬がかかる。

41～43は、常滑焼大甕の口縁部である。いずれも京極氏の館跡で採集した。

36～40は、碁石と思われる直径3cm前後の平らな円礫である。暗灰色を呈す。



第43图 表採遺物実測図

第6章 発掘調査

第1節 発掘調査の経過

ここでは、上平寺遺跡において、民家取り壊しに伴って確認調査を行ったので、調査結果について報告する。調査箇所は、絵図の諸土屋敷に当たる部分で、杉本坊門前の西側に当たる。かつて杉本坊の鐘楼があったといい、その後、平成15年まで民家が建っていた。周辺では砂防工事等が進められていて、開発行為のおよぶ危険性の高い地域である。

発掘対象面積は約48m²で、調査は、重機によって遺構検出面直上まで除去したのち、作業員による遺構の検出と遺構内の掘削、遺物の検出を行い、写真撮影と実測図の作成により記録した。調査は、平成16年6月9日から7月6日まで行った。

第2節 発掘調査の結果

1 層 序

調査地点は、絵図の「諸土屋敷」の一部である。調査前の高さは約313mを測る。検出した遺構面は上下二段に分かれており、比高差は70～100cmである。この段は、現状の杉本坊や家屋がほぼ東西に軸を揃えているのに比べ、南西―北東方向に振っている。上段には、2条の溝状遺構と土坑がある。下段は多くのピットと不整形の土坑があり、東端の段差部分で、土師皿の一括投棄遺構を検出した。土層の堆積は、上段では約20cmの表土を剥ぐと、明茶色粘質土（砂混り）、明茶色粘質土が約20cmづつ堆積し、遺構面の黄色粘質土となる。下段東端は、表土（約20cm）・砂混り明茶色粘質土（約15cm）・明茶色粘質土（約45cm）・砂利混りの茶褐色粘質土（約35cm）・黒色土（約30cm）が堆積し遺構面となる。黒色土には多くの土師皿が入る。

2 遺 構（第45・46図）

SD 1・2は南北に並ぶ溝状遺構で、長さ約2.5m、深さ約20mを測る。調査区北側にある杉本坊の門や石垣と並行することから関連する遺構とも考えられる。SK 1・3・4は、それぞれ円形・隅丸方形・長方形の土坑で、SD 1・2と並ぶ。SK 7は焼土が混じる攪乱土層で、斜面を削り込んでいることから下段整地後の遺構である。P 1～6は、直径30～40cm、深さ3～18cmのピットで、埋土は黒色土である。P 1～4は直線状に並ぶ。下段の西端には多くのピットがあるがその性格はわからない。

特筆すべき遺構として、土師皿の一括投棄遺構がある。トレンチ東端の斜面部で検出したもので、今回の遺物のほとんどがここからの出土で、図化した土師皿約169点、他に播鉢

が2点ある。土師皿間に何層かの黒色土の堆積があり、複数回に分けて投棄されたものと思われる。また、斜面はここで北側にえぐれている。

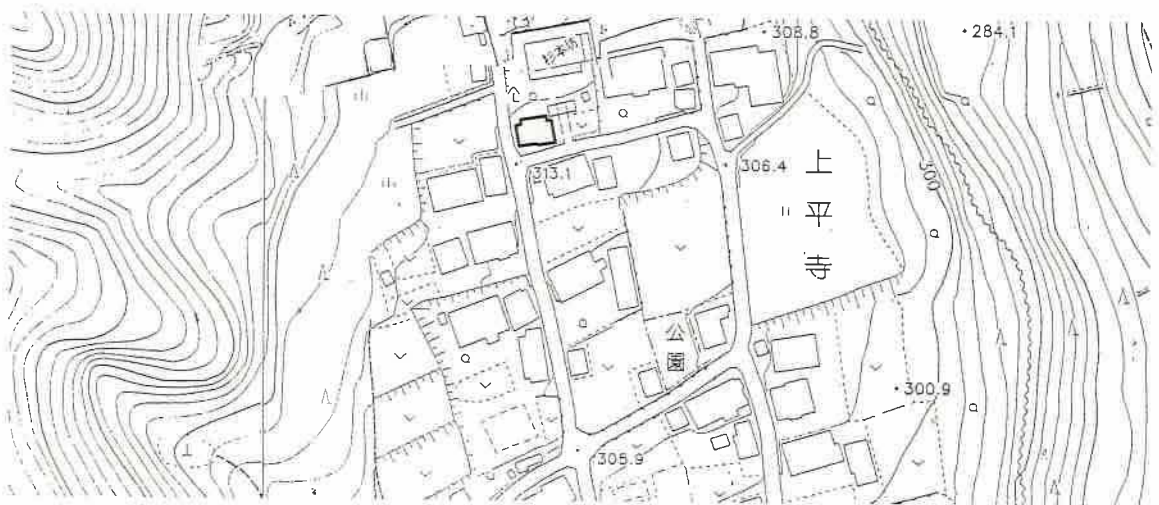
3 遺物 (第47～50図)

出土遺物のうち1～85までは、一括投棄遺構の上層からの出土で、86～152までが比較的下層。153以下は周辺からの出土である。いずれも京極氏時代の遺物である。これらを一括して土師皿の口径の法量に注目すると、①8cm以上～9.5cm未満がもっとも多く全体の約31%を占める。ついで、②7cm以上～7.5cm未満、③13cm以上～13.5cm未満となる。①は、今までの上平寺遺跡での調査で中型品として取り扱ったもので、口縁部を横ナデにより外反させる丁寧な作りのものが多い。また、内面の底部と体部との屈曲部にナデ上げる際に生じた凹線が残るものがある。②は作りが雑で、口縁の波打つものが多い。薄手で内面は比較的平滑に仕上げ、体部外面には指頭圧痕が残る。①同様の内面ナデ上げ痕が見られるものもある。

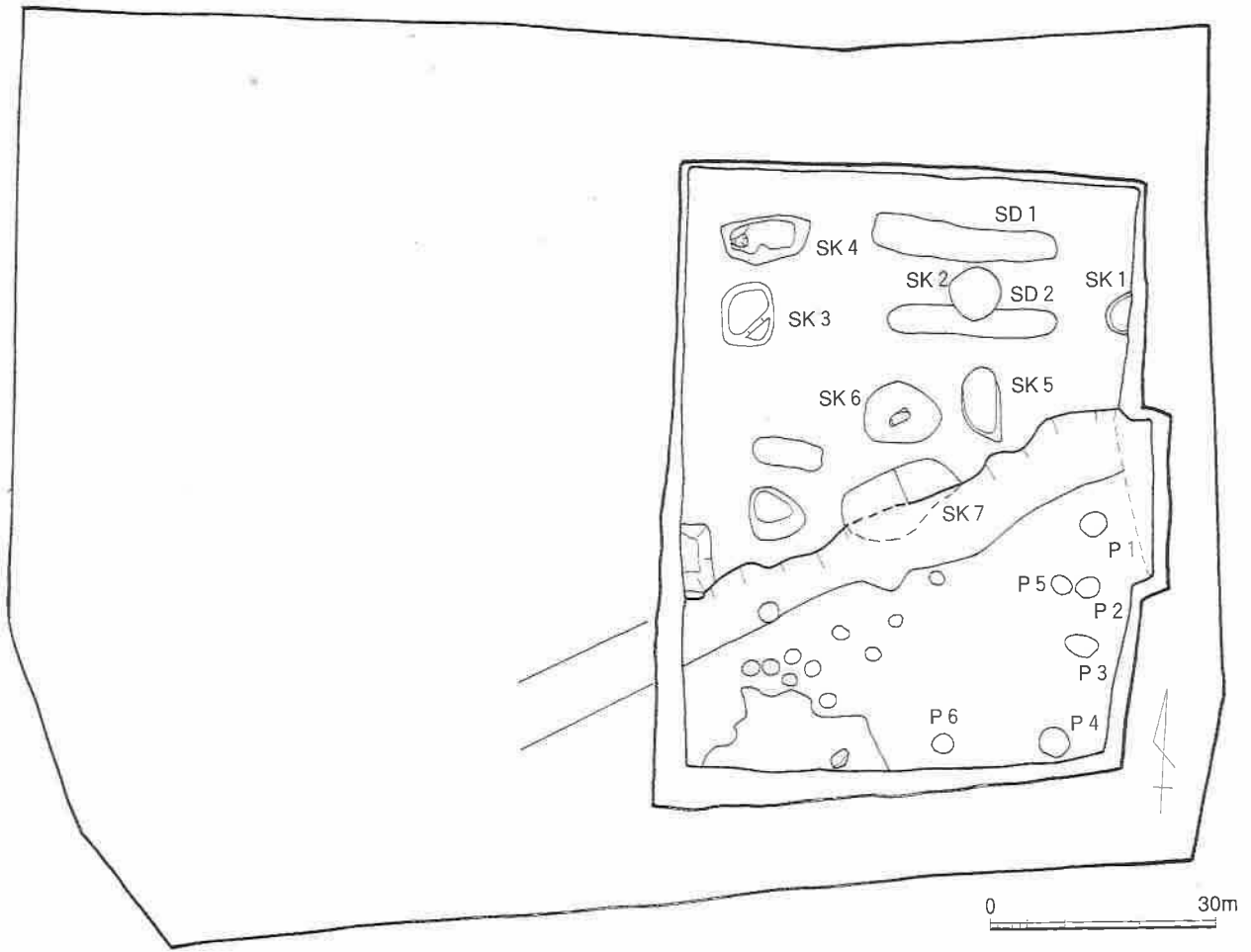
この169点の土師皿の中で、口縁部に煤やタールが付着して灯明皿と考えられるものはわずか6点である。法量は8.4～11.0cmの間に分布し、この結果も今までの調査結果に類似する。

第3節 小 結

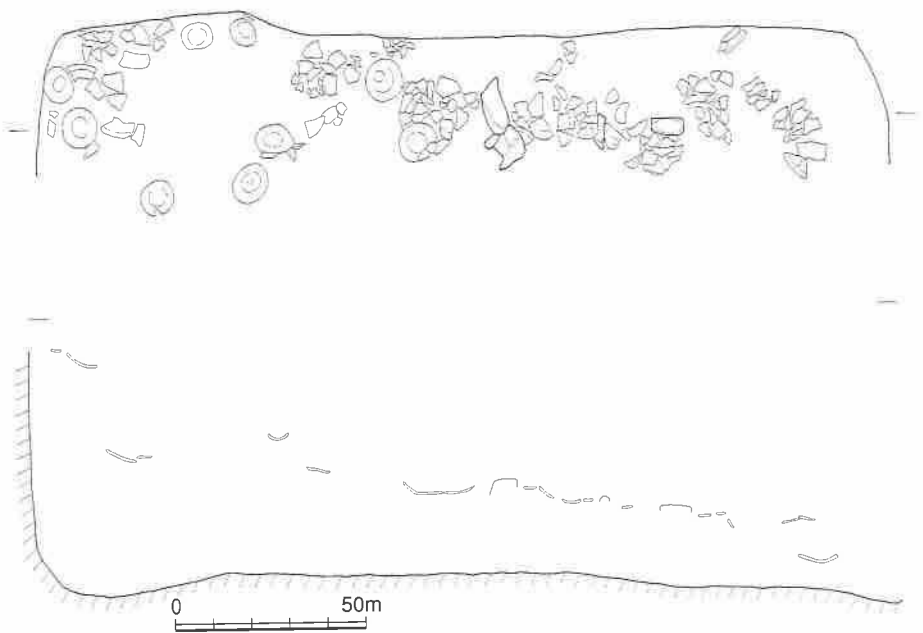
今回の確認調査では、調査範囲が狭いことから明瞭な建物等の遺構を検出することができなかった。しかし、上下二段の遺構面を検出し、この遺構面の斜面で土師皿の一括投棄遺構を検出しており、この面が京極氏時代の遺構面である可能性が高い。さらに、現在の屋敷区画と若干ずれていることを確認したことは、当初の屋敷配置が、より自然に近い北西から南東へ藤古川に落ちる斜面を利用していた可能性が考えられ、今後の調査の指標となった。



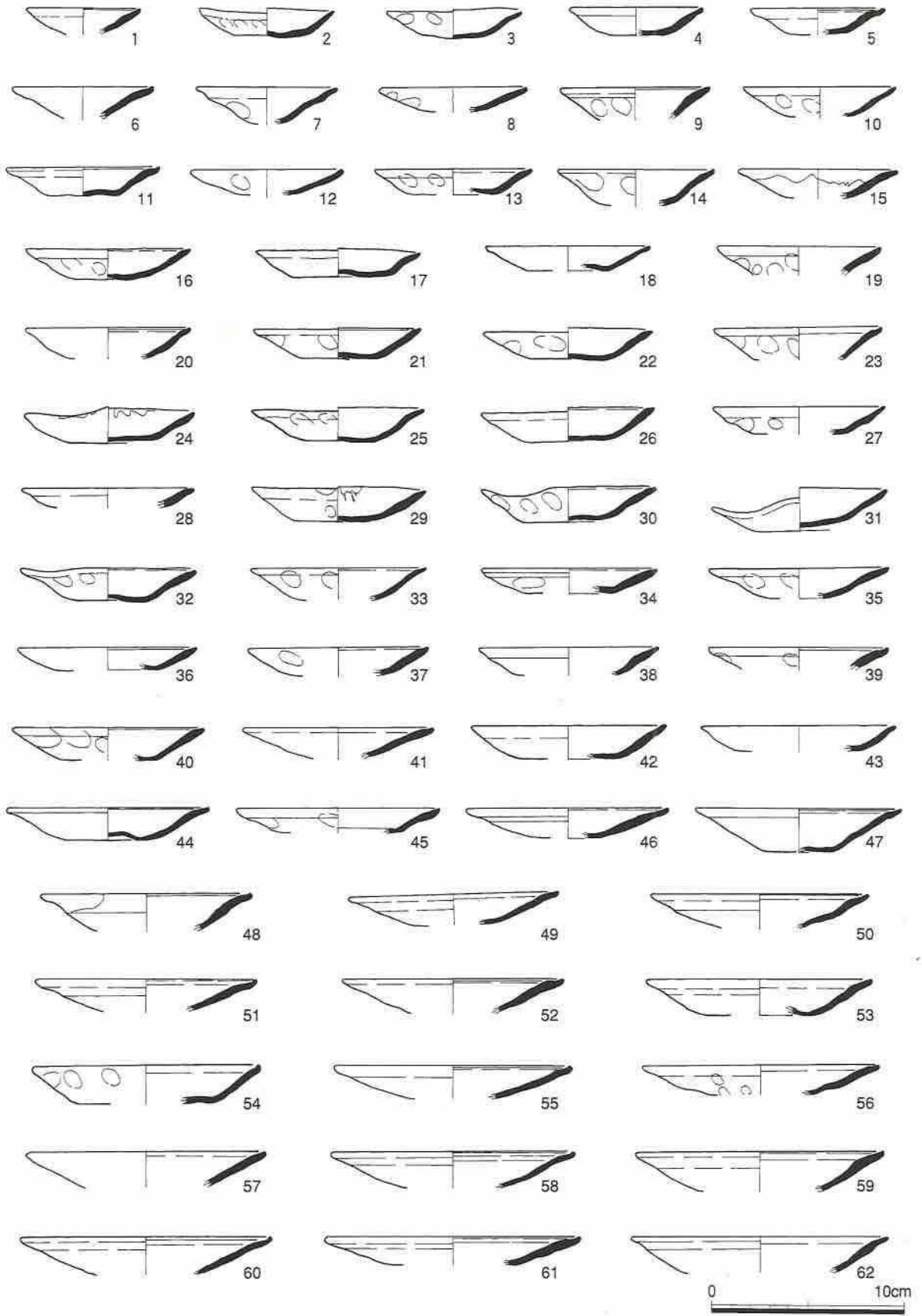
第44図 調査地位置図



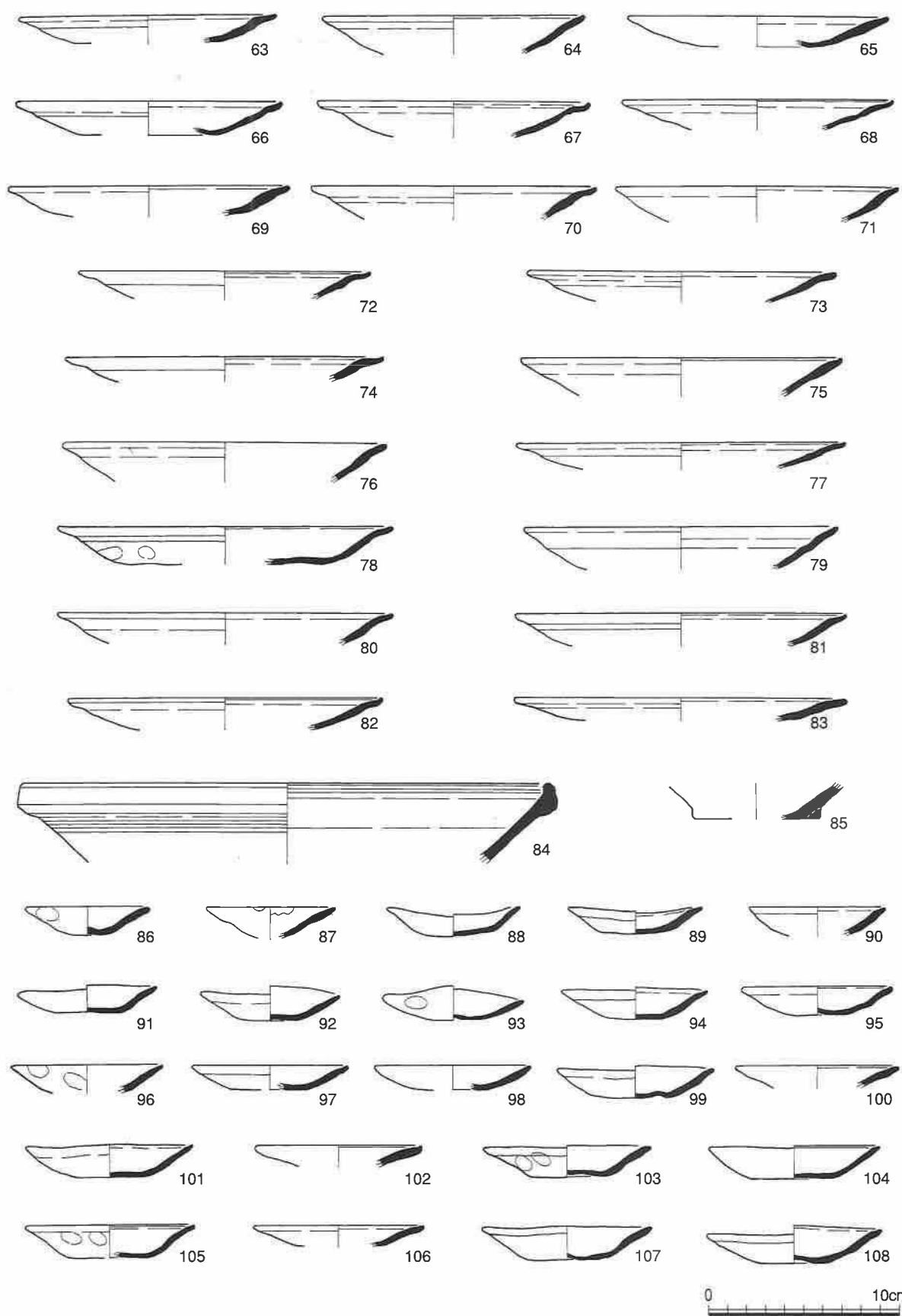
第45図 検出遺構平面図



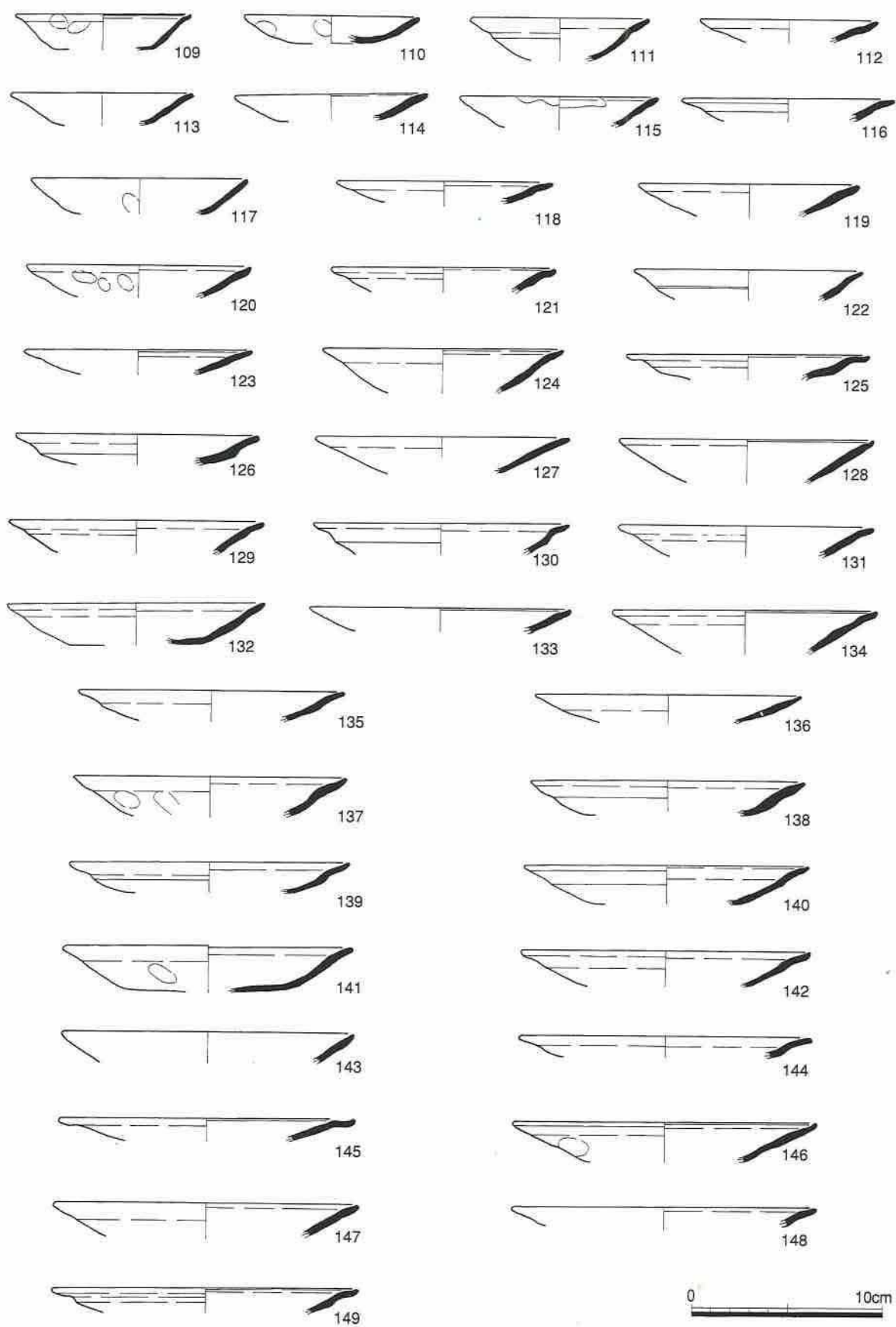
第46図 土師皿一括投棄遺構実測図



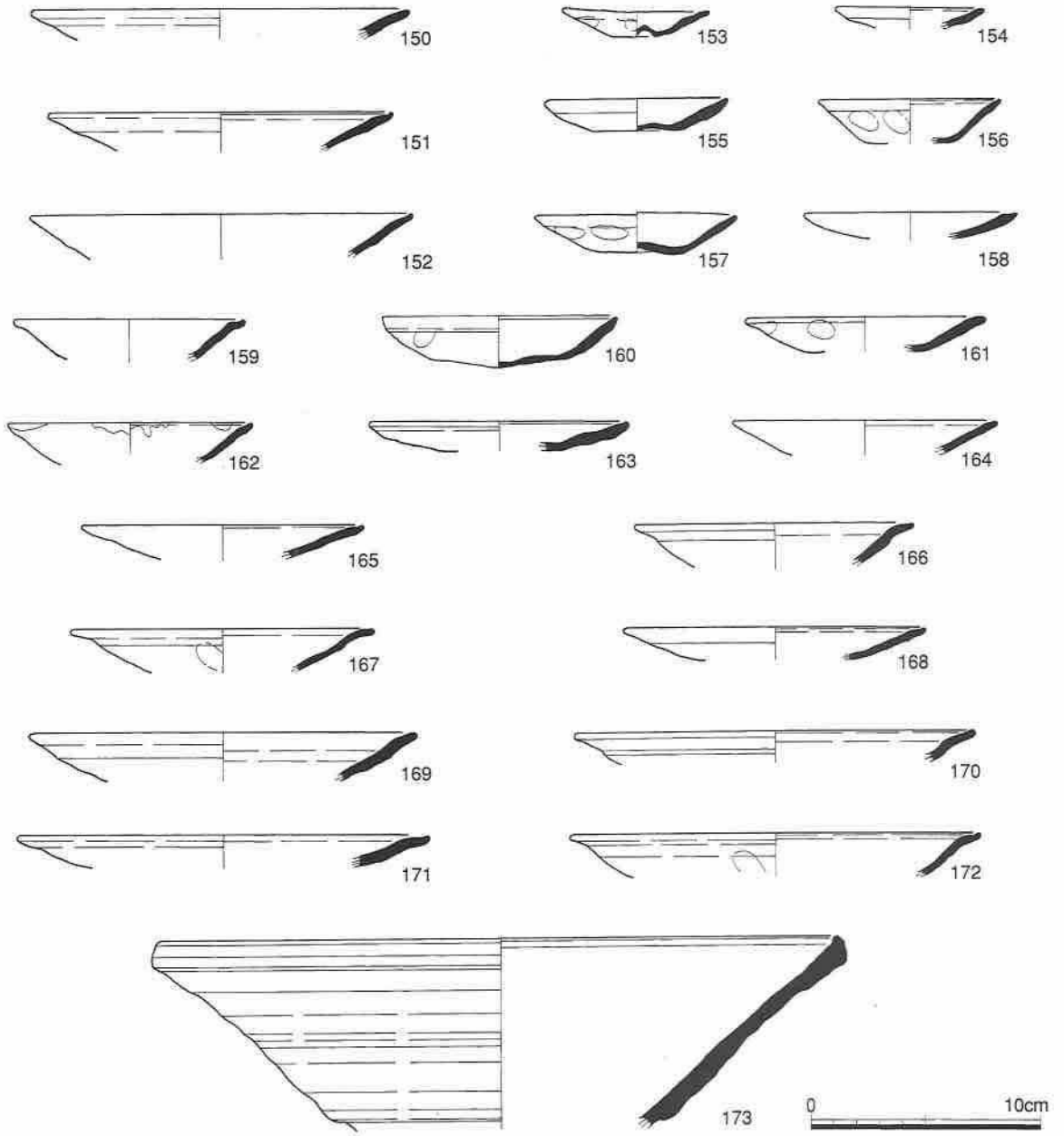
第47图 出土遺物実測図(1)



第48図 出土遺物実測図(2)



第49图 出土遺物実測図(3)



第50图 出土遺物実測図(4)

第7章 付論

『上平寺城絵図』保存修復事業報告

第1節 絵図の評価

ここでは、京極氏遺跡を解明するための重要な資料である『上平寺城絵図』を、永く保管するために伊吹町教育委員会において保存修復事業を行ったので、その記録を紹介する。

伊吹町役場が所蔵する『上平寺城絵図』は、平成6年3月に長浜市内の古美術店から購入したもので、以前は、坂田郡近江町長沢の田辺家に所蔵されていた。田辺氏は、京極氏根本被官の今井氏の重臣で、浅井時代には長沢城在番をしていた。

絵図の構成は、伊吹山頂を北にして、山腹の上平寺城、山麓の京極氏館、その南に城下町と越前街道（のちの北国脇往還）、西側尾根上の重臣屋敷と要害谷、東は河戸川（藤古川）をはさんで長福寺跡を描いている。

各遺跡ともに現状遺構と比較して正確に描かれており、絵図の記載は伝承地名とも一致するものがある。本図は、江戸時代の比較的早い時期に描かれたといわれているが、現地の遺構を忠実に描き、伝承を加味して作成された信憑性の高いものと考えられる。戦国大名の居館周辺の様子を描いた絵図として貴重な資料である。

上平寺城の絵図は、本図のほかに2点が知られている。①林家所蔵絵図（伊吹町藤川）と②尾木家所蔵絵図（伊吹町大清水）であるが、①②ともに伊吹町本を元本にして描かれた可能性が高い。

絵図の描かれた時期について示唆する描写として「御廟所」がある。伊吹町本では故意に削られているが、①②ではともに石積みで囲まれた3基の五輪塔が描かれている。現在ここには、永正3年銘のものなど大形の五輪塔が3基ある。地元の伝承では、かつては京極高次の墓（宝篋印塔）もここにあり、これだけが徳源院（山東町清滝）に持っていかれたという。丸亀藩主京極高豊が徳源院を復興し、三重塔を建立して周辺に散在していた歴代の宝篋印塔を集めたのは寛文12年（1672）である。伝承に従い絵図を信頼するなら、3基の五輪塔は、現存の3基を描いており、その時期は高次の宝篋印塔が無くなった寛文12年以降ということになる。しかし、絵図の記載からそこまでの信憑性を求めるのは無理があるかもしれない。ここでは一つの可能性として指摘しておきたい。

第2節 修理事業の概要

1 修理事業概要

1. 資料名 紙本著色 上平寺城絵図 一幅
2. 所有者 伊吹町役場
3. 事業主 伊吹町役場
4. 修理年月日 平成16年5月20日～10月6日
5. 修理施工者 坂田墨珠堂（坂田雅之）

2 修理前の資料の構造

1. 本紙種別 紙本著色、紙質は楮紙
2. 本紙法量 84.6cm × 101.5cm
3. 資料の状態

①本紙欠失箇所

人為的に本紙の一部が破りとられ、欠失していた。折損の進行に伴い、折れ山が欠落していた。また、本紙の欠失箇所よりも大きく補紙が補填されており、本紙料紙との重なりが生じ、新たな亀裂、擦れ等の損傷が懸念された。補紙は本紙料紙と異なる紙で補填されていて、違和感が生じていた。

②図様のズレ

旧修理時に施された本紙紙継の不具合により、図様にズレが生じていた。

③経年による染み・付着物等の汚れ

経年による煤等の汚れが、本紙画面全面に生じていた。また、虫糞や鳥糞と思われる汚れが生じていた。

④折損及び擦傷

裏打ちの糊の硬化や経年による劣化に伴い、著しい横折れが生じていた。また、折損の進行に伴い、折れ山が擦れ、欠落・亀裂が生じている箇所も確認された。

⑤絵具層の剥離・剥落

経年により、絵具膠質の脆弱化が生じていた。

3 修理方針

1. 処置

①本紙欠落箇所

繊維組成検査を行い、結果をもとに坂田墨珠堂にて同組成の繊維で補修紙を作製した。裏打ち除去後に、旧修理箇所の補修材を取り除き、欠失箇所には、上記の補修紙にて補紙を施した。その際、本紙料紙と補修紙の重なりを極力生じさせないように、透過光にて確認しながら補填作業を行った。最後に、補修紙補填箇所のみ本紙地色に合

わせた補彩を施した。

② 図様ズレの修正

図様のズレを、本紙継目を整え修正した。

③ 経年による染み・付着物等の汚れ

本紙表面の汚れ等を絵刷毛等にて乾燥状態で除去した。ろ過水を使用し、給水紙に汚れを吸着させて除去した。鳥糞については、プラスチック消しゴムの角面を使用し物理的に除去した。

※化学変化・彩色個所への影響を考慮して、薬品使用等の過剰処置は行わなかった。

④ 折損及び擦傷

折損個所に増裏打ちを行ったあと、折れ伏せを施し、折損を修復した。また、各裏打ち紙の厚さを調整し、全体の厚さ・強度を整えて仕立てた。巻き径を大きくすることで、曲げにより生じる折れの影響を緩和することを目的に、桐太巻添軸を新調した。

⑤ 絵具層の剥離・剥落

膠水で剥落止めを施した。剥落止めにはウサギ膠を使用した。濃度（1～3%）、処置方法、回数は各部位絵具の状態により、随時検討・確認しながら行った。

※剥落してしまった個所への彩色は、オリジナルを尊重するために行わなかった。

2. その他

① 伊吹山（北）が画面上になるように画面の上下を変更し、表具装に仕立てた。

② 絹織物を使用した裂表装に変更した（表装の形式は修理前同様の袋表具）。

4 修理工程の概要

1. 修理前調査：記録写真撮影・カルテ作成（寸法測定、損傷個所・状態の記録）
2. 彩色個所の脆弱化状態を調査したあと、膠水にて剥落止め
3. 表装を解体し、旧裏打ち紙を除去
4. 本紙表面の汚れ等をろ過水にて吸水紙に吸着させ除去
5. 旧肌裏紙を除去
6. C染色液を用いた繊維組成検査により本紙料紙繊維種の同定
7. 本紙と同組成の補修紙を選択・作製
8. 本紙欠失個所に補修紙を補填
9. 楮紙（美濃紙）にて小麦澱粉糊を用い肌裏打ち
10. 楮紙（美栖紙）にて古糊を用い増裏打ちを行ったあと、仮張り
11. 折り伏せを入れ、折れを修復
12. 仮張りされた本紙と表装裂地を軸装の形にし付廻し
13. 楮紙（美栖紙）にて古糊を用い中裏打ち
14. 楮紙（宇陀紙）にて古糊を用い総裏打ち
15. 補紙を施した個所に補彩

16. 表装裂地・軸首・中軸・発装・啄木を新調し、軸装に仕立て
17. 桐太卷添軸・桐屋郎箱を新調

5 修理後の状況

絵図を桐太卷添軸に巻き、桐保存箱に収める。修理後の法量は、本紙103cm × 85.5cm、全体寸法は181.5cm × 100.5cm。

※本稿の執筆は、坂田墨珠堂の「修理報告書」を参考にして行いました。



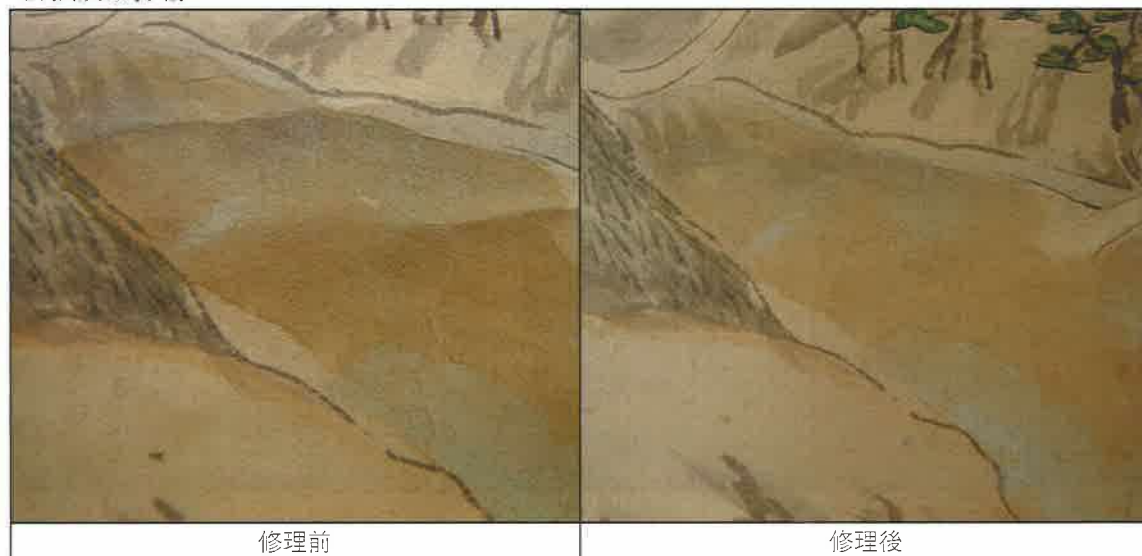
図様のズレ修正



付着物等の汚れ



折損及び擦傷



修理行程



剥落止め



クリーニング終了



旧裏紙除去



肌裏打ち



折れ伏せ入れ



補彩

第8章 ま と め

1 全体構成

10カ年の測量調査の結果、広大な京極氏遺跡群の核となる京極氏館跡・庭園跡・家臣屋敷跡・上平寺城跡・弥高寺跡のそれぞれの構造が判明した。これらの遺跡を包括して、平成16年2月に国史跡「京極氏遺跡—京極氏城館跡・弥高寺跡—」として指定されたが、現状で捉えられる各遺跡の姿は、それぞれの最終段階を見ているに過ぎない。それぞれの遺跡は、空間的にも時間的にも密接につながりながら変貌してきた。

京極氏の城館遺跡の調査として出発した今回の分布調査は、その過程の中で伊吹山の山岳信仰を抜きにして考えることは不可能となった。「京極氏遺跡」という指定名称のなかで、若干の違和感があった弥高寺跡は、その基本構造はあくまで寺院そのものであり山岳寺院の一典型といえることができる。しかし、今回の調査では、寺には不必要な堀切や塹堀を多く確認している。逆に、伊吹山中腹の上平寺城跡や山麓の京極氏館跡の前身を、山岳寺院「上平寺」に比定する指摘がある。

今回の調査結果は、山岳寺院の城塞化、さらに守護館への変遷といった寺院と城館の関係を解明するための資料を提供できたと考えている。これは、京極氏遺跡を検討する際の大きな課題のひとつである。

今回は、調査の中で判明してきた検討されるべき内容のいくつかを取り上げることで、今後の調査の課題として提示し、まとめにかえたい。

2 京極氏館跡

京極氏館跡は、いうまでもなく北近江の守護所である。しかし、上平寺の位置を考えると、北近江にしてもあまりにも東に寄り過ぎているという指摘をたびたびされる。上平寺から岐阜県（美濃国）の県境まで約2km、逆に現在の北近江の中心地長浜市までは約15kmである。城下を流れる藤古川は美濃から伊勢に流れ、地形的にも東国を向いている。上平寺に京極高濑が守護所を整備した理由について、中井均氏は城下の南端を通過する越前街道（北国脇往還）の存在を指摘している。浅井氏の小谷城も同街道を取り込んでおり、北近江の大名が軍事的・経済的理由から脇往還を重要視したという。さらに、山麓に寺院・上平寺があり、これを利用すると背後のちょうどいい位置に上平寺城の山があるという地理的条件をあげている。

京極氏の本拠地は長く柏原館（山東町清滝）にあり、伊吹山中腹の太平寺に山城があったという。柏原・伊吹という坂田郡の東部を本拠とした京極高濑が、城館を整備するための既存条件として、宗教施設があり削平地が整っていた上平寺に守護所を構えたと考えることができる。

京極氏館跡での表採遺物については、数が少なく各削平地の性格を検討する資料にはな

りえない。今後、発掘調査等を行い資料の増加を待ちたい。また、表採遺物には、京極氏時代以前の遺物は含まれていない。

京極氏が日常の館を構えたと考えられる削平地12は、東西約68m×南北約37mで一般的な守護館としては小規模であることを第4章第2節2項で報告した。しかし、ここを寺院・上平寺を利用したと仮定した場合、20m×15m程度の坊跡が大半を占める弥高寺と比べると、京極氏館の中央道路東側の削平地12～15、18などはかなり大規模である。逆に、西側の削平地23～33あたりは、20m×15m程度のもが多い。さらに、西側の削平地は、弥高寺跡のように等高線にならって展開しているのに対し、東側は各削平地が長軸を揃えて整然と配置されている。このことは、西側の削平地群は、もともとの上平寺の坊跡の様子を残しており、東側は京極氏によって大きく改変された姿であるということが想定できないだろうか。東側についても、寺院であったころはもう少し小区画の削平地が並んでいたものと思われる。

ただし、これはあくまでも京極氏館が上平寺を利用したと仮定した場合の推定であり、今後の調査で寺院遺構や関連遺物が検出されることによって解明されるであろう。また、京極氏が入ってからの社寺のあり方についても検討する必要がある。絵図にあるように本堂と伊吹大権現のみを御屋形の上にあげ、他の寺坊は城下部分に移転・展開させたとの推定も可能であるが、今後の調査・検討を待ちたい。

3 家臣屋敷と城下

家臣屋敷の調査では、絵図から若宮氏・加州氏屋敷と推定した区画のみ、三方を巨大な土塁で囲まれていた。特に要害谷に面する土塁は高さ約3.5m、基底部幅約10mで、いまは町道川戸線で削平された北側の土塁がこれに次ぐ。これほど巨大な土塁は他になく、若宮氏・加州氏屋敷が城下の西側を画す重要な地点に配置されていることがわかる。

絵図に描かれた家臣屋敷の6人の家臣名（若宮・加州・多賀・浅見・黒田・西野）について、『概報Ⅱ』のなかで太田浩司氏は、京極高広段階の家臣が含まれてないことや、高濑時代後半の執権である上坂氏屋敷の伝承がないことなどから、「高濑時代でも初期の多賀氏執権時代の家臣団屋敷と推定することも可能である」としている。

次に、今回の測量調査の範囲には含まれていないが、城下部分について若干の考察を加えたい。第6章で報告した発掘調査では、現在の長軸を南北にあわせた屋敷区画とは若干南西へ傾いた二段の区画を確認した。この区画ラインは、本来の自然地形に沿っており、さらに絵図の一之御門へ家臣屋敷跡の堀切道から斜めに入る道とほぼ並行する。この道が古い道であり、京極氏は、新しく南北に走る大手道とその両側に直線道路を配置することにより、地形を無視した都市計画を行ったのではないだろうか。また、平成11・12年度に県教育委員会が行った調査では、外堀より南に伸びる直線の大手道の痕跡が確認されている。今後、発掘成果と絵図の検討が必要である。

4 上平寺城跡

上平寺城跡で確認したぶ厚い土塁で囲まれた曲輪、外柵形虎口、尾根先端に放射状に設けられた豎堀群は、当遺跡でもっとも見ごたえのある遺構である。これらの遺構を築城したのは、元亀元年（1570）の織田信長の浅井・朝倉攻めに対抗するために、国境封鎖を目的にたけくらべ（長比城）、かりやす（上平寺城）の両要害を改修した浅井氏で、その築城を担当したのが朝倉氏であることを『概報Ⅲ』で考察した。

そのなかで、上平寺城最大の曲輪10は土塁に囲まれていない。しかし、調査の結果、曲輪内は段差や低い土塁によって区画されていることが確認できた。このような区画は置塩城跡（兵庫県夢前町）などで確認されているが、その性格については今後の検討課題である。

また最近、主郭を独立して設け、ここから延びる中央の道の両側に曲輪が配置される上平寺城の構造が、中世前期の山岳寺院のありようを示していると用田政晴氏が発表した。さらに、この山岳寺院「上平寺」が山を降りて、改修された姿が京極氏館であるという。いままで上平寺城については、純粹に城郭としてとらえられることが多かったが用田氏の見解は今後の調査において重要な視点となる。

5 弥高寺跡

弥高寺の概要については、すでに用田氏が『弥高寺跡調査概報』（昭和61年）で報告し、その測量範囲は山岳寺院・弥高寺の全体像をほぼ網羅している。今回の調査では、『概報』で課題となっていた本坊跡背後の遺構群などを追加した。

先の測量調査は、用田氏がいう中世後期に山上で成熟した典型的な山岳寺院を捉えたものであり、今回の調査は、これに武家勢力による改修の痕跡を追加したものとなった。

昭和60年の調査では、本坊跡も含めて56の坊跡が確認された。今回、南西尾根上の堀切・豎堀を望む地点や、本坊跡の背後、上平寺城へ向う道筋の薬師谷に面した尾根上で大小の削平地を確認し、「弥高百坊」の通称にたがわない数の削平地があることが判明した。

『概報』では、「どの部分が京極氏による改修個所なのかを見分けることが、難しいことではあるが必要な作業」として課題提示されていた。弥高寺跡の城郭関連遺構としては、前面に長大な空堀をめぐらせ、城郭の柵形虎口状をなす見事な「大門跡」や、本坊西側斜面の豎堀⑤、背後の大堀切⑦などが指摘されてきた。今回の測量調査では、背後の大堀切の前面に帯郭を配した郭状の遺構83があり、その東斜面に4本の豎堀群⑦～⑩、南側にも2本の堀切と豎堀④～⑥が設けられていた。

近年、各地の山岳寺院の調査事例から、山岳寺院は山の中腹に位置し背後のピークを積極的に利用しないことが確認され、これが城塞化された場合は、寺院の坊跡群を利用しつつも、背後のピークに城郭としての防御拠点を新たに設ける例がしばしば見られるという。堀切・豎堀で防御された遺構83は、武家勢力が新たに設けた城郭遺構と考えることができるのではないだろうか。さらに、西斜面と南西尾根上に豎堀群を設けることにより、坊跡群全体を取り込んだ城塞化を成し遂げているのである。

さて、弥高寺跡墓地の発掘調査では、13世紀後半～15世紀末か16世紀初めの遺物が出土している。とくに14世紀代が中心で、この時期に山岳寺院として山上で拡大発展したと思われる。金剛輪寺（秦荘町）の調査でも、12世紀後半以降に必要なに応じて坊地の造成が徐々に進められ、整備が概ね完了するのが14世紀頃までと推定されている。

大門や大堀切・豎堀群の築城者が京極氏か、国境警護の城として上平寺城を改修した浅井氏かは今後の調査の課題ではあるが、墓地の調査からは、ちょうど京極氏が陣を構えた15世紀末以降、墓地としての機能をなくしている。このころから徐々に、弥高寺が城塞化されはじめ、在地の武家勢力である浅井氏の滅亡（1573）を契機として、天正8年（1580）山を下ったのではないだろうか。

6 おわりに

山岳寺院の様相を色濃く残す京極氏遺跡の各遺跡群。今後、大乘峰とよばれる伊吹山頂への修行道や山岳信仰とのかかわりから、伊吹山の全山を含めた息の長い検討が必要になってくるであろう。その中で、山岳寺院の実態、京極氏遺跡の全体像が明らかになることを期待したい。

平成16年度から、町教育委員会では国指定をうけて「国指定史跡京極氏遺跡調査整備委員会」を立ち上げた。今後、遺跡群の保存と活用方針について早急に保存管理計画と基本構想を策定し、これに基づいて調査を進めていかななくてはならない。今回の測量範囲では、ほとんど考古学的調査が行われていない。今後、文献調査などと並行しながら年次を追って遺跡の性格、遺存状況などを確認することによって、基本的な保存・整備計画が策定されるであろう。

北近江の守護所上平寺の解明はその緒についたばかりである。

参考・引用文献

(論考)

- 坂田郡教育会 1991 「平安時代」・「墳墓志」・「寺院総説」・「廃寺」
(『改訂近江坂田郡志』)
- 宇野茂樹 1976 「伊吹山寺」(『柴田實先生古稀記念日本史論叢』)
- 滋賀県教育委員会 1975 「大原観音寺文書調査概要」(『大原観音寺文書』)
- 長谷川銀蔵・博美 1985 「上平寺城跡」(『近江の城』16)
- 用田政晴 1985 「弥高百坊の調査について」(『近江の城』16)
- 小和田哲男 1985 「京極氏の内訌と上平寺城」(『近江の城』16)
- 小島道裕 1989 「上平寺城下について―地名と絵図―」
(『近江の城』34、1997年『城と城下』に再録) 新人物往来社
- 中井 均・高橋順之 1994 「上平寺城とその城下―遺構と絵図からの再検討―」
(『近江地方史研究』29.30)
- 蔭山兼治 1994 「戦国期城郭―天台宗寺院の利用法について―」
(同志社大学『文化史学』50)
- 中井 均 1997 「知られざる山城・上平寺城」
(『近江の城―城が語る湖国の戦国史―』) サンライズ出版
- 中井 均 1998 「戦国期城館の庭園」
(『上平寺城跡遺跡群分布調査概要報告書Ⅰ』)伊吹町教育委員会
- 太田浩司 2000 「戦国期京極氏の家臣団―文献史学からの考察―」
(『同上Ⅱ』) 伊吹町教育委員会
- 中井 均 2003 「太尾山城跡の発掘はじまる」
(坂田郡文化財ニュース「佐加太」第18号)
- 中西裕樹 2004 「城郭遺構論からみた山岳寺院利用の城郭―戦国期城郭における削平地の配置場所―」(城館史料学会『城館史料学』第2号)
- 用田政晴 2004 「伊吹・霊山と近江の山岳寺院」
(坂田郡三町歴史講演会 資料)

(書籍)

- 伊吹町史編さん委員会編 1992 『伊吹町史 自然編』伊吹町
- 伊吹町教育委員会編 2003 『京極氏の城・まち・寺』サンライズ出版
- 山崎仁生 2004 『弥高のあゆみ 彌高物語』弥高区

(報告書)

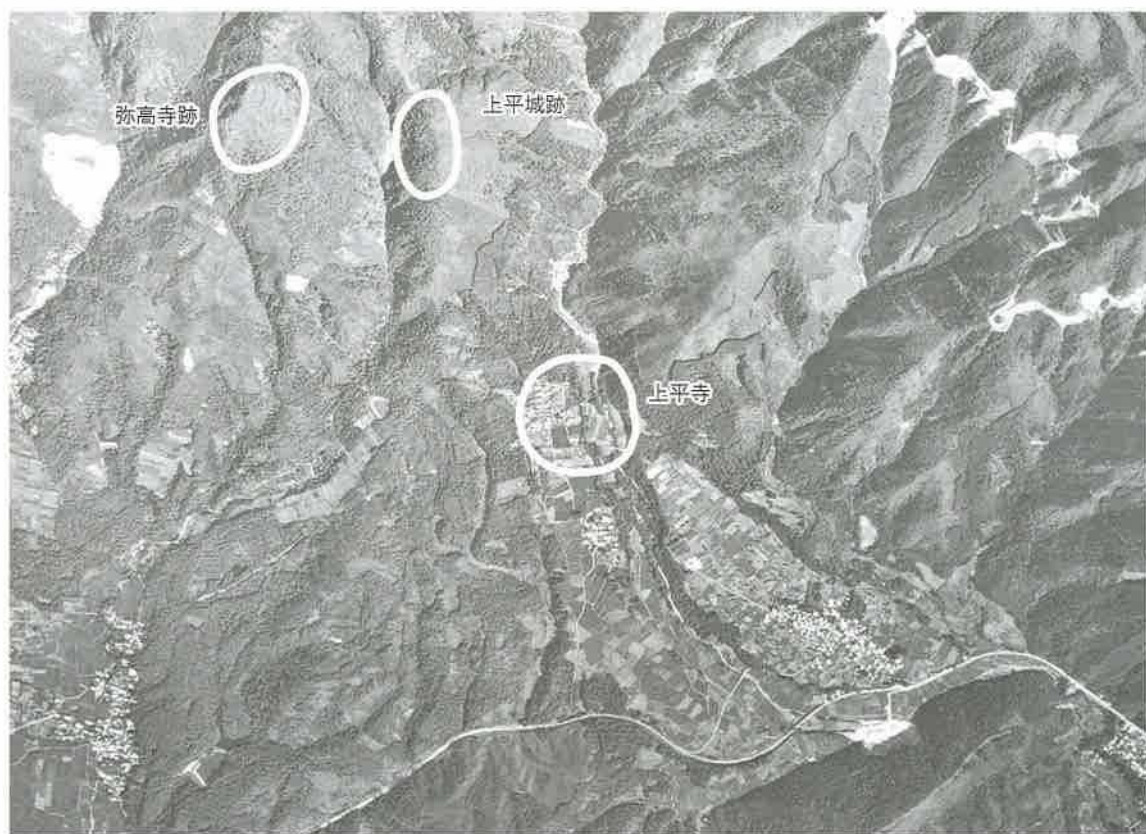
- 樋口 元ほか 1977 『伊吹山寺』(伊吹町文化財 第2集)
- 用田政晴 1986 『弥高寺跡調査概要』(伊吹町文化財調査報告書第1集)

- 高橋順之 1998 『上平寺城跡遺跡群分布調査概要報告書Ⅰ 上平寺館跡』
(同12集)
- 高橋順之 2000 『上平寺城跡遺跡群分布調査概要報告書Ⅱ 高殿地区』
(同13集)
- 稲葉隆宣 2000 『上平寺南館遺跡』滋賀県教育委員会
- 高橋順之 2001 『上平寺遺跡・寺林遺跡』(伊吹町文化財調査報告書第14集)
- 高橋順之 2002 『推定若宮・浅見屋敷跡発掘調査報告書』
(伊吹町文化財報告書第15集)
- 高橋順之 2002 『駒繫跡・杉本坊墓地発掘調査報告書』(同16集)
- 高橋順之 2002 『上平寺城跡遺跡群分布調査概要報告書Ⅲ 上平寺城跡』
(同17集)
- 内田保之・日紫喜勝重 2003 『上平寺遺跡・寺林遺跡』滋賀県教育委員会
- 高橋順之 2004 『上平寺遺跡Ⅱ』(伊吹町文化財報告書第18集)
- 滋賀県教育委員会 1989 『滋賀県中世城郭分布調査』6
- 中村健二 1991 『箕浦城・浄蓮寺遺跡』
(ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書XVIII-9)
- 桂田峰男 1992 『町内遺跡—大原氏館跡・すも塚古墳—』
(山東町埋蔵文化財調査報告書Ⅷ)
- 桂田峰男 1993 『町内遺跡—大原氏館跡・すも塚古墳(第2次)—』(同Ⅸ)
- 桂田峰男 1996 『町内遺跡—大原氏館跡(第3次)・観音寺遺跡—』(同Ⅹ)
- 中井 均 2001 『鎌刃城跡発掘調査概要報告書』
(米原町埋蔵文化財調査報告書XXⅡ)
- 夏原善治 1993 『百濟寺跡分布調査報告書Ⅰ』(愛東町文化財報告書第4集)
- 明日一史 2003 『百濟寺遺跡分布調査報告書Ⅱ』(同10集)
- 林 定信 1983 『金剛輪寺坊跡分布調査報告書Ⅰ』
(秦荘町文化財調査報告書第9集)
- 横井川博之・山村義明・宮崎雅充 2001 『清水山城遺跡発掘調査報告書』
(新旭町文化財調査報告書第1集)
- 横井川博之 2003 『清水山城郭群 確認調査報告書』(同2集)
- 山上雅弘・宮田逸民・中井 均・依藤 保・南 憲和 2002 『置塩城跡総合調査報告書』(夢前町文化財調査報告書第6集)

圖 版



伊吹山全景



上平寺空撮（古写真）



京極氏遺跡空撮（南から）



家臣屋敷跡と城下



館跡入口（内堀）



弾正屋敷跡



隠岐氏屋敷跡



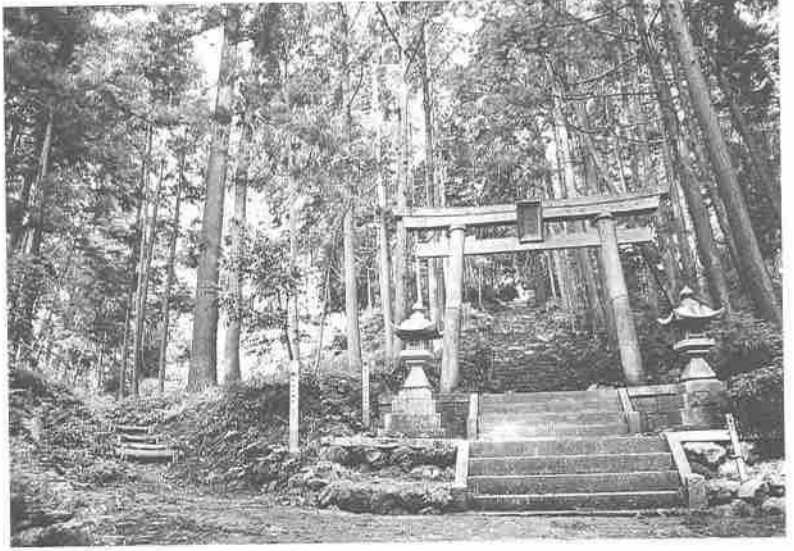
蔵屋敷跡



京極氏館跡



一族の墓地



伊吹神社鳥居



伊吹神社



風呂屋谷



庭園全景（屋敷跡から）

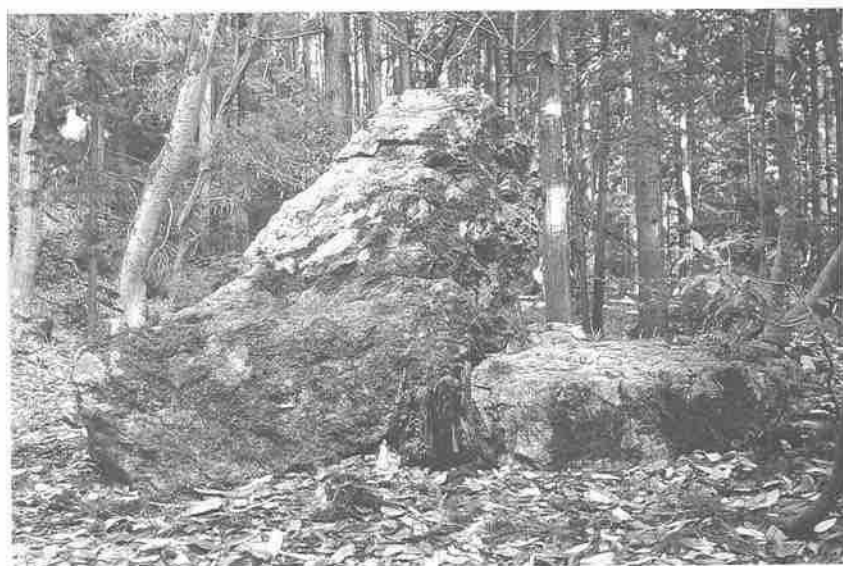


庭園全景
（削平地 9 から）





虎石



虎石



駒繫跡



多賀氏屋敷跡



黒田氏屋敷跡



上平寺城跡遠景（弥高寺跡から）



弥高寺跡遠景（上平寺城跡から）



主郭



曲輪 4



曲輪 10



大堀切㉗



虎口㉘



竪堀㉙



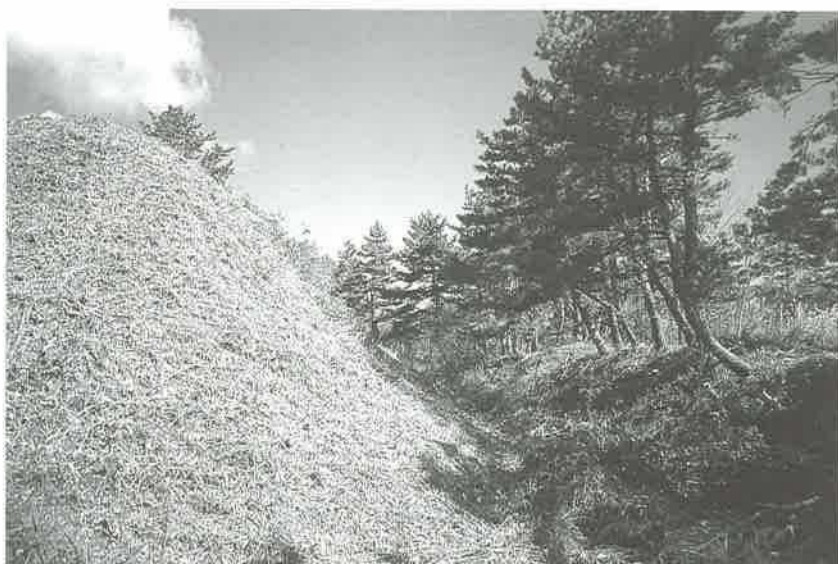
坊跡群



本坊跡



大門跡



大門跡空堀



削平地83



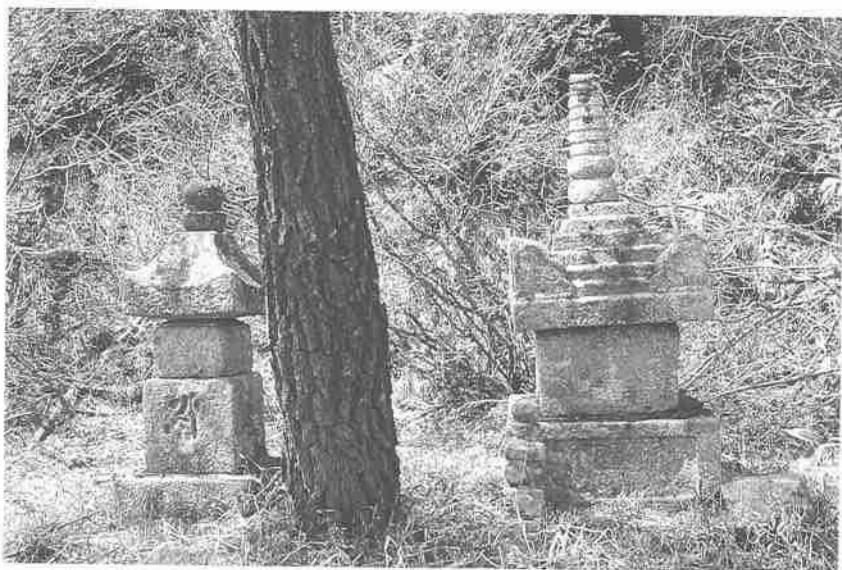
大堀切㊦



豎掘[㊦]



入定窟



宝篋印塔



作業風景



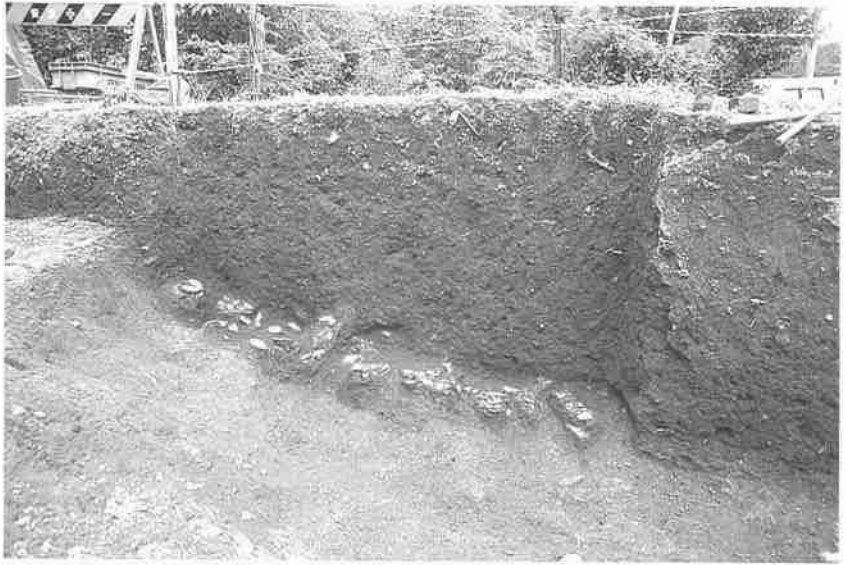
トレンチ全景（南から）



遺構検出状況（南から）



遺構検出状況（西から）



土師皿一括投棄遺構



土師皿一括投棄遺構

報告書抄録

ふりがな	くにしていしせき きょうごくしいせきぶんぷちようさほうこくしよ		
書名	国指定史跡 京極氏遺跡分布調査報告書		
副書名	京極氏城館跡・弥高寺跡		
シリーズ名	伊吹町文化財調査報告書		
シリーズ番号	第19集		
編著者名	高橋順之		
編集機関	米原市調査委員会		
所在地	滋賀県米原市長岡1206番地		
発行年月日	平成17年3月		
所収遺跡名	きょうごくし いせき 京極氏遺跡		
所在地	じょうへいじ やたか ふじかわ 上平寺・弥高・藤川		
コード	市 町 村	25496	遺跡 No. 462-015
北緯	35° 23' 20"		
東経	136° 25'		
調査期間	平成7年4月1日～平成17年3月13日		
調査面積	225,100㎡		
調査原因	分布調査		
種別	城館跡・寺院跡		
主な時代	平安・鎌倉・室町		
主な遺構	屋敷跡・庭園跡・坊跡・堀・土塁		
主な遺物	土師皿・播・鉢・甕・青磁		
特記事項			

伊吹町文化財調査報告書 第19集

国指定史跡

京極氏遺跡分布調査報告書

2005年3月

編集・発行 米原市教育委員会

滋賀県米原市長岡1206番地

TEL 0749-55-8106

印刷・製本 ツチヤ印刷